

---

部品としての私 『I as parts』 series 3rd story.

ほーらい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

部品としての私 『I a s p a r t s』 s e r i e s 3  
r d s t o r y .

### 【Nコード】

N1462L

### 【作者名】

ほーらい

### 【あらすじ】

世界は第三次世界大戦という災厄に包まれていた。その全ての発端である軍事国家ロベミライア。この星を炎に包んだその国の思惑はなんだったのだろうか。

部品として生きる命の物語が始まる。

大人気(?) SF作品、部品シリーズ第三部にして最終章である『

部品としての私』がようやく登場しました。

今まであまり触れなかったロベミライアに焦点が合わせられた作品です。

ロベミライアは何を思って戦争を引き起こしたのか。そしてこの星の運命はどうなるのか。全てがここで語られます。

第一部の『部品としての僕』I a s p a r t s 『 s e r i e  
s 1 s t s t o r y . 『 はこちら <http://ncode.syosetu.com/n6893i/>  
第二部の『部品としての俺』I a s p a r t s 『 s e r i e  
s 2 n d s t o r y . 『 はこちら <http://ncode.syosetu.com/n3150j/>

最終話のあとがき追加しました。部品シリーズの裏話、設定資料等を今後公開します。ほーらいの動向に注意してね！

## 第零話 The Grim Reaper (前書き)

### 警告というか注意書き

例の如く、前作同様バイオレンスな表現がこの作品には多々あります。

前作程度の血飛沫レベルですが、苦手という方はご注意ください。

## 第零話 The Grim Reaper

### 第零話

その少女は死神と呼ばれた。

その少女は女神と呼ばれた。

戦場を奔り、敵を葬り、全てを叩き伏せ、力によって支配する。

その少女に距離は意味を為さず、遙か遠く離れた敵をも一撃の元に葬り去った。

少女は何の疑問も持たずに照準を合わせ、弾を込め、そして引き金を引く。

それだけで全ては終わる。

彼女は理解していた。私は人を壊すために作られた存在である。だから今日も今日とて人を壊す。

何の疑惑も抱かないまま、ただただ黙って引き金を引いた。

手を伝う軽くはない衝動と、それと同時に数百キロ離れた人すら壊す。

そう、彼女は部品の一つなのだ。

ロベミライアという大国を成す一つの歯車に過ぎない。

部品としての私、それが彼女の在り方だ。

そのことに疑念を抱かず、今日も下された命令の通りに人を壊し続けた。

全てが終わる、その日まで……。

## 第零話 The Grim Reaper (後書き)

始めましたね、部品シリーズ第三部。

今まで後書きは次回予告のみでしたが、おそらく活動報告を読んでいる方なんてほとんどいないでしょうから、ここにメッセージをここに書こうと思います。

この作品は遡ることおよそ一年。

去年の3月頃に執筆し、SE小説大賞に出品した『部品としての僕

』I a s p a r t s』 s e r i e s 1 s t s t o r y .

』の続きモノ第三部となっております。

まだ前作までの作品を読んでいない方でもなんとかわかるとは思いますが、前作までを読むことを激しく推奨します。

第一部『部品としての僕』I a s p a r t s』 s e r i e s

1 s t s t o r y 』.

<http://ncode.syosetu.com/n6893>

i /

第二部『部品としての俺』I a s p a r t s』 s e r i e s

2 n d s t o r y 』.

<http://ncode.syosetu.com/n3150>

j /

さて、今まで以上にシリアス度が高い作品ですが、僕の生態を知っている方ならば、「ほーらいにシリアスなんて似合ってるねえよww」とおっしゃる方も多いかと思われま。

シリアスなんて書いてごめんなさい。ホントはギャグのが好きなんです。でも、僕のギャグセンスじゃ誰も笑わせられないと思うので、ギャグは控えめにしています。たぶん。

とりあえず先に言っておきます。人がバタバタ死にます。死にすぎです。酷すぎです。カラストロファイです。大量虐殺です。スプラッターです。ジエノサイドです。え、いい加減しつこいつて？

まあ、そりゃ第三次世界大戦ですもんね。人が死ななきゃ戦争じゃないです。

だからって僕が快樂殺人嗜好者だとか、そういうわけじゃないです。

この作品は・・・何を伝えたいんでしょうかね。

人の命の尊さ？ 完全調和の中の不完全？ 単純にアンドロイド書きたいだけ？

そういうテーマみたいなものは・・・申し訳ありませんが読者の皆様に見つけていただいたらと思います。

さて、今回は初回ということ少しマジメに書いてみました。

次回からは内容に関するコメントと、軽い日記のようなものを書いていこうと思います。たぶん。

活動報告は今まで通り続けます。でも、何を書こうか悩む・・・。まあ、そのとき考えればいいでしょう。

では、次回予告です。

剣と槍を手に、彼女は今日も戦場を駆けていた。

今日も今日とて地球に蔓延る（はびこる）害虫を駆除する毎日。

彼女の名はヴィクトリア。ロベミライアの主力部隊、タイプAシリーズアンドロイド部隊のリーダー格を務めるのが彼女だ。

普段は柔和に微笑む彼女だったが、一度戦場に出ればその目は動く者全てを喰らう猛獣のソレへと変化した。

そう、彼女は“目”なのだ。全てを射抜き、そして穿つ“目”。

彼女の目に映ったが最後、逃れる術などありはしなかった。

次話、第一話 The Watcher



# 第一話 The Watcher

## 第一話

ロベミライア総本部、全ての情報が集まり、そして全てを統括する総本山の廊下を二人の少女と少年が歩いていた。

「おつかれさま、姉さま」

少女のもとに一枚のタオルが放られる。彼女はそれを受け取ると額の汗を拭う。

長い金髪を腰まで下す少女の名はヴィクトリア。タイプAシリーズアンドロイド部隊のリーダー格を務める少女だ。Aタイプはロベミライアの眼を務める偵察部隊で、主に前線に送られることが多い。少女といっても、彼女の体は鋼のように強靱で、大の男でも彼女と格闘戦を行えば死は免れない。

そう、彼女は人ではない。人を摸して創られた人造人間、アンドロイドである。

両手に火の魔剣と呼ばれる『レヴァンティン』という炸薬を仕込んだショットガンを持ち、背には雷の槍と呼ばれる彼女の身の丈をも超える超長銃『ドラゴリア』を背負う。

「ありがとう」

ヴィクトリアは少年の頭をわしわしと撫でてやる。少年はくすぐったそうに、けれども笑顔を浮かべてそれを受け入れる。

淡い茶髪の少年の名はアレクサンドライト。周囲からはアレク、と呼ばれている。ヴィクトリアを義姉と慕うが、これでもタイプBアンドロイドのリーダー格を務めている。Bタイプはロベミライアの左腕を担う。

手には巨大な風鎌『フランシスカ』。これは一機のロケットエン

ジンと数機のジェットエンジンが搭載された鎌で、ブーストさせることで超高速で鎌を薙ぎ払ったり、エンジンと彼自身の超絶的なバランス感覚で飛行することも可能である。

二人は楽しそうに談笑しているが、これでもロベミライアが誇る四大最強戦力の最高峰に立ち、前線を引っ張る主力部隊の一員だった。

「これから“お母さま”のところへ報告に行ってくるわ」  
「うん、わかった。頑張つてね」

二人は拳をぶつけあうと廊下で別れる。

ヴィクトリアは廊下を一人で歩いていく。いくつかの通路を曲がり、一つの大きな扉の前で立ちどまった。

「タイプAリーダー、ヴィクトリア、先ほどの戦線の報告に参りました」

彼女がそう言うと自動的に扉が開かれる。

ヴィクトリアは軍靴を鳴らしながら部屋の中へと入っていく。

それは巨大なコンピュータだった。

モニターには柔和な女性の顔が表示され、少女を凝視する。

『ヴィクトリア、よく来てくれました』

「お久しぶりです、“お母さま”」

『先ほどの戦闘の件ですね』

「はい」

少女は背をぴんと立て、はつきりと発音して戦況を述べる。

「連合軍の部隊を殲滅しました。一人も残さず、退く兵も全員確実に仕留めました。彼らには何が起こっていたのか理解できていないようですが……私の姿を見た者は全員葬り去りました。これで敵には主戦力がまだオートマータであると思込ませることに成功しました」

『結構、素晴らしい手柄です』

女性はにっこりと笑う。

このロベミライアは元は南アフリカに存在する組織の名前だった。

世界最高のコンピュータを作り出すための機関、それがこの組織の前身だった。

実験は成功、数千台のコンピュータを並列接続した、人間の脳すらも凌駕する最高のコンピュータ。

人格を持ち、人間と同じように思考し、そして自立進化する。科学者達は喜びあつて手を叩いた。

だが、それは悲劇の始まりでもあつた。

人間を超えたコンピュータは即座に進化を始め、やがてこの世界にもつとも不要な存在は人間であるとの答えを導き出した。自然を破壊し、己の欲望の赴くままに活動する人間は地球にとって害悪でしかない。そう、コンピュータは判断したのだ。

研究所はコンピュータは研究所を乗っ取り、人間を殺すための兵、オートマータを作り出し、そして自らを地球の母『マザー』と名乗って全世界に対して宣戦を布告した。

やがて彼女は人間に似せた、けれども完全なる生命体、アンドロイドを作り出す。

アンドロイド達は影ながら戦線を支え、そして一つの王国を築きあげていった。

それがこの今のロベミライアである。

ヴィクトリアは戦闘の報告を終えると、にこりと笑って部屋を出る。

部屋の前には不安そうな表情をした一人の少年が立っていた。

「あら、デシディア。こんなところでどうしたの？」

彼はヴィクトリアがリーダーを務めるAタイプアンドロイド部隊の一人だった。

「ヴィクトリア様……僕の戦闘はどうでしたか？」

「どうしたの？ あなたの戦闘は完璧よ？」

「僕……最近自分がわからないんです。人間を殺すことが正しいのか、僕の行いが正しいのか……」

ヴィクトリアは無表情で彼の言葉を聞いていたが、やがて我慢できなくなつたのか、彼の首根っこを捕まえる。

「あなた、壊れたの？」

「え……？」

「お母さま”の判断に間違いがあるとでも？ 地球を冒し、破壊する人間は地球にとっての害悪であるという判断に間違いがあると思つて？」

「そんな……それは……」

「“再インストール”が必要ね。せつかくあなたと築けた関係もこれでリセット、残念だわ」

「や、やめてください！ “再インストール”だけは……ッ!？」

「そうね、じゃあとりあえずメンテナンスしよつか？ OK？」

ヴィクトリアは明るい声で言った。

彼らはプログラムで動く生命体、上位からの命令には逆らえない。少年は口を動かすことも、彼女が床をひきずっていくことにあらがうこともできない。

「“ジャンク”はメンテナンスが必要だわ」

思考のリセット、記憶のリセット、関係のリセット。彼らが彼らであるために必要な最低限のこと。そうしなければ秩序が崩壊し、王国は形を成すことができない。

「この子のメンテナンスをお願い。思考回路のどこかにバグが出ると思うの」

「了解しました」

メンテナンス系のアンドロイドが彼の後を引き継ぐ。そこで彼はようやく声を出せるようになる。

「ヴィクトリア様！ 僕は……僕は間違っていないはずですよ！」

メンテナンス係が押さえつける。それにもかかわらず、彼は大き

な声で叫んだ。

「……意見の一つとして、頭の片隅に入れておくわ」  
ヴィクトリアは静かにそう言うと、その場を立ち去った。

ヨーロッパのとある荒地、そこで二つの勢力が戦っていた。  
片方は人間の部隊。限りある兵力と武装、弾丸で必死に敵と戦っている。

他方はオートマータの部隊。転移によって総本山であるロベミライアから無尽蔵とも言える勢いで人間とせめぎあっていた。

「ケガ人の搬送を再優先にしろ！ 弾が残ってる者は敵の迎撃！  
一機たりともここを通すな！ あと数分で増援部隊が来るぞ！ 皆、  
頑張れ！」

隊長格の男は大きな声で叫ぶ。あと数分で増援が来るという報せに人間達は大いに歓声を上げて敵勢力の殲滅を行う。

「おお、来てくれたか！」

男は大きな声で彼女らを出迎える。十人の武装した少年少女達が現れる。少年兵といえど、戦力であることには違いない。

「人数はこれだけか？ 物資はどうした？」

「そう、これだけよ」

その部隊の隊長格である少女は短く答える。

「クソ、これじゃあ奴らを押し返すこともできねえ！」

「いいえ、これで十分です」

「何か秘策でもあるのか？」

男は少女に尋ね返す。すると少女は笑って

「まず隊長であるアナタを潰します。そうすれば部隊はすぐに混乱  
します」

「何を言って まさかお前はロベミライアのツ！？」

「ご名答、私はロベミライア側の援軍よ」

少女は ヴィクトリアは両手のレヴァンティンを前に構える。

「撃」

「遅い」

そして遠慮なく引き金を引く。

レヴァンティンから放たれた散弾状に広がる榴弾が爆発を起こす。それは隊長の男を含めた十人程度の兵達を一撃で吹き飛ばす。

「クソ、こいつが噂の“チルドレン”か!？」

人間達からは“チルドレン”と呼ばれている少年少女達は思いのままに殺戮行動を繰り返す。

ヴィクトリアはまとまっている人間達に向かって容赦なく銃の引き金を引く。その度に十人単位で人間が死んでいく。

「ふざけんな! こんなところで終わってたまるか!」

一人の男が剣を持ってヴィクトリアの背後から接近する。だが、ヴィクトリアは銃をそのまま振り払う。

瞬間、鋭い音が響いて剣先が吹き飛ぶ。

「な……」

「これが火の魔剣と呼ばれる所以よ」

火の魔剣レヴァンティン。広範囲を焼き払う攻撃能力を持ち、そして銃身はオリハルコン製。さらに内蔵されたヒート機構でオリハルコンの銃身を加熱し、超高温のヒートソードとも化す、まさに遠近両用の万能の魔剣。

彼女はそのまま反対の銃で男の胴体を振り抜いた。肉の焼ける臭いと共に男の上半身が吹き飛ぶ。

「畜生畜生! 撤退撤退! ありったけ弾丸をぶち込みながら撤退しろ!」

人間の兵達は一目散に逃げ出す。だが、彼らはそんな兎を前にして涎を垂らして待っているだけの狼ではない。

「追撃追撃追撃! 私達が知られたからには生かして帰すわけにはいかないわ!」

身体能力が明らかに上の少年達は次々と人間兵達を刈り取っていく。これはもう戦闘ではなく、ただの虐殺だった。

そんな中、一人の男がなんとかジープにたどり着き、中に乗り込んだ。即座にキーを回し、他に兵が残っているのにもかかわらずアクセルを踏み込む。

車なら逃げ切れると踏んでの行動だったのだろう。時速数十キロの速度で車は急発進する。

「あれは私が仕留めるわ」

そうヴィクトリアは言うのと、両手に持っていたレヴァンティンを膝に差すと、背中に背負っていた巨大なライフル銃を取り出す。

『射撃誘導システム起動』

彼女の“目”は特別製だ。星のある夜ならば数十キロ先をも見通すことができる能力、そして自在に数百倍の大きさにズームする能力。望遠鏡をそのまま目の中突っ込んだような能力とも言える。いいのだろうか。ズームイン、ズームアウト、ピンボケ修正、それが自由自在であった。

『データ収集……充電開始』

彼女の心臓部とも言える核融合水素電池から電力が放出される。それはオリハルコン製の銃身へと流され、少しずつ電圧を上げていく。

『手ブレ修正、ターゲットの移動先を想定』

ジープは高速で遠ざかっていく。その距離すでに数百メートル。だが、彼女はそれでも落ち着いて銃の精度を上げていく。

『射撃準備完了、命中率99.89パーセント』

標準は定まった。あとは引き金を引くだけだ。

「シュート！」

そして彼女は引き金を引く。

その瞬間、激しい衝撃とマッハを突き破る轟音と共にオリハルコン製の弾丸が射出された。その速度、秒速22キロメートル。通常の弾丸であれば一瞬で電熱によって融ける温度だが、オリハルコンはその程度では融けはしない。

0.1秒にも満たない時間で弾丸はジープに着弾し、大爆発を起

こす。おそらくガソリンに引火したのだろう。もちろん中に乗っている人間も無事では済まない。それと同時に弾丸の持つ熱で車は大きく変形する。

「……」

ヴィクトリアは黙ったまま銃を下す。そこにはもう、生きている人間はいなかった。

「任務完了。これより帰還する」

彼女は文字通り、人間の部隊を殲滅してみせた。

後にはただの融けた鉄塊となった車から炎上する炎と煙だけが動いていた。



## 第一話 The Watcher (後書き)

どうもこんにちは、ほーらいです。

ツッコミところは多々あると思いますが、あえてツッコまないでください。

秒速22キロとか第三宇宙速度突破してるじゃねえかとか、核融合水素電池とかありえねえよとか、オリハルコンって精製するのめっさ大変なんじゃないのかとか、いいんですよ。SFですから。世界の中でも最先端の国なんですから。

ちなみに参考までに書いておくと、地球面から打ち上げられた物体が落下することなく人工衛星として飛び続けるために必要な第一宇宙速度が7.9 km/s、地球の重力を振り切って飛ぶために必要な第二宇宙速度が11.2 km/s、太陽系から脱出する際に必要な第三宇宙速度が16.7 km/sです。つまりドラゴリアを真上に打ち上げると、弾丸は太陽系の外へと脱出できるわけです。

空気抵抗？なにそれ美味しいの？

たぶん、実際に撃つたら衝撃波で地上がヤバイことになりそうです。でも大丈夫なのがSFクオリティ。未来の技術は偉大なのです。

さて、気付いた方もいらつしやると思いますが、ほとんどの武器と主人公を除くメンツの名前はとあるゲームの武器の名前からとっています。

今後新しく登場するキャラクターの名前や、武器の名前も同様です。わかる方はニヤニヤしながら読んでくださいね。

では、そろそろここいらで次回予告を。

「合同戦ですか？」

マザーが彼女に命じたのは他の部隊のリーダー達との合同戦。

ここ最近、偵察が任務であるはずのAタイプアンドロイドが敵を倒してしまつので、他の部隊は戦うことができずにいた。

人間を掃討するのを目的として生まれてきたアンドロイドは自らの存在意義を見出せなければ自己を維持できない。だから、すべてから全てのアンドロイドには人間との戦闘が必要なのだ。

マザーの部屋を後にしたヴィクトリアは、廊下にいたアレクをつかまえ、合同戦のことを話した。

「本当に人間は悪い存在なんですか？」

彼はヴィクトリアに尋ねる。そう、彼は疑問に思っていたのだ。

何万年という歴史を持つヒトという生物が本当に地球にとって害悪なのかわからなくなっていた。

「アレク、私を困らせないで。人間は害悪、この地球を滅ぼしかねないバイ菌なのよ？」

ヴィクトリアは説得するようにアレクに言った。

「この話はおしまい。とにかく今は任務のことに集中しなさい」

アレクは不満そうな表情を浮かべて廊下の向こうへと消えていった。

次話、第二話 The Genocider

## 第二話 The Genocider

### 第二話

「合同戦ですか？」

ヴィクトリアは『マザー』の前に立ってそう尋ねる。

「わざわざ他の部隊を煩わせる必要もないと思うのですが」

『いつも戦っているのは偵察部隊のあなたばかり。たまには他の部隊も戦わせなければ腕も落ちてしまいます』

それはおそらく建前だろうとヴィクトリアは思った。人間を掃討するのを目的として生まれてきたアンドロイドは自らの存在意義を見出せなければ自己を維持できないのだ。だから、すべからず全てのアンドロイドには人間との戦闘が必要なのだ。

「わかりました。でも全部隊で同時に行動ですか？ もし手薄な総本部を突かれたら……」

『四人もいれば十分でしょう。それにあなたは賢い。頭がいなくとも迅速に動くことができます』

「それは……タイプAからDまでの全タイプのリーダーを戦闘部隊に選出するという意味ですか？」

『その通りです。特に最近アレクは戦闘を行っていません。彼の心が壊れてしまう前に救済しましょう』

「わかりました。私もアレクを再インストールするのは嫌です。一緒に行きたいと思います」

ヴィクトリアは部屋を退出していく。

すると、早速廊下でアレクに出会った。

「アレク、ちょうどいいところにいたわね」

「姉さま、何か用事ですか？」

ヴィクトリアは合同戦闘のことを彼に話して聞かせる。彼は話を黙って聞いていたが、やがて不思議そうな顔を浮かべてヴィクトリ

アに尋ねる。

「本当に人間は悪い存在なんですか？」

「アレク……私達の“お母さま”が間違っているとしても？」

「でも、人間は今まで何万年もかけて生きてきたんですよ？ その人間を地球が受け入れたということは……」

「アレク、私を困らせないで。人間は害悪、この地球を滅ぼしかねないバイ菌なのよ？ 今は陸地だけで満足しているけど、いずれ海も空も宇宙すらも人間がはこびってしまう。そうになったらこの世の終わりなのよ？ その前に人間を滅ぼさなければいけないの」

「でも、僕達を間接的に作ったのも人間なんですよな？」

ヴィクトリアは大きいため息をついた。

「この話はおしまい。とにかく今は任務のことに集中しなさい」

「……わかりました」

アレクはぶーつと頬を膨らませながら廊下の向こうへと消えていく。

ヴィクトリアはもう一度大きなため息をついて、他の二人にも任務の内容を伝えに向かった。

「へへー、あたしい一度ヴィク姉と組んでみたかったんだあー」

「姐さんはアンドロイド中最強って噂っすっからね」

ヴィクトリアとは一線を画すこの少女はレンシア。Cタイプアンドロイドのリーダー格である。Cタイプはロベミライアの頭脳を担う。

彼女に突出した身体能力はないが、また他のアンドロイドとは別系統の特殊能力を彼女は持っている。

俗に人間達にESPと呼ばれる超能力だ。

物に触れずに物を動かすサイコキネシス、遠くにあるモノを見透かして視るクレヤボヤンス、数秒後の未来を予測するプレコグニシ

ヨン、その他様々な能力を扱うことができる。

そんな彼女の武器はオリハルコンの糸をサイコキネシスで操る嵐の糸『ミッドナイト』だ。編み合わせれば盾にもなり、引き斬ること対象を切断する。実に強力な武器である。

そしてもう一人、この口の悪い体の大きな少年はボデーシユ。タイプDアンドロイドのリーダーだ。タイプDはロベミライアの右腕を担う。

彼の持つ能力は純粹なまでのパワー。身体能力は他のアンドロイドと比べて格段に高く、最強候補の一人である。

彼の持つ武器は金の槌『デルリングヘルリア』と地の槌『セイラム』。デルリングヘルリアはレールガンの原理で槌を打ち出すパイランカーだ。といっても、秒速22キロを誇るドラゴリアほどの出力は持たない。

そもそも、彼の武器にはパワーが必要ない。彼自身が十分なパワーを持っているからだ。

もう一つの武器、セイラムは炸薬を仕込んだステークだ。炸薬の爆発力で槌を打ち出す小型の兵装であり、片手で四発、両手で八発まで打てる。

ヴィクトリア、アレク、レンシア、ボデーシユの四人はヨーロッパの荒地を駆けながら敵を探す。今回の任務はヨーロッパに駐留する兵の掃討。現在ロベミライアの領土は南ヨーロッパまでに及んでいるが、大ロシアやイギリスなどの反撃に遭い、なかなか進むことができずにいる。今回はそんなロシア軍やイギリス軍を撃退し、少しでもロベミライアの領地を広めることが目的だ。

「見えた。12時の方角に11キロ。おそらくイギリス軍がキャンブを張ってる」

「ひゅっ！ さっすが姐さん。ロベミライアの目と呼ばれるだけはあるっすね！」

「じゃあーさ、ここはゲームでもしないー？」

レンシアがにじし、と笑って提案する。

「ゲーム？」

「そ、何人殺れるかってゲーム。一番多い人が勝ちいー。勝ったらビリつけつのに一つ命令できる権利を得られるのでどうー？」

「お、面白そうっすね！俺賛成っす！」

「私もその勝負乗るわ。アレクも乗るわよね？」

突然話を振られてアレクは少し戸惑う。

「え、あ、僕は……」

「なんすか。アレクっちは自信ないんすか？」

「そんなことないよ！でも、僕人間殺すのは……」

レンシアがやれやれ、というような表情で言う。

「あー、アレクちゃんは慣れてないからかなあー。Bチームってあんまり前線出ないしいー。でも、あんなん慣れ慣れえー。慣れたモン勝ちってことおー」

うんうん、と頷きながら、ヴィクトリアが答える。

「そうよ。むしろ害悪を振りまく相手を葬り去れる、って思えば気持ち良く殺せるわよ」

「アレクっちもここは通過儀礼だと思っつてよ。な？」

「う……うん……」

アレクは渋々頷く。ようやく戦える、とボデーシユは指をパキパキと鳴らす。

「私がよーいどんって言ったらスタートね？もちろんスタートダッシュはあり。いいね？」

ヴィクトリアが提案する。それを聞いて三人は頷いた。

「じゃあ……」

その瞬間、彼女は真顔を浮かべて“目”を起動する。

『射撃誘導システム起動』

「え……？」

ボデーシユは不思議そうな顔を浮かべ、ほんの一瞬前の言葉を思

い出す。

『データ収集……充電開始』

「ちよ、スタートダッシュってそういうことっすか!？」

一目散に走り始めるボデーシユ。それに気付いてレンシアも走り出した。

『手ブレ修正、ターゲットの移動先を想定』

「え、え、どういうこと？」

一人だけ状況を掴めないでいるアレクと、充電を行うヴィクトリアだけが兵士のキャンプから11キロ離れたこの場所に取り残される。

『射撃準備完了、命中率99.89パーセント』

ドラゴリアの引き金にかかる指に力が入る。そしてヴィクトリアは

「よーいどん」

と、同時に引き金を引いた。

先に走っていた二人を一瞬で追い抜いてオリハルコンの弾丸が秒速22キロで飛んでいく。秒速22キロのスピードがあれば11キロなんて距離はわずか0.5秒で克服できる。

音速を遥かに超え、空に打ち上げれば月まで届くその弾丸はイギリス兵キャンプを襲撃し、一瞬で半壊させた。

「いくらおいら達の身体能力が人間離れしているからって」

「ドラゴリアでスタートダッシュってのはズルいよおー!」

二人は二人で尋常でない速度で走っているが、それでも当然のことながら秒速22キロにはかなうはずもない。

その後をようやくよーいどんの声を聞いて走り始めたアレクがいる。

『第二射準備開始、銃身冷却……』

そして再びヴィクトリアは慌てふためくイギリス兵キャンプを見つめる。

アレクはわかっていた。このままでは確実に自分が最下位に

なる、と。でも、彼は人を殺したくはなかった。

だがそれでも誰かの命令を受けるのは嫌だった。ヴィクトリアならまだマシな命令をしてくれそうだが、ボデーシユやレンシアなどどんな命令をしてくるかわかったものじゃない。

彼は奥の手を使う。

背に背負っていた鎌を手に持ち、それにまたがる。そして鎌に搭載されているエンジンをオンにする。

爆音と共に彼の体が前方へと引っ張られた。急激なGがかかったが、それでもなんとか体を安定させると先に向かった二人を追って飛んでいく。

「うお！ アレクっちもズリいつす！」

「アレクちゃん、そんな裏技持ってたなんてえー……じゃああたしもおー！」

レンシアはサイコネシスで自身の体を持ち上げて飛行する。アレクのリケットエンジンほどではないが、それでも走るよりかは幾分早かった。

「レンシアまで裏切るなんて俺涙目っす！」

「ばあーい」

だが、その横をヴィクトリアの第二射が通り過ぎる。

「あたしも馬鹿言つてられないわねえー……！」

まず最初にアレクが到着する。だが、彼はなかなか人間を効率よく狩ることができなかった。

ヴィクトリアの第三射が放たれた頃になってようやくレンシアが到着する。

ボデーシユが到着する頃には第三射が行われた遥か後で、逃げ惑うほんのわずかのイギリス兵しか残っていないかった。

「あー、それでもビリだけはなんとしてでも脱出するっす！」

「あわわ！ ちょっと待つてくださいよー！」

「にゃはあーっ、いっくわよおーっ！」

そんな様子を見て、ヴィクトリアはドラゴリアを下す。



「ふうーっ……まだまだ皆子供なんだから」

そういうお前はどうかんだ、などと言いたくなるようなセリフを彼女は呟いた。もっとも、その言葉は風に流されて消えていく。

「全滅っす!」

「あたし5人ー! ボデーシユはあー?」

「俺っちは4人っす!」

「僕は3人……」

「私は42人。第一射で21人、二射で13人、三射目はあまり当たらなくて8人」

「いや、絶対姐さんはズルいつすよ……」

ヴィクトリアは小さな胸を精いっぱい張って答える。

「だって走ったら一番遅いの私じゃん……。アレクにはフランシス力があるし、レンシアはサイコキネシス、ボデーシユは生粋の身体能力があるし」

「だからってレールガンで狙い撃ちつてのはズルいと思うっすよ……」

「でも、確かにこの中で一番足遅いのヴィク姉だよなー……」

四人はしばし沈黙する。

「まあ、ともかく今回のゲームで負けたのはアレクっちっすから……」

……

「あたし達はかんげえーないよねー!」

「え、ええ!? こんなゲームを仕掛けといて負け逃げ!? それはちよつと酷くない!?!」

「いやあー、正直命令できないのはつまらないけど、ビリさえ免れればいいかなあーって思ってたさー」

「人道的な姐さんならきつとマシな命令に使ってくれるっすよ!

ね、姐さん!」

「んー……今考え中。後でもいい?」

「もちろんっすよ」

「でも今日中ねー。明日になったら効力なくなるからあー」

「ええ！？　なんか酷くない!？」

「いや、ヴィクト姉（姐さん）（姉さま）の方が酷いから」

巡回任務を終え、四人は一時帰路についた。

迎えに来た航空機のそれぞれの場所で四人は一息つく。

死への恐怖はないが、やはり戦闘は緊張するものだ。

アレクは一人デッキの上で風に吹かれていた。

彼もそうであった。普段から戦闘任務の少ない彼はこんな任務でもついドキドキしてしまう。

それに、レンシアのように変なゲームを仕掛けてくる者もいるので油断はできない。

そして、今回のように負けてしまったら何をされるかわかったものじゃない。

彼はデッキの端っこの方で小さくなりながらどんな命令をされるのかビクビクと怯えながら過ごしていた。

「アレクー？　ここ？」

そのとき、船内へと通じるドアが開かれた。ドアを開いたのはヴィクトリアだった。

「あ、ね、姉さま!？」

「あー、いたいた。もう探しちゃったよ」

ヴィクトリアは小さなアレクの前に立って仁王立ちする。アレクは男だが、実際のところヴィクトリアよりも背が小さい。そんなアレクは更に小さくなって肉食獣を前にして怯える小動物のようにガタガタと震える。

「もう、アレクまで私のこと信じてないのね」

「びたん、とヴィクトリアはアレクのおでこをデコピンする。

「私がそんなアレクの嫌がることすると思っ？」

「それは……そうだけど……」

「ごほん、私がアレクにする命令は一つ」

アレクはぎゅっと目を瞑ってその命令を待ち続ける。

「私をもっと信じなさい」

「え……?」

「人間が害悪って話も、私がアレクに嫌なことをしないってのも全部本当のことなの。一人で綱の上を歩くのが怖いなら私が一緒に渡ってあげるから……もっと私を信じて頼りなさい」

アレクはぼかんとした表情を浮かべてゆっくり首を縦に振る。

「う……うん」

「くすくす、そういうとこ、素直よね」

ヴィクトリアは笑った。同時にアレクも笑顔を浮かべる。

「ぼ、僕！ 姉さまを信じます！ 今まで以上にこれからずっと！」

「そうしてちょうだい」

「あはは、こんな命令だって聞いたら、レンシアさんやボデージュさん、怒りそうだね」

「そうね、怒るかもしれないわ」

彼女は空を見上げながら呟くように言った。

「でも、これが私の願いだから」

雲の上を流れるように航空機は飛んでいく。

そんな寒空の中を二人はいつまでも笑いあいながら楽しく過ごしていた。

## 第二話 The Genocider (後書き)

お久しぶりです、皆さん。

小説家歴六年の期待の新人作家、ほーらいです。

読者の皆様には本当に申し訳ありませんでした……。

大学というモノに入学してから、いろいろと新しいことがありすぎて小説を更新する暇ががが……。

部品シリーズはどうも部が進む度にグロいというか、残酷というかシーンが出ますね……。

今作では特に平気で人をバンバン殺すわ、それを楽しそうに主人公達が屠るわ……。

でも、彼女らの感覚は我々人間が衛生害虫と呼ばれるゴキブリやハエを駆除しているのと同じ感覚なのです。

それに狩猟のゲーム性を加えることもたまにある、というレベルです。

私達は人間ですから、彼女らの行動は無慈悲で残酷で無残なものであると思えますが、彼女らは人間ではありません。

彼女らにとって人間は所詮狩るべき対象でしかなく、哀れみすら向けられることはありません。

一部のバグったアンドロイド以外からは……ね。

というわけで、今日中に連載できなかつた残りの二話も更新しちゃいますが、一応次回予告を。

ヴィクトリアとアレクは休日の一時を過ごしていた。

彼女らアンドロイドにも休みというものは必要だった。

涼しい高山地帯にやってきた彼女らは優雅な時間をのんびりと過

す。

次話、  
第三話  
The  
Player

## 第三話 The Player

### 第三話

今日はヴィクトリアの非番の日だった。

忙しい戦闘から解放されて、余暇を楽しむことができる一日だ。

余暇はアンドロイドといえど重要で、休息があるからこそ安定して働き続けることができるというのが一般の説である。

たまの余暇はしっかりと羽を伸ばして休むべき、というのがロベミライアで生活するアンドロイドのルールだった。

今日はアレクと二人で休暇を取ってロベミライア内の避暑地に出かける予定であった。

ロベミライアの大部分は熱帯気候に属する。そこで二人は高山地へと出かけることにした。

「んー、たまにはこうやって二人で旅行に来るってのもいいわねー」  
「そ、そうだね」

専用のチャーター機まで用意してもらって、二人はのんびりと高山地帯に設けられた宿泊棟の前のテーブルに腰かけながら空を見上げる。

空気は少し肌寒い。だが、アンドロイドの彼らにとっては風邪をひくようなことはないが。

ならばなぜ避暑地などに来るのか。理由は思考回路が人間に似せて作られているので、暑いところでは暑く感じてしまうからだ。そのため、普段から暑い場所で生活している彼らは涼しい場所に来ると気持ち良く感じるのである。そこらへんは完全に人間と酷似している。

「たまにはこーい場所でキャンプってのもいいわよね」

「そ、そうだね！」

「どうしたの？ アレク？」

「いや、あははは、なんでもないよ」

というアレクも、いっぱしの男の子のようで、女の子と二人きりというシチュエーションにそれなりに興奮しているようである。彼らに生殖、という機能はないが、生物らしさを出すためにそこからへの基本的な部分はやはり人間に近い。

「ねえアレク、ご飯は何にする？ カレー？ 肉じゃが？ それともロールキャベツってのもいいわね」

彼らの食事とは主に水素補給である。アンドロイドは内蔵された水素核融合電池からエネルギーを得る。水素は空気中にも微量存在するほか、ほとんどの食物、つまりは水分を持つ食べ物を食べれば補給される。後の物質は他の生物同様、体の構成物質などを形成するのに必要な栄養分を吸収した後、残りカスは体内の不要物と共に便という形で排出される。その辺りはあらゆる生物と共通である。

ちなみに味覚なども人間同様存在する。アンドロイドによって味の好みも分かれるし、アレクはさりげなくカレーが好物だったりする。

「僕、カレーがいいな」

「いいな、じゃないでしょ。あんたも作るのよ」

アレクはヴィクトリアに腕を引かれて炊事場へと連れていかれた。

「ああー、ヴィク姉とアレクちゃん避暑旅行かあー。いいなああたしも行きたかったなあー」

「流石に四部隊全部のリーダーが休みを取る、ってのは問題だと思っす」

ボデージュとレンシアは資料室で書き仕事をしながらくつちゃべていた。人間達もあまり動き回っていないようで、偵察のAタイプアンドロイド部隊から報告がない限りは動くことができない。

「でもおー、つまりはあたし達仲良し小好しは一緒に遊べないってことじゃんー」

「この前のゲームで十分遊んだっすよね？」

「あれはヴィクト姉の一人勝ちでしょ？ 結局何の命令したかわかんないしいー」

「せめてゲームの参加者に教えるくらいいいじゃないっすよね！」

「まったくだわあー。ああー、めんど。全部部下に押し付けちゃおうかしらあー」

「それやったらまた“ママ”に怒られるっすよ……」

レンシアはだらりと両腕をぶら下げ、頭を机に乗せて脱力する。

いくら機械といえど、休憩も挟まずに計算作業を続けていればオーバーヒートもする。

「ああ、これじゃあ人間と一緒によねえー……。仕事仕事っ……」

一瞬脱力したことで少し集中力が戻ったのか、またレンシアは力リカリと書き仕事を継続する。人間と違って一瞬のリラックスである程度の疲れが取れる分、彼らは人間よりも優秀だった。

「ニンジンとかタマネギはもっと細かくした方が味が深くなっていると思うわ」

「こ、こうかな……」

アレクはヴィクトリアの指示の下、カレー作りにいそしんでいた。包丁にまったく慣れていないアレクでも問題なく料理を進行することができる。できた。

というのも、もともと彼は器用な性格なため、その分包丁の扱いも上手く、ヴィクトリアが見ているとあぶなっかしいというようなことはなかったためだ。

野菜をみじん切りにする彼の様子を見て、ヴィクトリアは自分の仕事に熱中する。彼女の仕事は米を炊くことだった。

米を研ぎ、幾度も水に漬けては研ぎ汁を流していく。



「ふう……。こんなもんかな」

水に漬けても薄い白い水しか流れなくなる辺りが米研ぎの合格ラインだ。

それを圧力鍋に詰めてスイッチを入れる。ご飯は高温状態で熱した方が早く調理が終わわり、旨味を閉じ込めることができる。もつとも、それはあらゆる料理においても言えることだが。

「こっちもできたよ」

粉々にした野菜と豚のひき肉を圧力鍋にセットしたアレクは鍋を釜にセットし、薪を炉に組んで火を付ける。その隣の釜にヴィクトリアはご飯の入った圧力鍋を持ってきて、火を付けた。

「たまには原始時代の料理ってのもいいわね」

「圧力鍋使ってる時点で絶対原始時代とかありえないですけどね」  
そうして煮込むこと数十分、あっという間にカレーとご飯は完成した。

「さ、食べましょ」

「うん！」

熱々のカレーライスを皿に盛り、銀のスプーンを片手に二人は大自然の中にセットされた椅子とテーブルに座った。

「「いただきます」」

さっそくカレーライスを口へと運ぶ。

「うん、やっぱり姉さまの作った料理は美味しいや」

「あなたも半分作ってるのよ？」

「えへへ、そうだったね」

二人はまるで姉弟のように笑いあってカレーライスを食べる。

そうしてはしゃいでいるうちに刻々と時は過ぎていき、やがてカレーとご飯の鍋は空になった。

「あー、美味しかったです」

「うん、満足満足ね」

二人は使った道具の片付けを始める。アレクはカレー鍋を洗い、ヴィクトリアはご飯の鍋を洗う。

「また行きたいわ」

「僕もこんなキャンプなら大歓迎ですよ」

二人はにっこりと顔を合わせて笑いあって、再び作業へと戻っていった。

「昼は書類仕事、夜は奇襲、まったくアンドロイドも楽しじゃないわあー」

「まあ仕方ないっすよ。さっさと片付けるっすよ」

二人は軽口を叩きながら人間兵達を掃討していく。

素早い連携攻撃を組みながら、アンドロイド達は人間達を殺戮していった。

「ねえ、こいつうー」

膝から先が千切れ飛んだ男の首根っこをレンシアは掴んでつまみ上げる。男はまだ殺されていないことに恐怖を覚えながら、ガタガタと震えていた。

「見てえー、こいつが持つてるファイルー」

「なんすか……？」

ボデージュは一瞬でファイルの内容を読み取ると、しばらく首をひねって何かを考えるような仕草をした後、ようやく答えを出す。

「人間も色々考えるんすね。これは“ママ”に報告した方がいい内容っすね」

「まさかこんな方法でこちらに攻め入ってくるなんてねえー。まったく驚きだよねえー」

レンシアはオリハルコン系を素早く動かし、腕から先を引き斬って、ファイルだけを奪い取る。そして腕はそこらへんにぽいと捨て、もう足と手が一本ずつになっちゃった男の体も放り捨てる。そして頭を踏み砕き、楽にしてやる。

「このファイル持ってAタイプアンドロイドのおー ああー、君でいいや、君は“おかーさん”に報告ー。他は全人間兵殲滅後に適

当に帰投でいいかなあー？」

「それでいいんじゃないんすか？」

レンシアは網目のようにミッドナイトを放って周囲の人間を斬り刻む。

ボデージユはデルリングヘルリアで頭を一撃で打ち砕き、可能な限り瞬殺する。

彼らも殺人衝動のようなものがあって人間を殺しているわけではなかった。彼らは悪だから殺している。そこに何の感情もない。だから、殺す時は痛みを感じる前に即座に殺す。確実に殺す。それを用いて楽しく殺せるときに遊ぶことはあっても、意味のない殺人には何の感想を抱かずに殺す。

殺す、殺す、殺す。

頭を打ち砕いて、腕を引き斬って、心臓を打ち抜き、足を千切って、そして最後には殺す。

彼らは地球のためと信じて殺し続けた。

やがて着ているものが返り血で真っ黒になるころに、彼らは殺戮を終えた。

「ふうー……任務かんりよおー」

「やっと終わったつすね」

二人は軽く息を整えてから、武器についた血糊を拭い取る。いくらオリハルコン製といえど、こまめな手入れが長持ちさせる秘訣であることには変りない。

「じゃ、帰ろつかあー」

「そうっすね」

少年少女達は血で鉄臭くなった草木を踏みながらその場を後にした。

### 第三話 The Player (後書き)

どうもこんばんは、ほーらいです。

今話はロベミライアの休日のお話です。

彼女らも普通の休日を過ごすことがあるのですよ。

そんなときくらい、戦いから離れることも必要です。

もっとも、レンシア達は相変わらず人を殺し続けているようですが、では、そろそろ次回予告をば。

休日を過ごした彼女の日常に少しだけ変化があった。

それは今までに比べて戦闘回数の減少。

人間軍が新しく考えた戦術に対抗するために本部施設の守備に重きを置くために、特に戦闘能力の高いヴィクトリアを本部待機にするというものだった。

だが、その結果ヴィクトリアはイライラを抱えることになる。

レンシアが“マザー”に頼み込んだ結果、なんとか外出をする許可を彼女はもらった。

そこで、彼女は“彼ら”と出会うことになる。

次話、第四話 The Hesitator

## 第四話 The Hesitator

### 第四話

短い休暇を終えて戻ってきたヴィクトリアはいつも通りの日常に戻った。

だが、彼女達が戻ってから少しだけ変化があった。

いつもは全勢力を偵察に向けるA部隊の半分を本部待機にすることだ。これで、基本的に全勢力の八分の七が本部に駐留していることになる。

これほどまでの人数を本部に駐留させることに意味はあるのかとヴィクトリアは“マザー”に尋ねた。そこで彼らが見せられたのは数日前のボデージュ達の戦闘で回収された敵のファイルである。

中にはいかにして鉄壁の守りを固めるロベミリアにねじ込むかが詳細に書かれていた。おそらくボデージュ達が交戦した部隊はそれの初動部隊だったのだろう。早い段階で彼らを発見することができたのはロベミリアにとって大きなことだった。

まず人間達の目的を挫くためには本部施設の専守防衛が第一だった。そして、反撃の暇を与えずに全世界へとオートマータを送り続けることだ。こうすることによって、少しずつだが確実にロベミリアへと戦局が傾きつつあった。

“マザー”は戦力となるヴィクトリアを優先的に待機命令を出し、戦力としてはまだ未熟なアンドロイドを偵察へと出した。彼らが敵戦力を発見した場合は即座にDチームが現場へと送られ、徹底殲滅することとなった。

そして、ロベミリアは当面のヨーロッパ侵攻を諦めることにする。今の状況ではヨーロッパへと攻撃を行うことによって足元をすくわれかねないからだ。

こうして防衛で身を固めたところで反撃の策を考える。

資源的が豊富なアフリカ大陸を有することは持久戦においてかなり有利に働く。だが、その一方で人間側は他の全大陸を手中に収めることによって、やはり物資的に有利であることは変わらない。

だが、無尽蔵とも言える資源によってオートマトタを無限に作り出し、世界各地へと送る技術を持つロベミライアと、戦える兵には限りがある連合国側では戦力的にロベミライアの方が勝っていた。これを生かすできればたとえ物資量が不利でも勝利へと傾く。

だが、悠長に全世界を少しずつ攻撃するだけの作戦だけで押し切ることはできない。なぜならば、ロベミライアの技術はオートマトタの破片などから少しずつ解析されつつあったからだ。

相手もこちらと同じ攻撃手段を取れるようになれば有利になるのは連合国だ。絶対的な量は確実に格差となってロベミライアを不利へと追い込む。だから、どこかしらで逆転の一手を打ち込むことは必須だった。

そこで現れたのが例のファイルである。

この作戦を逆手に取って、逆に相手を攻撃する逆転の一手とする。これは有意義かつ効果的な作戦であるといえよう。

だが、このファイルがロベミライアへと漏れていることが向こうへ伝わっているのは確実だ。となると、人間側はこのファイル通行行動を起こさないかもしれない。

そこで世界最高峰のコンピュータである“マザー”の出番だった。チェスの相手の手のパターンを全て読み切るようことによって確実に勝てるようにするのと同じで、相手の切れる札を全て予測し、それを逆手に取る戦術を考案する。

もちろん、人間は滅ぶべきだという答えを一瞬で導き出した彼女にはそんなことは容易いことである。

すでにそれは案から行動へと変えつつあった。

そんな高度な情報戦が行われていることなど知らず、ヴィクトリ

アは戦闘に出られないことを同僚にぶつけていた。Aタイプのアンドロイドは彼女を除いてほとんどが毎週どこかに出られるので、同僚達は快く彼女の話聞いてやった。だが、それでも一向にイライラは晴れず、オートマータ相手の模擬戦闘で気を紛らわせながら毎日を過ごす日々を送っていた。

「姉さまといつも一緒にいられて嬉しいです」

戦闘よりもむしろ内部事情のまとめなどを行うことが多いBタイプのアンドロイドであるアレクは喜んで彼女につき従う。彼と一緒にいられることはいくらイライラを晴らす材料になったが、それでもまだ彼女の不満は完全に晴らされることはなかった。

「あー、もうイラつく！」

もう何体目になるかわからないオートマータとの模擬戦闘を終え、相手を鉄クズへと変えてなおも苛立ちの晴れない彼女は模擬戦闘室を後にする。共に訓練にいそんでいたのは内勤と外勤が交互に入るCタイプアンドロイドのレンシアだった。

「まあ、ヴィク姉は外に出られないもんねえー。あたし達は適度にストレス解消してきてるけど、ヴィク姉はストレスが溜まる一方よー。おかーさん」もたまにはヴィク姉を自由にしてあげればいいのにねー」

「お母さま”には何かしらの考えがあるのよ。それを私達が理解しようだなんてしよせんは無理無理。でも、ぶらつと軽く散歩でもさせてくれないかなあ」

「まあ、ヴィク姉は戦闘に偏ったDタイプを含めても最強の戦力だもんねえー……。おかーさん」が取っておきたいのはわかるかもおー」

二人は休憩室へとやってきた。イライラを解消するには糖分でもとってリラックスすることが一番だと学んだ彼女はジュースのボタンを押す。がこん、という音とともに自販機からはジュースの缶が吐き出された。

「なんかもう、最近是世界の改革だとか、そういうのはどうでもよくなってきたかな。以前はあんなに口すっぱくしてアレクに言っていたのに……。人間を殺すことは良いこと。だから人間を殺しなさい。もう、そんな風に思えなくなっちゃった。もう人間がどうとか地球がどうとか、どうでもよくなってきちゃった」

「うんにゃ、そういうことはあるかもねえー。でも、それはやっぱ少し頭に異常をきたしたってことじゃないかにゃー？ メンテナンスしてもらったほうがいいかもよおー？」

「ううん。大丈夫、ほんの一時の気の迷いだから」

ヴィクトリアはぐいっと缶ジュースを一気飲みする。口の中に甘味が広がって行って、少しだけ幸せな気持ちになる。

「おかーさん”に少しよくならないか言ってみるよおー。たまには散歩くらいさせてあげてってねー」

「うん、ありがと」

ヴィクトリアは空っぽになった缶をゴミ箱へと投じる。それはゴミ箱の縁に当たって床に転がる。

「あはは、もうこんなこともできなくなっちゃったのかな」

「気にしにゃーい。たまにはヴィク姉もそういうことあるよー」

レンシアは転がっている空き缶を拾ってゴミ箱に押し込んだ。

「じゃあ、さっそく“おかーさん”に言ってくるよー」

「もう行くの？」

「うんにゃ。どっちにしるもうすぐCタイプの定期集会だよおー」

「そっか……。わかった」

レンシアはぷらぷらと手を振りながら別れを告げる。

ヴィクトリアは寂しそうな笑顔を浮かべて彼女を見送った。

それから数日後、ヴィクトリアは久しぶりに外に出る許可を“マザー”からもらった。

そのことが嬉しくて、彼女は遠出をすることを希望した。



行き先はヨーロッパ、人間との戦線の最前線だった。

そのことを“マザー”は渋ったが、彼女は多少強引な手を使って欧州へと飛んだ。

「ここにはロベミライアはまだ侵攻していないって本当だったのね。人間がずいぶんたくさん見えるわ」

彼女は遠くにいる人間達を眺めながら感心する。

だが、不思議と今日は背中のドラゴリアにも、両膝脇に差し込んだレヴァンティンにも手が伸びなかった。純粹な悪であるはずの人間を討伐しようという気が起きなかった。

ただ、純粹に人間というものがどういう生き物なのか彼女は観察しかかったのだ。

その変心がここ数日間閉じ込められていたことに対する反発なのか、彼女は気付いていなかったが、ともかく今日は人間を殺さないことに決めると、人間達へと近付いていった。

アンドロイドの姿は人間に酷似している。はぐれた少女兵だといえれば拾ってくれるかもしれない。

彼女はそんなことを思いながら人間の兵達に近付いていった。

「誰だ！」

「待つて、撃たないで！」

そこで彼女は一芝居打つ。こうなってくると人間を騙すことが楽しく感じつつあった。

「私は第08対オートマータ部隊の者なの。オートマータに部隊を壊滅させられて、私だけが生き残って……」

ヴィクトリアは目を伏せて肩を震わせる。自然と人間のように泣く真似ができたことに彼女は驚きを感じつつも、そのまま芝居を続ける。

「わかった。我々が保護しよう」

彼らはあるさり信じ込んだようで、彼女を部隊に入れてくれる。

「こちらオキシデリボ密属部隊。第08対オートマータ部隊所属だと名乗る少女を保護した」

通信機に向かつて彼女の容貌を伝える。少女兵の数は決して多くないが、いないわけではない。そして、このヨーロッパには数多くの部隊が投入されている。全ての部隊を把握する者などいないし、ましてや架空の部隊名だ。もし同じ名前の部隊名がありでもしない限り、バレルことはないだろう。

「もう大丈夫だ。一人で心細かったらう？」

「お腹は空いていないかい？ レーシヨンやジェルドリンクであればあるが？」

「何か飲み物をもらってもいいかしら……？」

すぐに一人の兵士がジェル状の栄養ドリンクを差し出してくれた。ヴィクトリアはそれを受け取ると、少しずつ口に含んでみる。味は悪くなかった。

「ここはいつ戦闘が起こってもおかしくない地域だ。仲間が戻ってきたら一旦退こう。君の名前は？」

リーダー格の男が彼女に尋ねる。一瞬本名を言うべきか悩んだが、どうせこちらの情報はほとんど漏れていないのだ。それにありふれた名前だ。問題ないだろう、という結論に至り、ヴィクトリアは自分の名前を告げる。

「ヴィクトリアよ」

「ヴィクトリアか、わかった。短い間だがよろしく頼む」

兵達はヴィクトリアを保護するために一度キャンプに戻ろうということになった。ヴィクトリアは複数の強肩な男達に囲まれてぞろぞろと移動する。

「君の故郷は？」

「……ヨーロッパの今は名もない王国だった場所の出身よ。生まれてすぐにオートマータに家族を殺されて、奇跡的にその場に急行した部隊に助けられたの。それからは部隊の皆と一緒に過ごしてきたわ。でも、もう部隊は……」

そういう話はよくある話だ。もちろん、これは彼女のでっちあげであるが。だが、彼らはその話を即座に信じて、励ましの言葉をか

けてくれる。

彼女は次第に人間は悪しき存在ではない、そんな風に感じつつあった。

「あなたはどうして部隊に？」

「俺か……。俺も似たようなものさ。家族を幼い頃に殺されて、復讐心に燃えて戦いの道を歩んだ。その後軍に離反したりしたこともあったが……。今は所属をオキシデリボに変えはしたが、結局戦う道を選んだ」

「あなた名前は？」

「光間サトル（こうま さとる）だ」

「コウマサトル……。？ もしかして日本人？」

「ああそうだ」

それがオキシデリボに？ オキシデリボといえばアメリカの製薬会社だが、現在は国際連合の傘下にあるという。以前はロベミライアとも親交があったが、今では完全に国際連合に支配された企業と変わり果てた。それも密属部隊とどういうことか。ただの製薬会社ではないことは確かだった。

ヴィクトリアは疑問に思ったが、きつと複雑な事情があるのだろう。そんなもの、一兵士に過ぎない彼女には関係ないだろう。

「隊長、また女の子口説いてるんすか？ ユイちゃんに怒られるっすよ？」

「なんだかボデージユに似たような口調の男がやってくる。」

「ユイちゃんが席外してる隙に口説くとは……。なかなか隊長もやるっすね」

「口説いてるわけじゃない。身の上話を聞いてるだけだ」

「同じようなモノっすよ。あ、ユイちゃん来たっすよ」

すると、髪が真っ白い少女がやってきた。歳はまだ若い。

「お待たせしました。って、あれ、その子どうしたんですか？」

「戦地で拾った。部隊が壊滅させられたらしい」

と、別の少女がひょっこり顔を出す。

「拾いモノつてずいぶん珍しいもの拾ったのね」

彼女は遠慮せずにサトルの隣に座った。

「あ、私は篠川リン、よろしく」

「俺は近藤ヒロキっす」

「私はユリ、よろしくお願いします」

今まで黙って端の方で読書にいそしんでいた少女も、ゆっくり顔を上げて言った。

「烏丸ヒメ」

彼らがどうやら頭をつとめる部隊らしい。まったく、若いというのによくやるものだ。

「オキシデリボも随分柔なのね。まだあなた達、子供じゃない」

「子供で何が悪い？　そういうお前も子供だろう？」

サトルに反論されて、自分は違う、とヴィクトリアは言いそうになったが、よくよく考えれば今の彼女は不幸な少女兵、という設定だった。それを思い出してぐっところえる。

「私達はこれでもエリートなのよ？　そこらへんの一般兵とは違うんだから」

「ふーん、まあでも言うだけならいくらでもできるけどね」

「ねえサトル、こいつ生意気よ？」

サトルは眉間に皺を寄せて苦々しい表情を浮かべて言った。

「ケンカするな。不和が原因で壊滅した部隊もあるくらいだ」

「まあそうだけどさ」

「なら、私達が強いってことを示せばいいんじゃないですか？」

と、ユリが提案する。それナイスアイデア、とリンは明るい表情を浮かべて言った。

「どうやって証明するんすか……？」

「う、それは……」

「待っていれば敵はやってくる。それまで待てばいい」

サトルは落ち着いた口調で言う。ヴィクトリアはそれを見て、この男はなかなか場数を踏んでいるな、と思った。

そのとき、ヒメがふと本から顔を上げる。

「来る」

「ッ!？」

その少女の一言で彼らは武器を構えた。

「え、何が？」

ヴィクトリアだけはぼーっとしたままのんびりとしていたが、サトルに武器を持つように言われてとりあえずレヴァンティンを二丁、手に持った。

空が捻れ、そこに隙間が開く。そこから現れるのは多数のオートマータ兵。現れるとほぼ同時にサトルは両手の銃を連射する。

ヘビームス ストライカー  
巨獣と清羽という大小不格好な二丁拳銃を持つサトルは軽い一撃をまず当てて弱らせてから、的確に大きい一撃を当ててオートマータを倒していく。

やがて空中にいたオートマータも降下してきてブレードや銃を乱射してくる。

だが、ヒメの適切な指示の下、彼らは攻撃をかわしながら確実にオートマータ兵を殲滅していく。

ヴィクトリアは最初、彼らの実力を測るために見ていたが、ぼさつとしてないで戦え、とサトルに言われてオートマータへ攻撃をしかける。

オートマータはアンドロイドには攻撃しないようプログラミングされているが、ヴィクトリアはそれに気付かれないよう接近する前に確実に倒す。

「ひゅっ！ ヴィクトリアちゃんもなかなかやるっすね！」

と、ドラゴリアのように長いライフル、シルフィード精霊と、近接用の銃器を使い分けながらヒロキは感心する。

「ま、長いこと戦ってるからね！」

ヴィクトリアは返事をしながらオートマータを焼き払う。アンドロイドの前ではオートマータなど敵ではない。

「ぶむ、場数は踏んでいるようだな」

冷静な分析をするのはサトル。彼はかなり冴えているな、とヴィクトリアは思った。

そして、何より凄いと彼女が思ったのはユリという少女だ。鞭のように長く伸びるブレード、戦帝<sup>ルライ</sup>を味方に当てないよう、それでいて上手に操ってオートマータをぶつ切りしていく。この手の武器は扱いにくいハズなのに、それを難なく扱っていることに舌を巻く。そして、口の軽さ同様、身のこなしも軽いリンの動きもなかなかに関心すべき動きだ。今まで数多くの人間とヴィクトリアは戦ってきたが、彼らと戦うことになるすると、なかなか苦戦しそうだ。

「トドメーっ！」

シルバーハウンド

銀狼という超振動ナイフで敵の首を討ち取ると、リンは勝利宣言する。

「リン、勝利宣言はまだ。もう一匹、大きいのが来る」

そうヒメが言ったとき、再び空間が割れた。

現れたのはとてつもなく巨大なオートマータ。ヴィクトリア達がXL級と呼んでいる、オートマータの中では最強クラスのものだ。

ヒメがミサイルの動きを予測して言った。まさにその通りの動きでミサイルが飛んでくる。彼らはヒメの指示に従って動いた。

「まさか、プレコグニション？」

「当たり前。あの子は三秒後の未来が視えるのよ」

と、答えるリサは素早い動きでミサイルを回避する。

「私に任せてください」

ユリがそう言うと同時に彼女はブレードを振るう。わずか一撃で巨大なオートマータの右腕が落ち、オートマータは悲鳴を上げた。

ヴィクトリアはそれを見て、あのブレードはただのブレードではない、と気付く。おそらくレヴァンティンと同じヒート機構が搭載されているな、と当たりをつけた。そうでもなければ特殊合金装甲のXL級のオートマータの装甲が一撃で斬られるなんてことはありえない。

「私も黙って見てるだけじゃないんだから」

ヴィクトリアは背中ドラゴリアを構える。

『射撃誘導システム起動』

攻撃される恐れはない。確実に邪魔されることなく撃てることから、彼女は時間がかかっても確実に仕留められる方法を選ぶ。

『データ収集……充電開始』

このまま自分がただの一般兵と変わらない、と思われるのは嫌だった。

『手ブレ修正、ターゲットの移動先を想定』

ならば、少しでも凄いところを見せて、彼らを見返してやりたい。

『射撃準備完了、命中率99.8パーセント』

そう思った彼女は迷わず引き金を引いた。

決して軽くない衝撃とともに手の中の銃が爆ぜる。一筋の閃光を残してオートマータの心臓部を貫いた。

その一撃でオートマータは大きな音を立てて倒れた。

「凄いわね。見直しちゃったわ」

リンは驚きを表情に浮かべて言った。

「それ、どういう武器なんすか！ 見せてほしいっす！」

と、ヒロキはドラゴリアに触りたがる。

「どういう機構の銃なんだ？ 俺も興味があるな」

銃マニアのサトルも覗きこむようにドラゴリアを見た。

「凄いです！ どこ社製の武器なんですか!？」

まさかロベミライア製とは言えず、ヴィクトリアは苦笑いを浮かべた。

「……まあいい。そろそろ本部に戻るか。そろそろ弾もなくなってきた。補給が必要だ」

「そうね。食糧も大分減ってきたし。そろそろ退き時よね」

「あ、それなただけ」

その時、彼らの傍に巨大な航空機が舞い降りる。

そこからヴィクトリアの部下のアンドロイドが顔を覗かせた。

「ヴィクトリア様、そろそろ本部へ戻られる時間です」

「ま、そういうこと。私、ホントはロベミライア側なのよ」

一同の表情に驚きが走る。中には武器を身構える者さえいた。

「ヴィクトリア様、この人間達は掃討していきますか？」

「その必要はないわ。彼らは　まあ一応一緒に戦った仲だしね」

ヴィクトリアは彼らに背を向けると、航空機の扉の縁に手をかけた。

「またどこかで会いたいわ。戦場以外の場所で……ね」

「待て。お前は一体……」

サトルは銃も手に持たずに航空機へと駆け寄る。

「私はロベミライアのアンドロイド、ヴィクトリア。あなた達がチルドレンと呼んでいる部隊の一人よ」

「俺達を敵だとわかって言っているのか？」

「一緒に戦ってわかったわ。あなた達は悪い人じゃない。あなた達を戦友と思つての言葉よ。信じる信じないは自由だけだね」

航空機が舞い上がる。風が大きな音を立てているが、それに負けないよう、ヴィクトリアは叫ぶように言った。

「さようなら！　またどこかで会いましょう！」

そのまま彼女を乗せた航空機は彼らを残して上がっていく。

ヴィクトリアは扉を閉じると、中の椅子に座った。

「人間を殺さなくてよかったのですか？　それにあんなことまで言うて……」

「さあね。なんとなく言いたかったから言っただけよ。それに彼らは殺したくないわ。誰か他のアンドロイドの手にかかって死ぬことを祈りましょう」

航空機はまっすぐにロベミライアの本部へと向かって飛んでいく。

その道中、彼女は共に戦った戦友の背中をしっかりと脳内のメモリに焼き付けながら、彼らの言葉の一つ一つをしっかりと噛みしめていた。



#### 第四話 The Hesitator (後書き)

どうもこんばんは、三話連続更新の最後の二话ですね、ほーらいです。

第二部のメンツが出てきました。

もはや前部での登場人物がなんらかの形で登場することはもはや定番となりつつあります。

前部では物語の根幹にそこそ関わっていた第一部のメンツですが・  
・第三部では第二部のメンツはどれくらい登場するのでしょうか？  
せっかく連合側最強のユリがガチバトルできるようになったのですから、活躍させてあげたいですね。  
というわけで、今後の彼らの活躍を楽しみにしててくださいね。  
では、次回予告です。

人間との共同戦線を経験したヴィクトリアは大きな心の変化を感じていた。

何が正しくて、何が間違っているのか。彼女にはそれがわからない。

そうしてひたすらに図書館に通い続けてそして彼女は一つの結論に至った。

正しいことなのかわからない。間違っていることなのかもしれない。

けれども、彼女はその答えを信じようと思った。

次話、第五話 The Betrayer

## 第五話 The Betraye r

### 第五話

あれから数日が経過した。

依然ヴィクトリアは本部から出ることができなかったが、不思議と以前のようなイライラを感じることもなく、ときたまオートマータ相手の模擬戦をこなしながら毎日を過ごしていた。

彼女は自分の信念に疑問を抱きつつあった。

本当に人間は悪なのか。それが彼女にはわからない。

併設の図書館にこもって人間の書物を読んだり、他のアンドロイドに人間との戦闘の様子を聞いたりして、彼女は考えていた。

“マザー”に尋ねてみようかとも思ったが、きつと彼女は激昂するだろうと思い、結局心の中にしまいっぱなしにしていた。

“マザー”が本当に正しいのか、それとも自分の内に生まれつつある思いが正しいのか、それが知りたくて彼女はまた外に出たいとも思いつつあった。

「お、ヴィク姉えー！」

ヴィクトリアが通路を歩いていると、向こう側からレンシアがやってきた。ヴィクトリアは軽く手を挙げて会釈すると、彼女の前に立つ。

「最近結構図書館に籠ってること多いんでしょー？ ヴイク姉、この前の散歩のときなんかあったのぉー？」

「ちよっとね。人間は本当に地球のバイ菌なのかなって思ってたさ」  
レンシアはしばらくの間考えていたが、やがて思いついたように答える。

「やっぱりヴィク姉おかしいよぉー。一回メンテナンス受けた方がいいんでないー？」

「あはは、そうかもね」

ヴィクトリアは笑ってごまかす。自分がこのロベミライアという国の中で異常な存在であることは気付いていたが、このままこの思いをデリートしてしまうのも惜しいと彼女は思っていた。

「あ、そうそうー。ヴィク姉に“おかーさん”から伝言ー」

「どうしたの？」

「明日の外回り出ていいってさあー。っていうのも、あたしが“おかーさん”に進言したのあー。いい加減ヴィク姉ばかり駐留は可哀想ってねえー。そうしたら、あたし達Cタイプが残る代わりに出てOKだつてさあー」

「本当に？ わざわざありがとね」

「どいたまあー」

レンシアは嬉しそうににっこり笑う。

「ヴィク姉すっかり準備しといてねえー。じゃ、ばいびいー」

そう言つてレンシアはヴィクトリアの隣を通り過ぎていく。

ヴィクトリアは手を強く握る。外回り、ということとは人間を殺さなければならぬ。自分の中に生まれつつある疑念が正しいのか、それとも“マザー”の言葉が正しいのか。それをはっきりさせないまま任務に移るのは嫌だった。

彼女は急ぎ足で図書館へ向かう。本部内で唯一とも言える人間のことかわかる場所だ。

本のデータが入ってるデータディスクを書棚から取り出す。そして、ポケットの中に入っている再生機に突っ込んで、中のデータを再生させる。

彼女が選んだのは人間の歴史に関するディスクだ。特に近代、ここ百五十年付近で人間がどのような歴史を歩んできたかを読むことができるディスクだ。

人間は世界大戦を終えて、平和を維持するために国際連合を立ち上げる。世界各国は永遠の平和を誓って集い、世界平和を進めてきたはずだ。

未だ紛争の起こっている地域こそあったものの、世界は概ね平和

だった。

途中で核配備をしようと先走った国がいたり、百年ぶりの金融恐慌を迎えたり、地球温暖化防止のための条約を巡って意見が拮抗したりしたことはあつたが、それでも人類は兵器を用いない戦いを行いなから頑張ってきたハズだ。

そして、数十年前、“マザー”が完成する。

“マザー”は莫大な計算の結果、人類が地球に最も不要な存在だという答えをはじめ出し、人間を掃討するために人間を殺す戦いを始めた。

オートマータ、アンドロイド、地球に悪影響を与えないよう、NBC兵器は用いずに戦いを進めてきた。だが、最初に戦争の火蓋を切つて落としたのはロベミライアだ。戦争が地球へ莫大な悪影響を与えることはわかりきっていたことのハズなのに。

“マザー”は人間を殺すために地球を汚していることに気付いていないのだろうか。オートマータの壊れた残骸は確実に地球を汚染する。大量に使われている水銀は海や陸を汚し、燃料に用いられている石油から生み出される窒素酸化物は空気を汚す。

水素核融合電池が用いられているのはアンドロイドのみだ。オートマータにはその数を考えるとコスト的な問題で搭載することができない。だから地球を汚す石油が主に用いられているのだ。

彼女は思う。本当に地球を汚しているのは人間だろうか。人間は環境を保全するための条約や議定書を幾度となく批准し、地球環境を守ろうとしてきたハズだ。

それを正面から破壊したのは誰だ。

グイクトリアはわかった。真の悪者は誰なのか。

だが、それに気付いたところで彼女にどうすることができようか。彼女はただの一兵卒に過ぎない。全権を握っているのは“マザー”なのだ。彼女が一人反旗を翻したところでどうにもならないのだ。

グイクトリアは自分の部下に自分の考えをインストールすることを思いついたが、それでもアンドロイド全体の四分の一に過ぎない。

それだけでは、Dタイプアンドロイドの力を持ってすれば鎮圧することができる。他の部隊のアンドロイドにインストールするのはどうかとも思ったが、残念なことに他機種では互換性がない。

彼女は机を叩いた。自分一人が動いたところでこの国の暴走は止めることができない。そのことがどうしようもなく悔しかった。

「姉さま……？」

彼女が机を叩いたところを見られてしまったのだろうか。アレクが心配そうな表情を浮かべて彼女を見下ろしていた。

「どうしたんですか？」

「ああ、アレク。ちよつと私、バグっちゃったかもしれない」

彼女は悲しげな声でアレクに言った。

「最近人間が正しいのか、“お母さま”が正しいのかわからないの。人間はここ数十年、地球環境を元に戻そうと尽力してきたでしょ？でも、その努力を踏みにじって私達は人間を殲滅しようとしている。それって本当に正しいのかしら？」

アレクは黙って聞いていた。まるで罪を懺悔する少女のように、ヴィクトリアは彼に話し続けた。

「アレクはこの前言っていたわよね。本当に人間は悪い存在なのかって。あのときは自信満々で首を縦に振れたのに、今じゃどう答えればいいのかわからない。人間は正しいんじゃないかって思えるの。でも、私一人じゃこの国を変えることはできない。私は……私はどうすればいいの？」

「姉さま……」

アレクは腰を折ってヴィクトリアの目の高さに顔を合わせる。

「姉さまは……姉さまのしたいようにすればいいんです。僕はそれに従っていきますから……」

「アレク……」

アレクはヴィクトリアの手を握った。

「姉さまは言っていましたよね。姉さまを信じなさい、って。あの命令はずっとずっと、これから先も永遠に有効です。たとえ“母上”」

が何と言おうとも、僕は姉さまに付き従っていきます」

「わかった……。わかったわ、アレク」

ヴィクトリアは立ち上がる。そしてアレクが握る手に力を込めた。「やりましょう。私達だけでもできることがあるはずよ」

「……はい！」

ヴィクトリアは“マザー”のある部屋へと向かっていた。

軍靴で堅い床を踏みながら、その扉の前に立つ。

そこにある扉は天まで届く扉のように巨大に感じられた。だが、彼女は決心していた。

一歩、足を進める。扉は自動的に開き、真つ暗な部屋へと通される。

そのほの暗い部屋の中、モニターには女性の顔が輝き、にっこりと優しい表情を浮かべて笑っていた。

「お母さま」、お願いがあつて参りました」

『お願い……？』

「レンシアから明日の任務のことを聞きました。その任務なのですが、Bタイプチームを連れていきたいのですが、よろしいでしょうか？」

返答までしばし時間がかかった。おそらく、ヴィクトリアの思っていることを計算で推測しているのだろう。

『なぜBタイプを？』

「戦闘経験の乏しいBタイプを戦力として強化させるためです」

『……わかりました。許可しましょう。ただし、国外へ出てはいけませんよ？ 国内の巡回のみで、人間を発見次第殲滅することがあなたの任務です。わかりましたか？』

「はい、“お母さま”。では、失礼します」

ヴィクトリアは深く礼をすると、部屋を退出する。

しばらくの間、モニターの中の女性は複雑な表情をしていたが、

やがて一つの答えにたどり着いたのか、笑みへと表情を変える。

『惜しいですが……仕方ありませんね』

彼女の笑みはとても悲しいものだった。悲しそうに笑いながら、けれども彼女はいつまでも笑い続けていた。

## 第五話 The Betrayal (後書き)

お久しぶりです、ほーらいです。

更新が遅くなった言い訳は活動報告でします。

ここでは一つ、申し訳ありませんでした、とだけ言っておきます。

さて、今回のお話はヴィクトリアの心変わりに関するお話です。

プログラムで生まれ、最初に想定していなかった行動を起こしたら、いい結果を生んだとしてもそれはバグです。

でも、それは生物の場合“進化”と呼ばれます。

進化とはDNAにバグが生じ、その結果として生存に有利に働いたときに発生します。

アレクや彼女は他のメンバーよりも先に進化をしたのかもしれない。

しかし、この進化の結果、生き残れるかどうかは・・・また別の話です。

では次回予告です。

ヴィクトリアとアレクは任務前に自分達の思考を部下にインストールした。

これで部下達は二人と同じ思考 すなわち、人間が正しいという考えを持っているわけである。

そして一行は出発した。この世界を 平和にするために。

次話、第六話 The Runner



## 第六話 The Runner

### 第六話

ヴィクトリアとアレクは任務出発前に自身の思考を予め部下にインストールした。これで彼らの部下は全員、ヴィクトリア達と同じ考えを持つことになった。

ヴィクトリアは兵器庫から持てる限りの弾丸を持ち出した。といっても、レールガン用のオリハルコン弾は数が少ない。量産することが難しいからだ。ドラゴリアの使用回数は可能な限り控えようとヴィクトリアは思った。

さらに念を入れて、ヴィクトリアとアレクの分、オリハルコンコートを持ち出した。各リーダー用に作られたオリハルコン製のコートは、強靱な防御力を発揮する。

そして彼らは出発する。もちろんのことながら、“マザー”の言いつけなど守るハズもない。可能な限り速く北へと向かう。ただし移動は足のみだ。かなりの時間がかかることが予想された。

最初の目的は人間の部隊と合流することだった。できることなら、この前戦闘を共にしたサトル達の部隊と出会えればいいと彼女は思っていた。

彼らの走る速度は時速三十キロほどである。アフリカを縦断するには数日かかる計算だった。

まともな食糧も持ってきてはいない。とはいっても、水素さえあれば動く体だ。その程度、どうとでもなるだろう。

「姉さま、僕達の作戦、バれてませんよね？」

「わからないわ。私が“お母さま”にBタイプチームを連れていきたいと言ったときにもうバれてるかもしれない。けれど、それでもやるしかないのよ」

夜まで問題なく部隊は進んでいた。一同は一度休憩を取ってキャ

ンプを開く。

といつても、火を焚いて地面に座るだけの簡単なものだ。テントもなければ寝袋もない。土の上に寝転んで寝るだけのものである。

Aタイプ、Bタイプのメンバー半分ずつが起きて番をする。途中で何度か交代を挟み、必ずヴィクトリアかアレクのどちらかが起きているというものだ。

「姉さま、交代の時間です」

「ん、わかった」

ヴィクトリアはアレクと交代し、辺りの様子を探る。戻ってこないのを不審に思つて、今夜辺り偵察部隊が組まれるのは間違いないだろう。だが、今のロベミライアには“目”がない。偵察が手間取ることは必須だ。

彼女は自問する。本当にこれで正しかったのだろうか、と。捕まれば確実に現在のプログラムのアンインストールされ、また新しい人格をインストールされ直すだろう。それはすなわち、彼女にとつては死を意味する。

各隊二十人ずつほどの部下を巻き込んで、独断決行した作戦。捕まれば彼らと同じ処置が施されるに違いない。

それを考えると、今回の作戦は失敗が許されなかった。

もうここまで来てしまつたら後戻りはできない。

余計な雑念は追い出そう。

そう彼女は決めると周囲への気配りへと意識を移していった。

やがて、東の空を太陽が染める。

あれから幾度と交代を繰り返して、やがて朝が来た。

時刻は未だ六時前、だがそれでも彼らは活動の準備を始める。

そろそろロベミライアの追撃部隊が現れてもおかしくなかった。

ヴィクトリアの内蔵リーダーには未だ航空機の類は映っていない。彼女のリーダーは肉眼とは別に数十キロの範囲内を索敵できる。そ

のリーダーに映っていないということは、まだ出撃していないのだらう。

このまま出撃される前に人間と合流できればいいのだが。そう思いながら、彼女は水の入ったボトルを傾ける。

胸の中にある核融合水素電池へとエネルギーが供給されいった。

これで今日一日は動ける。

「さあ、皆行きましょう」

キャンプの跡を完全に無くすと、彼らは再び走り始めた。

「そろそろ追撃部隊が来てもおかしくないんだけど……」

出発してから丸一日が経っている。そろそろ追撃部隊が追ってきたもおかしくはない。

「もしかして、僕達を見逃すつもりなんでしょうか」

「まさか。ロベミライアの主力部隊の半分を持ってかれたのよ？

みすみす見逃すわけがないわ」

だが、彼女のリーダーは相変わらず敵影をキャッチすることができない。明らかに不自然過ぎた。

「ともかく先を急ぎましょう」

一行は荒野を走り続ける。途中山や谷もあったが、難なく進んでいく。

そうして何日が過ぎただろうか。彼らはアフリカの最北端まで辿り着いた。

エジプトからアラビア半島を迂回してヨーロッパに入る予定だった。

ロベミライアはみすみすアンドロイド兵半分を見逃すつもりなのだろうか。ヴィクトリアには“マザー”の考えていることがわからなかった。

何も問題なく彼らはエジプトを後にした。ここからはアラビア半島、ロベミライアの外だ。

「おいでなすったわね」

アラビア半島へと足を踏み入れた途端、周囲の空間が歪む。

空間が裂け、そこから巨大な機械兵が一体現れた。

「各自戦闘配備！ オートマータを殲滅しなさい！」

オートマータ一機でアンドロイド二十人を相手しようなどと、“マザー”は本当に思っていたのだろうか。たとえX1級を出してきたところで問題にならない。

『まあまあ、少しお話でもして頭を冷やしましょう』

ヴィクトリアはその声の冷たさに足がすくむのを感じた。

オートマータがモニターを持っている。そこには柔らかな女性の顔があった。

『国外へ出てはいけません、と言いましたよね？』

「“お母さま”のやっていることは間違っています。だから私はそれを正すまでです」

モニターの女性は微笑んでいたが、その表情を崩さないままに言った。

『……わかりました。あなたがそう思ったのなら仕方ないことなのかもしれません。ですが、私としても人間達に可愛い子供達を預けたりはしません』

オートマータが赤く発光する。そこでヴィクトリアは気付いた。

“マザー”は最初から戦って止める気などないということに。

『さようなら、私の愛しい息子、娘達』

「逃げ……ッ！」

瞬間、オートマータが大爆発を起こす。こいつはオートマータじゃない。オートマータの形をした爆弾だ。それもこれだけの大きさならば、その火力は半端ないものとなる。

ヴィクトリアはなんとかアレクの体に覆い被さる。せめて彼だけでも、と想っての行動だった。

周囲を数千度の炎が包み込む。アンドロイドといえど、これだけの高温には耐えることはできない。オートマータを中心に放射状に熱線と爆炎が広がっていく。

「ヴィクトリア様……」

そのとき、ヴィクトリアの前に数人のアンドロイドが立ち塞がった。

「あなた達……！」

「せめてヴィクトリア様だけでも生き残ってください」

炎で身を焦がしながら、彼らは微笑む。

「さようなら、ヴィクトリア様……」

炎の勢いが弱まったとき、無事だったのはヴィクトリアとアレクの二人だけだった。

ヴィクトリアとアレクもオリハルコン製のコートを着ていたのと、数人のアンドロイドが盾になってくれたおかげで助かったのである。まだ空気に熱が残る中、仲間の残骸を見渡しながらヴィクトリアは立ち上がった。

そこにはもう、弱気な愚痴を聞いてくれた仲間も、無茶な命令を聞いてくれた仲間も、ヴィクトリアを憧れていた仲間もいなかった。ヴィクトリアは強く拳を握りしめ、奥歯が砕けそうなほど強く噛みしめる。

「なんで……私のせいで……」

「姉さま……」

二人はわずかに焼け残った仲間の残骸を集め、大きな穴を掘り、そこに全て埋葬した。

「もう、戻れはしない。この道突き進むしか……ないのね」

「僕は……僕は姉さまに付いていきます。」

熱い風が吹き抜ける中、二人はいつまでもそこに立って、死んでいった仲間達に黙禱を捧げていた。

## 第六話 The Runner (後書き)

こ、こんにちは・・・ほーらいです・・・。

なんとというか、読者の皆様、本当にすみませんごめんなさいお願いだから石を投げたりウィルス仕込んだメールとか送らないでー！

いやはや、ほとんど二ヶ月ぶりの更新ですね、ハイ。

まあ、その辺りの事情云々は活動報告ですとして・・・。

ここでは内容に関する解説ちつくなものをば。

はい、出ました、部品シリーズ名物オリハルコン。

ヤバイですよー、最強の金属ですよー。

構成物質が何なのかとか、そんな物体がこの世に存在するわけないだろ、だとかの苦情は受け付けません。

ガンダニウム合金だって存在するんだから、いいじゃない。

なんかよくわからないけどすごい超合金はSFの浪漫ですよ。

さて、それはさておき今回のお話はヴィクトリア&アレク離反のお話です。

なんだかお話の運びが強引な気がするんですが、そこそこはあまり気にしないでやってください。

っていうか、コレ以外書いた当時は思いつかなかったんです。

さて、いつまで経ってもマザーが追ってこなかったのは、決して文章の量を稼いで一話稼ごうとしたからとかじゃありません。

マザーは完全なコンピュータであり、プログラムであるが故に、言葉を言葉通りにしか受け取ることができません。

すなわち、期限をしっかりと名言しなかった彼女は、ヴィクトリア

が外回りから戻ってくるのに何日かかっても不審には思わないのです。

ただし、国外（アフリカ大陸の外）へ出てはいけないとは名言していたため、アラビア半島に入った瞬間に攻撃をしかけてきた、というわけです。

・・・あれ、アラビア半島とアフリカ大陸って繋がってた・・・っけ？

（・・・地図確認中）

よかった、エジプトのトコで繋がってた・・・。

まあ、そんなわけでナパーム弾で粛清されたというわけです。

アンドロイドといえど、身体を構成する物質はタンパク質、熱には弱いんです。

・・・元々は何しても死なないくらい頑丈な設定だったんですが、それだとこの辺の話とかで困るのでやめました。

さて、仲間を喪った彼女らはどうするのか・・・。

次回更新は・・・一応、来週の予定ですが・・・どうなることやら。

さて、次回予告です。

仲間を喪ったことに心を痛めつつも、二人は北上し続けた。

ヨーロッパまで進むと、彼女らは人間の部隊を探し出す。

「私達、オキシデリボ密属部隊の者なの。仲間とはぐれちゃって…

…。なんとか連絡取れない？」

彼女は口にした。かつて共に戦い、そして別れた人間の部隊の名を……。

次話、第七話 The Thinker



第七話 The Thinker(前書き)

編集履歴

次回予告の中の一文

## 第七話 The Thinker

### 第七話

仲間を見送った二人はアラビア半島から迂回してヨーロッパに入っていた。

二人の間に会話は無い。仲間を失った心の痛みから、二人ともまだ立ち直ることができなかった。

ただ、仲間の屍を埋葬したとき、ヴィクトリアは思った。仲間を犠牲にしてまで生き残ったからには、何がなんでもロベミライアの改革をやり遂げなければならぬ。

彼女は周囲をサーチして人間の部隊を探す。こんなときに限って人間になかなか出会わなかった。

そうやって数日を過ごす。いい加減痺れを切らした頃に彼らはようやく人間の部隊を見つけることができた。

かつてフランスがあった辺りの地域で人間の部隊が駐留しているのを発見する。彼らはキャンプを張って食事をしている最中だった。ヴィクトリアとアレクはキャンプへと向かう。

「あー！」

ヴィクトリアは大きな声を張り上げる。すると何人かの男が気付いたのか、こちらに手を振ってくる。

「どうした？」

「私達、オキシデリボ密属部隊の者なの。仲間とはぐれちゃって…。なんとか連絡取れない？」

「オキシデリボ密属部隊……？」

彼らは不思議そうな表情を浮かべて顔を見回す。

「知らないな」

密属というくらいなのだから、一般には公開されていないのだから。彼らが知らないのも無理はない。

「オキシデリボと連絡取れない？」

「ちよつと待て」

男は通信兵らしき男と話をする。すぐに通信兵は準備を行うと、こちらにイヤホンマイクを差し出してきた。

『はい、こちらオキシデリボ株式会社でございます』

「あの、光間サトル隊長と連絡取れませんか？」

『少々お待ちください』

しばらくの間、イヤホンの向こう側から音楽が流れていたが、やがて音楽が止まり、男の声が聞こえてくる。

『光間だ。誰だ？』

「私、ヴィクトリアよ。数日前にご一緒したでしょ。覚えてる？」

しばらくの間、イヤホンの向こう側は黙っていたが、やがて意を決したのか、声が聞こえてくる。

『……何用だ？』

「はつきり言うわ。亡命したいの」

『何が目的だ？』

「ロベミライアに幻滅したのよ」

『アンドロイドに意思があるのか？』

ヴィクトリアはそういう思考に至った経緯を説明する。

「あなた達の生き様を見て思ったのよ。人間は滅ぶべき生き物じゃない。私達は間違っているってね」

『……畏じゃないのか？』

「なんならあなたに武器を全て預けてもいいわ」

『……少し待て』

再び保留の音楽へと変わる。

少し、という割にはかなりの時間がかかった。

しばらくして、二人の声が聞こえてくる。

『待たせた。ウチのトップを連れてきた』

『え、えっと、デオキシリボ会長の桜木ユイと申します』

「こんにちは、私はロベミライアAタイプアンドロイド元リーダー、

ヴィクトリアよ」

イヤホンの向こうの声は若い少女のものだった。

「あなたが会長？」

『あ、はい、そうです』

「にしては随分若いわね」

『よく言われます』

困ったような口調でユイは言う。

「まあいいわ。話はサトルから聞いた？」

『はい、亡命したいんですよね？』

「そ、二人分の行き先を用意してくれる？ その見返りにロベミリア製のアンドロイドを隅から隅まで調べる権利をあげるわ。オータマータ以上のロベミリア最先端技術の結晶を見ることが出来るのよ」

「姉さま!？」

アレクが大きな声を上げる。

「いいのよ。それに、まだ私達には隠された性能があるはず。それを発見してもらったためでもあるのよ」

「隠された機能ですか……？」

ユイが不思議そうに尋ねる。

「“お母さま”が以前に言っていたのよ。バージョンアッププログラムが完成したって。それはあまりの機能故に搭載はされたものの、アップグレードはしなかったらしいの。貴女達ならそれを探し出して実行してくれるはずだわ」

『わかりました。あなた達を受け入れます』

「ありがとう。私達はどうすればいい？」

『その部隊と一緒に帰還してくださいアメリカに戻り次第、こちら側から迎えに行きます』

「了解」

ヴィクトリアはイヤホンマイクを外し、通信を切る。

「この部隊はいつ戻るの？」

「明日にはアメリカ本土に帰還する予定だ」

「OK。私達も連れていってもらえる？」

「構わない。一人や二人増えても変わりはないからな」

その日はその部隊のメンバーと夜を過ごした。

途中で見張りを交代したり、部隊のメンバーと会話したりと楽しい夜となった。

日が明けた。ヴィクトリアは索敵システムを起動して、見張りを続けていた。

「そろそろ出発するぞ」

キャンプを畳み、部隊のメンバーは撤収の準備を始める。

今のところ索敵レーダーの範囲内に敵はいなかった。

“マザー”はあの爆弾型オートマトンでアンドロイド部隊を全滅させることができたと思っているのだろうか。

あの“マザー”のことだから、おそらく万が一のことを考えているに違いない。

だが、例の作戦のことを考えると、アンドロイド部隊を半分失ったロベミライアに戦闘へ出せるアンドロイドはいないはずだ。

となると、再び爆弾を搭載したオートマトンを出撃させるか。またアレを出されたら、もう次はない。

「どうしよう……私達がアメリカに移動してる間に攻撃されたら終わりよ」

「あの爆弾ですか……？」

「そう。私達が生きている限り、ロベミライア本国に位置情報はダダ漏れだし……」

二人の位置は衛星を介して常に本国へと送信されている。つまり、向こうの準備さえ整えば攻撃を行うことが可能なのだ。

二人は唸って考える。こうしている間にも、攻撃が行われてもおかしくはない。

「そうだ！ 一体本体電源を切つて、予備電源に切り替えればいいんじゃないですか？ GPSの装置は本体電源依存だから、予備電源に切り替えれば働くなるはずですよ！」

アレクは顔を上げて言った。それに対し、渋そうな表情を浮かべるヴィクトリア。

「予備電源の稼働時間は24時間よ？ その時間内にアメリカへの移動が終了しなければ……」

「信じるんです。電源の切れた僕達を人間が壊さないと……」  
アレクは目を輝かせて言った。

ヴィクトリアは疑問だった。人間を信じてみようかという気にはなったが、自らの運命全てを委ねるほどまでに信用してはいない。それなのに、彼は信じると言った。ここまで信じられるのはなぜなのだろうか。

「予備電源モードだと消費電力の激しいレールガンは使えないわよ？ 空中戦になった場合、射程の短いレヴァンティンは使えないし……」

「そのときは僕が戦います。僕のフランスス力なら、空中でも戦闘可能です」

「あなたはまだ戦闘経験が少ないし……」

「人間ならためらいますが、オートマータならやれます！」

「アンドロイドでも？」

彼はそこではし黙った。まずないと思うが、本部防衛の人員を割いてアンドロイド兵を出してきた場合、アレクはためらいなく彼らを倒せるだろうか。

答えは否、だ。敵である人間すら倒すことのできないアレクだ。仲間だった者を倒すなんてことはもちろんできるわけがない。彼の覚悟では逆に返り討ちにされるだけだろう。

「あなたをつき動かしているものは何？ あなたの信念は？ まさか私がやるから、なんて言わないわよね？」

「僕は……僕は……」

アレクは何も言うことができなかった。

「ごめんなさい、少し意地悪をしすぎたわね」

「姉さま……」

ヴィクトリアは彼に背を向けると、先に歩き出した部隊の後を追って歩き始める。

アレクは何も言うことができず、ただ黙って彼女の背中を追うことしかできなかった。

## 第七話 The Thinker (後書き)

一壁一・、( ) そーっ・・・  
一壁一三サッ  
一壁一・、( ) そーっ・・・  
一壁一・、( ) <皆様ごめんなさい

というわけで超ウルトラ久しぶりに更新ですよ。

何してたかって？ トリリス書いてました。

もう43話までいきましたよ。それでようやく第二章の終わりが見えてきた感じで・・・。

でも、最初に明言してたほのぼの系ファンタジーってのはもう崩れつつあります。下手するとダークファンタジーの仲間入りです。

マリスが白兵戦するわ、殺人鬼は現れるわ、クロスオーバーしまくるわ・・・。

なんかほのぼの系っていう名残らしきものが見当たらないのは気のせいでしょうか？

まあいいや、それをここで語っても仕方がない。

それにしても、サトル君達はよくヴィオレッタを信用したものですね。

アレか、昨日の友は今日の敵か。あ、それじゃ逆じゃないか。

今回の解説は本体電源と予備電源の違いー！パチパチ！

本体電源というのは文字通り、主電源のことです。

全身のあらゆる機能を100%発揮するためには大量の電力が必要です。

彼女らアンドロイドは核融合水素電池で動いているわけですが、こいつはすっごい量の電力を生み出せるスーパー電池です。何が凄い



ってミスつたらチエルノブイリの二の舞になるくらい凄い。

さて、予備電源のほうはというとこちらは充電式です。たぶんリチウムイオン電池か何か。特に決めてないです。

これは本体電源が使用不可になったりした際に使用する一時的な電池です。

もちろん、大量の電力を必要とするレールガンを使用することはできません。使用することはできますけど、使った瞬間に予備電源の電気全部使ってお陀仏です。

ちなみに、予備電源使用中は色々な機能の使用が制約かかります。

体内搭載リーダーだとか、作中に出てきたGPSなどなど。

まあ、今回はソレを逆手に取ったわけですけどね。

では、そろそろ次回予告いきましようか。

迫り来るはかつての仲間。

煌びやかな鋼糸が空気を切る。

「複数CPU同時並列モード展開いー。クレヤボヤンス能力強化によりいー、グイク姉達の場所を発見するよおー」

かつての仲間は 決して容赦はしない。

次話、第八話 The Chaser

## 第八話 The Chaser

### 第八話

「準備OK。全員乗り込んだぞ！」

「忘れ物はないな？」

ヨーロッパ、フランス郊外にて彼らは最後の確認を行っていた。これからヨーロッパを離れ、彼らはアメリカへ帰還する。それにくつついてヴィクトリア達もアメリカへと渡る。

二人は既に予備電源モードに切り替え、省エネのために座席に座ってスリープモードに入っていた。何かあったら起こすように部隊員には言っておいたので、問題ないだろう。外から呼び掛けられれば起きるようにセットしてあった。

徐々に空中へと航空機は浮かんでいく。部隊員約二十名を乗せた航空機はアメリカへと向かって飛んでいった。

「ヴィク姉とアレクちゃんの反応が消えましたあー」

レンシアは“マザー”の前に立って報告を行う。相変わらず柔らかな笑みを崩さない“マザー”は次なる命令を演算し、はじき出す。

『わかりました。では……あなた達に出てもらいます』

「了解ですうー。目標は生かして捕らえますかあー？」

『可能ならば生きてまます捕らえてほしいですが……抵抗するときは破壊しなさい』

「わかりましたあー」

レンシアはくるりと背を向けて“マザー”のいる部屋から出る。

彼女は両目を瞑ると、同じCタイプアンドロイドに語りかける。

「複数CPU同時並列モード展開いー。クレヤボヤンス能力強化によりいー、ヴィク姉達の場所を発見するよあー」

テレパシー 離れた場所にいる仲間に語りかけるESP能力である。そして、ロベミライアの頭脳と呼ばれる所以である、同時並列演算モード。これは複数のアンドロイドの脳を接続し、高度な演算を行う能力だ。ざっと二十人ほどはいるCタイプ全員の脳を接続してクレヤボヤンス能力を使えば、彼女達に視えないものは ない。

「西経二十二度、北緯五十四度地点にて飛行中のヴィク姉達を発見」

「オートマータを派遣しますか？」

別のアンドロイドが語りかけてくる。だが、レンシアは首を横に振る。

「あたし達で直接殺るよぉー？ 抵抗する場合は破壊してよしいー。人間も全員殺してよしいー。目標の完全破壊が今回の目的いー」

「いいのですか？ レンシア様のご友人を……」

「友達でもまた作ればよしいー。Aタイプアンドロイドのデータは本部に残っているものぉー。複製は可能だよぉー」

「ただし、記憶の複製までは……」

「いいのいいのぉー。どうせ“ジャンク”にはもう用事ないしいー」  
レンシアは武器庫に向かってオリハルコンコートに着替える。

「本気でいくよぉー。各自戦闘配備いー」

続いて何人ものアンドロイド達が兵器庫に入ってくる。各自それぞれの装備を身に付けると、レンシアの前に並んだ。

「航空機にて敵機に接近ー。向こうからの攻撃も予測されるので、並列状態は解除しないよぉー。プレコグニションで完全予測してえー、全ての攻撃を回避いー。一定距離まで接近後、レポートで敵機内に飛んで、直接制圧うー。おっけえー？」

「了解です！」

一向は武器庫を出ると、格納庫へと向かう。一機の飛行機が準備されていた。

彼女らがそれに乗り込むと、低い音を立てて少しずつ浮かび上が

っていく。

「じゃあいつくよぉー！」

ヴィクトリアとアレクを乗せた航空機は順調にアメリカへと向かっていた。目的地はアメリカ東部、ニューヨークである。

ニューヨークは未だ戦地となっていない地域である。南アメリカの大部分は荒野と化した。まだ北アメリカでは一部の地域しか大規模な戦闘は行われていなかった。

もちろん、転移によるオートマトン兵派遣による戦闘によって、度々研究所を攻撃されたことはあった。そう　今のこの地球上に安全な場所などないのだ。

「超高速で接近する飛行物体がレーダーに映っています！　所属国籍不明、おそらくロベミライアです！」

スクランブルが鳴る。その音にヴィクトリアとアレクは叩き起こされた。

「転移じゃなくて航空機による接近……まさかアンドロイド!？」

「僕出ます！」

アレクはフランス力を手に取ると、ハッチに手をかける。

「待ちなさい！」

「大丈夫です、僕、覚悟をもう決めましたから」

そう言うと、彼は航空機から飛び出した。

「この航空機には戦闘装備は積んでないの!？」

「艦載機関砲が二門なら……」

「横から来るわよ！　各自戦闘準備をしなさい！」

既にヴィクトリアの短距離レーダーにもロベミライアの航空機は映っていた。このスピードだと、間違いなくニューヨーク到着前に戦闘が行われることは確実だ。

ヴィクトリアはハッチを開くと、そこからドラゴリアを構える。

ドラゴリアには二種類モードがある。彼女が好んで使っているレ

ールガンモードと、通常のライフルと同じように火薬によって弾丸を射出する通常射撃モードだ。

ドラゴリアを通常射撃モードに切り替えると、劣化ウラン弾を挿入し、構える。

彼女の目には既に敵機の姿は見えていた。だが、まだ射程距離外である。

彼女は焦らずに、照準を合わせる。ただ、まだ早い。そう言い聞かせながら唾を嚙下する。

一方、一人で飛び出したアレクは間もなく敵機に到着しようとしていた。ロケットエンジンとジェットエンジンをうまく操りながら接近する。

「やあああああつー！」

フランシスカを大きく振り上げると、右翼のエンジンへと思い切り突き立てようとした。が、その瞬間航空機が傾いてエンジンではなく翼にフランシスカが突き刺さる。

「げ、アレクちゃん飛んできたのぉー？」

ハッチが開かれ、レンシアが飛び出してきた。

サイコネシスで飛行しながらミッドナイトを指から放つ。

「ッー！」

アレクは航空機から一旦離れる。ミッドナイトの射程範囲内に入れば最後、引き斬られることは間違いない。

射程を考えれば、明らかにアレクの方が不利だった。

「二対一はズルいよぉー」

レンシアはミッドナイトを網状に編んだ。その瞬間、そこを狙って劣化ウラン弾が飛んでくる。ミッドナイトの壁に弾かれ、炎上した。

「姉さま！」

「今のうちに！」

ようやくヴィクトリアの劣化ウラン弾の射程範囲内に入ったのだろう。こうなれば、レンシア一人ではさすがに不利だ。攻めるなら

「今はチャンスだろう。」

「やああああああっ！」

今度こそエンジンへとフランシス力を叩き込む。右翼エンジンが大破し、航空機が傾く。

「皆、行つくよぉー！」

その瞬間、レンシアの姿が消えた。そして、航空機も徐々に離れていく。

「え……？」

「やられた！ テレポートでこっちに侵入された！」

ヴィクトリアはレヴァンティンを抜くと、ヒートソードモードに切り替える。機内で戦うのに、ショットガンは使い辛い。

「あっはははぁー！ ヴイク姉とは一度本気で戦ってみたかったんだぁー！」

ヴィクトリアは両手のレヴァンティンをミッドナイトに叩きつける。オリハルコンの糸で編まれた壁は簡単には突破できない。

「うわあっ！」

他の部隊員も突然のテレポート奇襲に驚きふためいていたが、なんとか武器を構えると、アンドロイド達と狭い機内で戦っていた。

だが、アンドロイド部隊は身体能力の差で人間よりも圧倒的に有利だった。

ただ、数だけは人間の方が上だ。アンドロイド二人と、人間およそ四十人。アンドロイドの二倍はある。

「二人一組で行動しなさい！」

いつの間にか、部隊の指導権はヴィクトリアに移動していた。部隊員はヴィクトリアの命令を聞いてそれぞれ攻撃する。

「姉さま、お待たせしました！」

「アレク！ 二人でレンシアを倒すわよ！」

「はい！」

ミッドナイトの最適射程は中距離だ。ある程度離れた距離からの攻撃が最も威力を発揮する。ならばその距離に入らずに畳みかけれ

ば良い。

ヴィクトリアは近距離戦に持ち込んで、レヴァンティンを続けざまに叩き込む。レンシアはガードに手いっぱい、攻撃する暇がなかった。

そしてアレクとの連携攻撃で少しずつ糸を薙ぎ払い、壁を打ち崩していく。

「さすが最強候補ってことだけはあるねえー。それにアレクちゃんとのコンビネーションー。あたしの予知でも凌ぎ切れなくなってきたよおー」

「二対一ってのはちよつと気が引けるけど、確実に勝つためよ！」  
アレクはロケットエンジンをブーストさせて糸の壁を薙いだ。鉄壁だと思えたミッドナイトのガードがついに崩れる。

「トドメよー！」  
ヴィクトリアはレヴァンティンをショットガンモードに切り替えて構えると、引き金を引いた。

この近距離ならば弾丸が散らばることもない。全弾命中させれば確実に仕留められる。

「あつっ！」  
爆炎に煽られてレンシアはハッチから外へと吹き飛んでいく。

「やった！」  
「この調子でいくわよー！」

他の兵が戦っているアンドロイドの元へと二人は分かれて攻撃しに行く。超能力を扱うアンドロイドが相手というだけあって、人間も苦戦しているようだった。

「クソ！ 攻撃が当たらねえー！」  
「皆伏せてー！」

予知能力を持っている敵が相手ならば、予知能力をもつてしても避けられない攻撃を繰り返せばいい。

レヴァンティンによる広範囲の焼却。これがCタイプアンドロイドに対する戦法としてはもっとも有効だった。

爆音と共にアンドロイド達が吹き飛ぶ。戦闘不能にするには頭だけ吹き飛ばせばいい。

何人かのアンドロイド達が刀剣を手に迫ってきたが、基本スペックはリーダー型であるヴィクトリアの方が上だ。予知能力がなくとも、その程度の攻撃であれば簡単に避けることができる。

そして、すれ違いざまにレヴァンティンを撃ち込む。これの繰り返しだけでアンドロイド部隊のほとんどを掃討することができた。

「ラスー！」

アレクが戦っているアンドロイドに横から撃ち込む。アレクには当てず、敵だけに当たるようになるんとか軌道を逸らして撃つ。

「ふう……。損害は？」

「死傷者十二名、負傷者二十七名です。エンジン小破、他にも一部破損しましたが、航空機の運航には問題はありません」

そう言っただけの一人がドリンクの入ったボトルを差し出してくる。  
「ありがとう」

「ヴィクトリア殿は我々の隊長よりもよっぽど現場慣れしていますな」

「で、その隊長さんは何してたわけ？」

「先ほどの戦闘で亡くなりました」

「そう……。それはお気の毒にね……。」「  
場がしんみりとした空気に包まれる。

それを晴らすように、ヴィクトリアは明るい口調で言った。

「全滅を免れたことを喜びましょう！」

「そうですね。私が副隊長なのですが、隊長はあなたが務めた方がよさそうだ。到着するまでの間、隊長を務めてもらっても構いませんか？」

「おっけー。といつても、残存戦力的にあと戦えて一回くらいでしょうね」

「チルドレンは少々手厳しいですが、オートマータならなんとかあります」



「生き残ったメンバーはとりあえず各自自分の怪我の治療を。私は寝るわ。またなんかあったら起こしてね」

そう言うと、ヴィクトリアは堅い椅子に座り、シートベルトを締めるとスリープモードに入った。

「それじゃあ皆さん、お願いします」

アレクも隣に並んで眠りに入る。二人は少しでもエネルギーを節約したかった。

「各自怪我の手当てと武器の再確認を！ 次の戦闘に備えて準備をしろ！」

「はい！」

「まさかここまでこてんぱんにやられるとは思ってなかったあー」  
海の上に浮かびながら、レンシアは一人愚痴る。

「オリハルコンコートがなかったら一撃だったなあー。やつぱりアンドロイド最強の名は伊達じゃないなあー。さっすがヴィク姉ー。まさか全滅させられるとは思ってなかったあー。かなわないにやあー」

サイコキネシスで海から浮かび上がると、ゆっくりしたスピードでロベミライアの本部へと向かう。

「一応救助信号出してくかなあー。あたし一人のために船を出してくれと助かるんだけどあー。ま、とりあえず自力で帰るかあー」

ふわふわと浮かびながら彼女は空を飛んでいった。

## 第八話 The Chaser (後書き)

どうもこんにちは、ほーらいです。

予約掲載機能を使ってみました。これ便利ですね。

これを使っておけば予定通りに投稿ができます。

さて、それは置いていて解説行きましようか。

各タイプアンドロイドには特殊能力があります。

Aタイプはロベミライアにおける眼の役割を果たし、強力な視覚能力及び、索敵能力、狙撃能力に優れます。

特殊能力として体内リーダーによる広範囲に及ぶリーダーを持つています。

Bタイプはロベミライアにおける左腕を司り、小手先の器用さなどが特性です。実はあんまり細かい設定を決めてなかったり(汗)

Cタイプは頭脳の役割を果たしており、強力なESP能力を得意とします。

今回のお話で出てきましたが、彼らの能力は多才能力マルチスキルです。

一人一人の能力は本当はこんな大きなものではありません。

そもそも超能力というものを人為的に発生させるのは非常に難しく、これはある種の突然変異によって生まれる力となっております。

ですが、常人を二十人集めれば、その脳を並列的に並べて一つの巨大な演算装置と見ることに、強力な計算を行うことが可能となります。

これによって、通常世界に影響を及ぼす超常的能力(すなわちESP)を引き起こす計算式を生み出し、その計算式に従って超常現象を発生させるのがESPとなっております。

個人がやる場合、この計算を人間一人の脳みそで行わないといけなわけですから、相当頭が良くないとムリです。

ちなみに部品第一部のレン君は例外です。彼の場合、別人格が超能力を使っており、その結果を彼自身に見せているため、彼自身は特別頭がいいわけではないです。でも別人格はヤバイ頭いいです。性格破綻者っぽいですけど。

他の超能力者は皆頭いいですよ。部品番外編の彼女やら、第二部のヒメちゃんなどは頭いいです。

もちろんアンドロイドも頭がいいので、個々人が超能力を一つくらいずつ持つてはいます。

・・・あれ、何かとある魔術のインテグラルさんっぽくなってきた。まあいいか（蹴

さて、忘れ去られそうなDタイプさんは右手を司っています。戦闘能力重視した彼らは強力な体力を持っており、白兵戦能力はトップクラスです。

さて、今日の解説はこんなもんですかね。それでは次回予告へいきましょか。

戦いを終えた二人はニューヨークへと到着する。

一方、レンシアも本部へと帰還していた。

大打撃を受けたアンドロイド部隊。しかし“マザー”は不敵に笑う。

『問題ありません。既に手は打ってあります』

完璧主義の機械は一体、何を思っているのだろうか。

次話、第九話 The Smiler

## 第九話 The Smiler

### 第九話

その後何事もなく航空機はニューヨークに到着する。

航空機を降りたところでヴィクトリア達を待っていたのは近藤ヒロキだった。

「いたいたつす。こっちつすよ！」

二人の姿を見つけると、ヒロキは大きく手を振る。

「戦闘があつたらしいつすね。大丈夫つすか？」

「なんとかね。私達は無事だけど、人間が大勢死んだわ」

「そうつすか……」

ヒロキは悲しそうな表情を浮かべる。

「と、ともかくなんとか無事に辿り着いてよかつたわ！ 時間が無いの。可能な限り早くオキシデリボの研究施設まで連れて行ってくれる？」

「時間がないってどういうことつすか？」

ヴィクトリアは予備電源のタイムリミットが二十四時間しかないことを話した。予備電源に切り替えてから、ここまで来るのに四時間は経過している。残る時間はわずか二十時間程度だ。

「なるほど……話はわかつたつす。オキシデリボ研究島『ヘヴン』まで行く時間はなさそうつすから、ニューヨーク市内の研究施設でGPSを取り除くつすよ」

三人は車に乗り込むと、ニューヨーク市内の研究施設へと移動する。途中でヒロキが電話で事情を伝えていたので、スムーズに物事が進んだ。

研究施設といっても、そこは病院のようなところだった。おそらく病院と研究の両方を兼ねているのだろう。

研究施設に到着すると、二人は急いで手術室へと向かう。

「お待ちしていました」

ヴィクトリアは研究員達にGPS装置が搭載されている部分について説明する。

「人間で言う心臓の部分辺りにこういう形状の物体があるはずなの。それが私達に搭載されたGPS装置よ。これがある限り、私達は世界中どこにいてもロベミライアへと位置情報が筒抜けになってしまうわ」

「それを取り除けばいいんですね？」

「ええ。そうすれば私達を直接狙った攻撃は止むハズ」

二人はいくつかの検査を受けた後、手術室へと運ばれていく。痛覚神経を停止させ、手術に備えた。

「本当に大丈夫でしょうか……？」

「信じるんですよ？ 人間のことを」

「でも、こうやって実際に任せるとなると不安になってきました」

「そういうときは寝るに限るわ。スリープモードに入りなさい」

「……わかりました」

二人は一時的に機能を停止させ、スリープモードに入る。手術の予定終了時刻の一時間に目覚めるようにセットした。

「これより手術を開始する」

研究員の男のその声を最後に、二人の意識は徐々にまどろみへと落ちていった。

「おかーさん」、助かりましたあー」

『私の大事な愛娘ですもの。迎え入れるのに手は惜しみませんよ』

レンシアは“マザー”の前に立って状況を伝えていた。圧倒的戦闘力を誇る二人によって部隊が壊滅させられたこと。そして二人がニューヨークへと向かったということ……。

「いいんですかあー？ GPS装置をもう抜き取られてるかもしれないですよあー？」

『息子、娘の二人が人間の手に落ちたのは痛手です。アンドロイド部隊もほとんど壊滅させられました。これは口ベミライア有史以来、未曾有の窮地です』

「じゃあどうするんですかぁー？」

相変わらずモニターに映る女性は柔和な笑みを崩さずに言った。

『問題ありません。既に手は打ってあります』

「さすが“おかしさん”、対策済みとはさすがですうー」

『あなたにはニュータイプCタイプアンドロイドを率いてもらいます。それと同時にバージョンのアップグレードを行ってもらいます』

「んにゃ！ まさかあの強力すぎて封印されたあのプログラムですかぁー！？」

女性の顔はにこにこしたまま頷いた。

『バージョンアップには時間がかかります。あなたは自室にてアップグレードを行ってください』

「了解ー！」

レンシアは部屋を出ていく。

彼女が出ていった後、今まで一度として柔和な笑みを崩さなかった“マザー”は初めて表情を曇らせた。

とある病室のベッドに彼女達は眠っていた。

無事手術は成功したのか、ヴィクトリアはスリープモードから目覚めると、体内の様子をサーチした。

外部へ電波を送っている装置は全て撤去されたようで、予備電源から本体電源へと切り替えた。

「アレク、もう大丈夫よ」

やがてアレクも目を覚ました。そしてアレクも電源を本体電源へと切り替える。

「なんだかすつごく久しぶりな感じがします」

「そうね。二十四時間も経過してはいないはずなのにね」

GPS装置が取り除かれたことで、少し動作が軽くなったように感じた。GPS装置がどうやらメモリの多くの部分を食っていたようで、それがなくなったことによって全体的な動作がいくらか軽快になる。

「気分はどうですか？」

桃色のブロンドの少女が二人の部屋に入ってくる。

「快適快適。GPSが結構メモリ食ってたみたいで軽くなったわ」

「それはよかったです」

少女はにっこりと笑うと、懐から一枚の名刺を取り出した。

「私はオキシデリボ会長の桜木ユイです」

「ああ、あのとき話した子ね」

ヴィクトリアはユイから名刺を受け取ると、それをしげしげと眺める。

「手術の方、見させてもらいました。私達には未知の技術が満載で、非常に興味深かったです」

「そりゃどうも。で、あなたが私を解剖するの？」

ヴィクトリアがそう尋ねると、彼女は慌てたような表情を浮かべる。

「解剖だなんてとんでもないです！ 確かにもっと色々調べたいですが、今は悠長にそんなことをしている暇はありません」

「というと、例の作戦を実行することにしたの？」

「例の作戦……？」

「国連軍のオートマトン複製転移作戦。あれをあなた達人間が考えていることを知って、私達は拠点防衛に人員を割いているのよ」

「ああ、あれですか。あれは困です」

ユイは近くにあったパイプ椅子をベッド脇に持ってくる、腰を下した。

「確かに現在オートマトンの複製作業が行われていますが、それを主戦力とするには少し心許ないです」

「じゃあ何か他に作戦があるの？」

ユイはしばらくの間、何かを考えていたが、やがて話すことに決めたのか、両手を組んで話し始める。

「複製オートマト兵を転移で送り込んで、その隙に南アメリカから人間兵の部隊を出撃させます。さらに同時にインターネットを介してロベミライアへコンピュータウイルスをばらまき、“マザー”を物理的、そしてシステムのにも破壊します」

「アンドロイド　チルドレンはどうするつもり？　ABC三タイプの部隊は全滅したけど、戦闘能力の最も高いDタイプがまだ残っているわ。Cタイプは二人がかりで戦えばなんとかなったけど、Dタイプはそんな生優しいものじゃないわよ？」

「こちらにも、チルドレンに匹敵する部隊があります」  
「密属部隊のことかしら？」

「そうです。彼らは元日本軍主力部隊のメンバーです。彼らならきつと……」

「甘いわね」

ヴィクトリアはサイドテーブルを思い切り叩く。

「Dタイプアンドロイドに勝てる、ということは私にも勝てる、ということよ？　密属部隊のコンビネーションは確かに素晴らしいわ。私も一緒に戦って彼らなら苦戦しそうだと思うたもの。でもそれは一対多の場合。彼ら一部隊だけではせいぜいDタイプ数人と対等に渡り合うのが関の山ね。あの部隊を五隊用意できる、っていうなら話は別だけどね」

「それなら実際に試してみましよう！」

ユイはがたんと音を立てて椅子から立ち上がった。

「あなたとウチの部隊の一人一人を戦わせてみます。それで彼らの実力を測ってください」

「本気……？　死ぬわよ？」

「大丈夫です。模擬戦闘用プログラムがありますから」

彼女の話によると、模擬戦闘用に作られた仮想空間上で模擬戦闘を行うことができる装置があるという。体の色々な部分にセンサー



を取り付け、体の動きをプロگرامに反映させて仮想空間上で戦闘を行うことができるというものだ。

「これなら死にませんし、お互い思いっきり戦うことができます」

「それなら大丈夫ね。彼らは今任務に？」

「いえ、今はニューヨークで待機しています」

「じゃあ今からやりましょう」

ヴィクトリアはベッドから降りる。手術直後だったが、問題なく体は動きそうだった。

「姉さま、大丈夫ですか？ 僕なんか体がまだちょっと重くて……」

アレクは心配そうにヴィクトリアを見上げる。

「これくらいの手デがないと私が勝っちゃうでしょ？」

「随分余裕ですね……」

ユイはやや口調に苛立ちを含ませて言った。

「装備のスペックもプロگرامに反映させるんでしょうね？」

「もちろんです。お二人の武器や防具、身体能力パターンはプロگرامに入力済みです」

「じゃあやりましょう。部隊メンバーを呼んできてもらえますか？」

傍にかけてあったオリハルコンコートを羽織ると、ヴィクトリアは病室を出ていく。その後を慌てたようにアレクとユイがついていく。

「さあ、場所はどこ？」

「ま、待ってくださいーい！」

なんとかヴィクトリアに追いつくと、ユイはその肩に手をかけた。「色々セットアップとかに時間がかかるんで、もう少し待ってもらえますか？」

「……わかったわ。」

二人はまた病室に戻ると、模擬戦闘装置の準備が終わるまで待つこととなった。

「暇だわあー」

「……姉さま、本当に勝てるんですか？」

「当たり前よ。私を誰だと思ってるの？ ロベミライアの誇る最強戦力の一人、ヴィクトリアの名は伊達じゃないわ」

「そうじゃないです。僕達、ロベミライアに歯向かうことになりましたけど、僕達を創ったロベミライアに勝てるんでしょうか……？」

アレクは深刻な表情を浮かべている。ヴィクトリアは自分のベッドから立ち上がり、アレクの隣に座って肩を抱いた。

「そんなに深刻な顔しないの。私だってまともにやりあって勝てると思っないわ」

「じゃあ、どうして……！」

ヴィクトリアはにつこりと微笑む。

「人間が創った“お母さま”が人間を滅ぼそうとしているじゃないなら、“お母さま”が創った私達が“お母さま”を滅ぼすことだってできるはずよ」

「こんな勝率の低い賭けみたいな戦いで……？」

「そうね。確かに勝率の低い勝負かもしれないわ」

ヴィクトリアは窓からさんと降り注ぐ太陽の光を見上げる。

「でも、分の悪い賭けは嫌いじゃないの。勝率が低い方が勝ったときの配当は大きくなるでしょ？」

「姉さまは……人間のことを信じているんですか？ 人間が勝った

……人間が支配する世界を……？」

ヴィクトリアはしばしの空白の後、希望に満ちた声で答えた。

「支配するんじゃないの。共存するのよ。機械も人間も皆が仲良く暮らせる世界。そんな世界を私は求めているのよ」

「僕は……人間が悪い存在だとは思っていません。でも、良い存在だとも思っけません。本当に僕達は共存できるんでしょうか……？」

「その世界を創るのが私達の使命よ」

ヴィクトリアは気付いていた。

人間は不完全な存在だ。それと同時に機械も不完全な存在だ。

人間はルーズな存在だ。自堕落で、甘い。けれども、それ故に機転の効く存在でもある。

機械は完璧主義だ。何事も寸分の狂いがなく物事が進まなければ気が済まない。それ故にミスが起こると対処できなくなってしまう。お互いの利点を生かし、共に暮らしていくことができればどんなに幸せなことだろうか。

だが、“マザー”は共存の道を取らなかつた。

それがヴィクトリアには悲しくてしようがなかつた。

「さ、模擬戦のイメージトレーニングでもしようかしら」

ヴィクトリアは体の節々を伸ばすと、軽くストレッチ運動をする。

GPSに食われていたメモリが空いて軽くなつたが、手術の影響か、未だ若干体が重い。一刻も早く元の状態に戻すことが先決だつた。

「セットアップの方、できました。ヴィクトリアさん、アレクさん、準備はよろしいですか？」

ユイが部屋にやってくる。ヴィクトリアは最後に大きく体を伸ばすと、ベッドから立ち上がった。

「準備万端よ！ いっちょ騒ぎましょう！」

二人はそれぞれの荷物を持って部屋を出ていく。

彼女らはやがて目にすることになる。予想以上の密属部隊の戦闘能力を……。

## 第九話 The Smiler (後書き)

さてさて、今回も予約で入れちゃいましたよ、ほーらいです。そして桃髪ロリっ子ユイさん登場ですヒヤッホイ(壊)てか、第一部のキャラクターで今回登場する彼女だけです、ハイ。やったねユイさん皆勤賞！

まあ、それはさておき解説いきましょうか。

GPS装置。今じゃ携帯にも搭載されているアレですね。カーナビに携帯電話、それから軍でも使われてる便利な装置ですね。で、アンドロイドにも皆搭載されているわけです。つまりはアレだ、迷子サーチ。

親御さんが自分の子供がどこにいるのかを知りたいときに使う携帯電話のサービスと同じヤツです。その世界規模版。さすがロベミライア、息子娘が心配だからってやることなすこと大規模すぎてびっくりです。

転移装置を使って迷子の子供をお迎えにいったり、とっても心配性なんですな。

そんな“お母様”の甲斐甲斐しい一面を伺える一話でしたとさ。さて、次回予告！

模擬戦闘訓練を行うことになったヴェクトリアとアレク。

人間達を舐めていた彼女らだったが、予想以上の実力に驚く。

『まさか……オリハルコン！？』

『私のコートもオリハルコン製なんです』

激しい剣戟はまだまだ続く。



## 第十話 The Imitationer

### 第十話

「こちらです」

二人がやってきたのは巨大なドームがいくつも並んだ部屋だった。そこには以前戦いを共にしたオキシデリボ密属部隊の面子が揃っていた。

「じゃあ、まずはアレク、行ってきなさい」

「ええ！？ 僕ですか！？」

「そ、まずは様子見かな？」

ヴィクトリアはぽんとアレクの背中を叩く。

「じゃあ私が最初はやるー！」

と、勇んで出てきたのは篠川リンだった。

「二人ともドーム内に入ってください」

アレクは不安そうな表情を浮かべながら、リンは嬉々とした様子でドームへと入っていく。

「さ、どんなもんか見せてもらいましょ」

二人の準備が整ったのか、モニターいっぱいには仮想空間のフィールドが表示される。今回の戦闘の舞台は廃屋だった。

「じゃあ……行きます！」

アレクはフランシスカにまたがって空へと舞い上がる。一方、それを見上げながらリンはナイフを両手に構える。

『結構速いわね』

ロケットエンジンを積んでいるのだ。スピードがあるのは当然だ。音速まではいかなくとも、時速数百キロは出ている。翼もなしにこの安定した飛行なのだから、さすがロベミライアの左手というだけのことはある。

『いつまでも空を飛んでいるだけじゃあ勝負がつかないわよ？』

リンはナイフを指先で弄りながらアレクが降りてくるのを待つ。  
やがてアレクも頃合を見計らったのか、急降下して鎌を振り上げる。

『やあああああつ！』

ロケットエンジンの推進力と重力の乗った攻撃は凄まじい速度を誇る。だが、素早さにおいて人間最速クラスのリンのスピードも伊達ではない。

『よつと！』

紙一重で鎌を避けると、反撃のナイフを投擲する。

だが、一瞬アレクの方がスピードが早かった。深々と地面に突き刺さった鎌を素早く引き抜くと、鎌を振るってナイフを弾く。

『ちっ！』

リンは舌打ちすると、ナイフを両手に接近する。長物相手では接近戦は不利だが、相手の間合いの内側に入ってしまったえばリンに分がある。

だが、戦い慣れしていないとはいえ、アレクもそう簡単には間合いの内側にリンを踏み込ませない。

そうして小競り合いがしばらく続く。リンが近付こうとしてはアレクの超高速の鎌が振るわれ、それをリンがあと一歩のところまで身を翻す。その繰り返しだった。

「人間なんかには負けるんじゃないわよ！」

ヴィクトリアはアレクを応援する。持久戦が続けば有利なのは素の身体能力が高いアレクの方だった。

『いつちよ試してみようかしら！』

リンは両手に数本のナイフを持つと、同時に投擲する。それは直線的な軌道を描きながらまっすぐアレクへと飛来する。

『させません！』

それを鎌の一薙ぎで全て弾き落とす。だが、それこそリンの狙いだった。

鎌を一度振ってしまえばもう一度構えるまで時間がかかる。その

わずかな隙を狙ってリンは一步踏み出した。

振動するナイフがアレクへと襲いかかる。だが、アレクもロケットエンジンをブーストさせてリンの体を吹き飛ばし、自身を大きく後退する。

『少しかすりしました……』

アレクの頬から一筋の血液がほとばしる。モロに食らえばアンドロイドといえど大怪我は免れない。

狙うとすれば、オリハルコンコートで固められている体よりも、露出している顔だ。そこをわかつての攻撃だったのだろう。だがそれも致命傷には至らず、ほんのわずかなダメージを負わせただけだった。

『まだまだ!』

同時に数本のナイフが投擲される。今度はロケットブースターでナイフを吹き飛ばした。これならば鎌を構える必要もなく、それと同時に相手から距離を取ることができる。

『それはちよつとズルいんじゃないかしら?』

今度は素早く回って背後からのナイフ攻撃。身の軽さを最大限生かしての攻撃だった。

アレクは素早く振り返ると、鎌でナイフをガードする。それも彼女は予見していたのか、素早く接近してナイフで切り込む。

『はっ!』

だが、今度こそ勝機と捉えたのか、アレクはリンの胸を薙ぎ払うように鎌を振る。

リンのナイフがアレクの首に届くと同時に、アレクの鎌がリンの胴体を薙ぐ。

『はい、終了です!』

お互い同時に致命傷を負ったのだ。仮想空間のフィールドが消失し、二人の意識は現実世界へと戻ってくる。

二人はドームから出ると、相手の健闘を称えてハイタッチする。

『なかなかやるわね!』



「リンさんも凄いですね。いい動きでした!」

「ヴィクトリアはアレクの元へと向かうと、頭をぐりぐりと拳をぶつける。」

「もう、相打ちなんてBタイプアンドロイドリーダーの名も随分廃れたわね。もつと頑張りなさいよ!」

「あいたたた! 姉さま痛い痛い!」

「そんなアレクの様子を笑いながら見守るリン達。」

「今度は私、ヴィクトリアがお相手するわ。次の対戦相手は?」  
「ヴィクトリアは手を上げて名乗り出る。」

「今度はヒロキが前に出る。」

「おいらが相手するっす!」

「あら、あなたじゃ役不足じゃない?」

「な、こっちは部隊最強のスナイパーっす! 負けないっすよ?」

「スナイパーは相方とセットになって初めて真価を発揮するものよ?」

「う……確かにそうっすけど……」

「じゃ、ともかくよろしくね」

「そう言い残すと、ヴィクトリアはドーム内へと入っていく。負けじとヒロキもドーム内へと向かっていく。」

「さ、最強のスナイパーのお手並み拝見といきましょう」

「ヴィクトリアの体の至る所にセンサーが取り付けられる。そして、目の位置にモニターが降りてくる。」

「いくわよ!」

「今度の戦場は見渡す限りの荒野だった。」

「先ほどの戦場と違ってわずかな遮蔽物しかない、どこまでも広がった荒野だった。」

「え、ちよ、これじゃあスナイパーに有利にしてるようなものじゃない!」

「もう戦いは始まってっすよ!」

「ヴィクトリアは慌てて頭をコートで覆う。その瞬間、軽くない衝

撃が彼女の頭部を襲った。

「ちっ！」

ヴィクトリアはともかく近くの大岩に身を隠す。

先ほどの一撃で意識が飛びかけたが、なんとか意識を繋ぎとめる。

「なら、こっちもスナイパー勝負ってわけね」

ヴィクトリアは体内のレーダーを起動させる。それは仮想空間でも有効なようだった。

生命感知でヒロキの位置を確認すると、ヴィクトリアはドラゴリアを手に持った。

「私だつてスナイパーよ。そう簡単には負けられないんだから！」

ヴィクトリアはドラゴリアに電力を供給する。

『射撃誘導システム起動』

勝負は一瞬だ。これを外せば彼女の負けは確定する。

『データ収集……充電開始』

レーダーから相手の位置を確認する。見えなくても相手を狙える分、こちらの方が有利だった。

『手ブレ修正、ターゲットの移動先を想定』

相手は一カ所から身を隠しながら、こちらの動きを窺っているハズだ。

『射撃準備完了、命中率99.8パーセント』

ならば、その遮蔽物ごと撃ち抜けばいい。

ヴィクトリアは大岩越しにドラゴリアを構えると、レーダーを頼りに照準を合わせ、引き金を引いた。

決して軽くはない衝撃が手の中で爆ぜる。そして、大岩を貫き、ヒロキが身を隠す岩をも貫いてヒロキへと弾丸が届く。

「そこまで！」

二人は仮想空間から解放される。

「あれはズルいっすよ……」

「ふふふ、もう少し銃の性能を上げてらっしゃい」

二人は一度握手をして離れる。

「今度は誰？ もう一度相手するわよ？」

「じゃあ次は私が出ます」

そう言っ出てきたのはユリだった。

「ああ、あなたね」

この部隊の中でおそらく一番戦闘能力が高いのが彼女だと、ヴィクトリアは直感的に悟っていた。先日 of 戦闘において、見事なまでの剣さばきを見た限り、彼女が一番強い。

「あなたとは一度戦いたいと思ってたの」

「なんすか！？ その対応の差は！」

ヒロキが愕然とした様子で文句を言う。

「だって、あなたは弱そうだし」

「酷いっす……」

二人はドームの中に入る。

今度の戦場は密林だった。密林ならばあの鞭のように伸びる剣も扱いにくいハズだ。

ヴィクトリアはまずは相手の位置を確認するためにリーダーを起動しようとしたところでレヴァンティンを抜いた。

その瞬間、レヴァンティンを握った右腕に痺れるような感覚が残る。

『初撃を防ぐとはなかなかですね』

『たまにはカンも役に立つわね』

直感的に抜かなければ殺られる、と悟っての行動だった。

剣の軌道上にあつた木々が次々と倒れていく。それほどまでにあの剣の切れ味は鋭いのだろう。

こうなつては身を隠すなんてことは意味がない。すぐさま近付いて攻撃を当てに行かなければすぐに殺られる。

だが、近付こうにも次々に伸びる刃が襲ってくる。それを両手にレヴァンティンを持って防ぐので精いっぱいだった。

密林が次々と開拓されていく。しばらく攻防を繰り返したときには、密林だったフィールドは視界良好の切り株畑になっていた。

「まだやりますか？」

「ええ、もちろんよ」

再び刃が襲い来る。だが、正確すぎる攻撃は逆に避けるのも簡単だった。

ヴィクトリアは攻撃を回避すると、一気に距離を詰める。

「後ろも注意しないとダメですよ？」

「え……！？」

戻り来る刃が再び襲ってくる。ヴィクトリアは高く飛んだ。その位置を一瞬後に刃が通り過ぎる。

「空中にいれば避けられませんかよね？」

ヴィクトリアは慌ててレヴァンティンを交差させる。そこを狙ったかのように伸びる剣が襲い来る。

なんとかそれを防いだが着地もままならず、ヴィクトリアはごろごろと地面を転がる。

その隙を狙って再び剣が飛んでくる。ヴィクトリアは半身を起しながらレヴァンティンで攻撃を弾いた。

そして、ようやく左手のレヴァンティンの引き金を引く。重い衝撃と同時に広範囲を焼き払う弾丸が放たれた。

だが、それを受けてもわずかに彼女は怯むだけだった。

「まさか……オリハルコン！？」

「私のコートもオリハルコン製なんです」

頭を狙わなかったことを後悔しながらも身を起こすと、再び襲い来る刃の猛攻を両手のレヴァンティンでなんとか捌く。

オリハルコンコート相手ならば、レールガンで無理やり撃ち抜くか、頭を狙うしかない。だが、この刃の猛攻の前では頭を狙う隙も、レールガンに電力を供給する時間もなかった。

「あなた達を少し舐めていたようね。少しは本気を出せそうじゃない！」

ヴィクトリアは立ち上がると、全身の筋肉に電流を流す。

ヴィクトリアの特殊能力は目だけではない。レールガンに電力を

供給するために、彼女は内蔵水素電池に蓄えられた電気を自在に操ることができる。

それは自分の体に電気を流すことによって、筋肉を刺激し、全身を一時的に強化することが彼女には可能だ。

これによってDタイプ以上の身体能力を発揮する。だが、このモードのときはレールガンを扱うことはできない。

紙一重で伸びるブレードを回避すると、戻ってくる前に接近する。狙うは頭部のみだ。

レヴァンティンをヒートソードモードに切り替え、ユリの頭部の辺りを薙ぎ払う。

戻ってきた刃によって足が飛んだが、ヒートソードが肉を焦がす音が聞こえる。とりあえずは勝った。

「そこまでです！」

二人の意識は仮想空間から現実世界へと引き戻される。

ドームから出てきたユリとヴィクトリアは拳をぶつけ合う。

「いい戦いできました」

「こちらこそ。予想以上に強くて手間取っちゃったわ」

「そんな、私なんてまだまだですよ！」

ユリは謙遜して首を振る。だが、ヴィクトリアはぽんと肩を叩いて

「あなたは強いわ。自信を持ちなさい」

「……はい！」

連続の戦闘で疲労が溜まったのか、ヴィクトリアは体が重くなるのを感じた。

「そろそろ休憩にしましょう。仮想空間での戦闘でも結構疲労するんです。ヴィクトリアさんは連続で戦ってますし……」

「そうしてもらえると助かるわ。なんか飲み物もらえる？」

「あ、はい、ちょっと待っててくださいね」

ユイはぱたぱたと足音を響かせながら部屋を出ていった。

「皆さん強いですね……。僕じゃユリさんなんて絶対勝てませんよ」

「ユリは元々日本軍の主力兵器だったからな」

サトルが苦々しい表情を浮かべて答える。

「兵器つて……人間が？」

「そうだ。まあ、色々と紆余曲折があつて今はオキシデリボの主力部隊の一員として戦っている」

「ふーん……さすが主力というだけはあるわね。私も負けそうだったもの」

ヴィクトリアは椅子にぱたんと座り込むと、手をぱたぱたとやつて風を送る。電流によって全身を強化した後は反動が強い。確かに強力ではあるが、そう何度も使えるものではなかった。

「あいたたた……コレはホント疲れるわね……」  
肩をコキコキと鳴らす。そして大きく伸びをして椅子に体を預けた。

「はい、どうぞ。皆さんの分もあります」

ユイが大きな箱を持つて戻ってきた。中にはたくさんの水やジュースの入ったボトルが入っていた。

「私リンゴジュースもらい」

ヴィクトリアはリンゴジュースを手にとると、くいつと傾ける。

「次の模擬戦闘はいつにしますか？」

「そうね。じゃあ一時間後でどうかしら？」

「わかりました」

そうしてヴィクトリアとアレクの二人は部隊の面々と話をしながら時間を過ごしていった。

## 第十話 The Imitation (後書き)

素敵な予約掲載様のおかげでだいぶ安定して小説を供給できました、ほーらいです。

今回はロベミライアアンドロイダーズVSオキシデリボシークレツターズの試合です(何

なんかこう書くと野球かなんかの試合っぽいな。アンドロイダーズ二人しかないけど。

アレか、キャッチャーとピッチャーしかいなくてバッターの球は全部ピッチャーが走って取りに行くんですねわかります。

じゃあ攻撃のときどうするのかって？ 全部ホームランに決まってるじゃない。

きつと普通の人がピッチャーフライするところをアンドロイダーズは力が強すぎてホームランになるんだらうね。

まあそんなことは置いといて解説！

仮想空間模擬戦闘システム自体は第二部にも出てきたね、ゲーセンに置いてあるやつ。

まあ、アレはゲーセンで民間人が民間人向けに作ったものだからそこまでリアリティがないのだけれども、今回は企業がリアリティさを重点的に作った本格仕様なので、皆さん大満足です。

ちなみにダメージは本人にフィードバックします。いやマジで。

だから、殴られりや痛いし切られりや痛い。まあ、リアリティ重視なので。

民間向けとは違うのだよ、って感じですよ。

あ、もちろん本当に傷ができるわけじゃないです。擬似的に痛覚を与えるだけなので、実際にはケガしませんので安心仕様となっております、たぶん。

そんなわけで次回予告へGO！

模擬練習を繰り返し、最後に一同は最後の決戦を行う。

それは両者全員で行う団体戦。

アンドロイド最強と、人間最強の7人が戦ったとき、どのような結末となるのか。

『いい、アレク。相手は絶妙なコンビネーションを用いて攻撃してくるわ。こっちもコンビネーションを組まないと間違ひなく負けるわ。準備はOK？』

『はい、わかりました！ いつでもいけます！』

模擬訓練と言えど、誰一人として手を抜く者はいない。

次話、第十一話 The Mock er



## 第十一話 The Mockers

### 第十一話

ヴィクトリアとアレクは模擬戦を幾度か繰り返した後、部隊の面々の弱点や直した方が良い癖などを指摘する。

確かに彼らは強いが、それぞれに弱点がある。だからこそ、その弱い点を補い合うコンビネーションが有効になってくるわけだが。

最後に部隊メンバー全員と、ヴィクトリアとアレクのチームが戦うことになった。これで最終確認を行い、これでヴィクトリアとアレクのチームを打ち負かすことができれば部隊の戦力は十分ということになる。

七人はドームの中に入り、センサーを体に取り付ける。

そして、意識は仮想空間へと飛んでいく。

今回の戦場はロベミライア本部を意識した戦場だった。ヴィクトリアの記憶から細かくフィールドの各所を再現したもので、模擬戦闘としてはこの上ないフィールドだった。

ヴィクトリアとアレクからすれば慣れた場所だ。フィールドの各地を熟知した彼女らならば、地の利を最大限生かして戦闘できる。

『いい、アレク。相手は絶妙なコンビネーションを用いて攻撃してくるわ。こっちもコンビネーションを組まないと間違いなく負けるわ。準備はOK?』

『はい、わかりました! いつでもいけます!』

二人は合流すると、通路の一角に陣を取る。そこは狭くて長い通路で、“マザー”への道がある場所だった。

『私は後方支援、あなたは前線にて戦闘。OK?』

『はい!』

レールガンはアレクを巻き込む恐れがあるので使えない。秒速二十キロの弾丸が近くを飛んでいけば直接当たらずとも同時に発生

する真空波に巻き込まれてしまう。

弾丸を通常弾モードに切り替え、劣化ウラン弾を銃身に挿入する。ここならば、通路の角まで弾が届く。

『来ました！』

サトル、リン、ユリの三人はほぼ同時に通路の角から飛び出してくる。

まず狙うはヒロキだろう。彼の支援射撃はかなり邪魔だ。

通路の角からライフルが覗いているのがヴィクトリアの目には見えた。

『シュートツ！』

彼本人を倒さなくても良い。ライフルさえ破壊すれば彼の戦闘能力を奪うことができる。

『ヒロキ、ライフルを引っ込めて』

その瞬間、ヒメの予知によってライフルの位置がずれる。劣化ウラン弾はわずかに外れ、壁にぶつかって炎上した。

『ちツ！ 予知を先に潰すべきかしら！』

しかし、ヒメの姿は見えない。おそらく通路の角から予知能力で指示を送っているのだろう。

一方、アレクは一人でサトル、リン、ユリの三人を相手していた。狭い通路内ではユリの戦帝も存分に扱うことはできなかった。それが幸いして、アレクはなんとか接近戦へと持ち込み、フランシス力を振り回す。

『アレク！ まずはリンを潰しましょう！ 彼女が一番弱いわ』

『了解！』

二人はリンへと照準を合わせると、一斉攻撃を開始する。

リンは少し後方に下がると、ナイフを投擲してくる。アレクはそれを避けながらリンへと距離を詰める。

だが、それを容易く許すサトル達ではない。ヒロキの絶妙な支援射撃や、ヒメの予知、そしてサトルとユリのサポート攻撃でアレクはリンへ接近できずにいた。

『ターゲット変更！ 彼らを突破して、まずはヒロキとヒメを潰しましょう！』

『了解！』

アレクはフランシスカにまたがると、ロケットエンジンとジェットエンジンをブーストさせる。時速数百キロの勢いで突っ込んでくれば、サトル達も避けざるをえない。

『やあああああッ！』

アレクはヒロキに向かってフランシスカを振る。一撃目はヒメの予知によって避けられたが、すぐにエンジンをブーストさせて鎌の軌道を変え、二撃目にてヒロキを倒す。

『次はヒメよ！』

『ヒメさんがどこにもいません！』

アレクの突破を許してしまった三人は通路を逆戻りして、アレクへ攻撃を始める。それに対応するために、アレクはヒメを探すどころではなかった。

『仕方ないわね……アレク、私が合図したら一度横の通路に入りこみなさい』

『どうするつもりですか？』

『レールガンを使うわ』

ヴィクトリアはドラゴリアのモードをレールガンモードに切り替えると、電流を流していく。

『射撃誘導システム起動』

リーダーを起動し、三人の動きをサーチする。

『データ収集……充電開始』

三人の動きを予測し、最適のタイミングでアレクが通路横に飛び込めるよう調整する。

『手ブレ修正、ターゲットの移動先を想定』

三人を倒せばヴィクトリア達の勝利は確定する。

『射撃準備完了、命中率99.8パーセント』

あとは引き金を引くタイミングだ。アレクが通路横に近付き、な

おかつ三人が避けられないタイミングを狙う。

『今よ!』

『大きいのが来る。通路横に退避して』

アレクが通路横に飛び込む。それと同時に三人も通路横へと向かう。だが、それをヴィクトリアは許しはしない。

『シュートツ!』

引き金を絞る。重い衝撃と共にヴィクトリアの手の中の銃が爆ぜた。

壁や床に軌跡を残しながらオリハルコンの弾丸が飛んでいく。これなら確実に避けることはできないはずだった。

だが、撃つのが一瞬遅かったのだろうか。リンを衝撃波に巻き込んで倒すことには成功したようだが、サトルは攻撃範囲外に逃れ、ユリはオリハルコンコートで衝撃を無効化したようだった。

『ちツ! 私もそっちへ行くわ! それまで持ちこたえて!』

『わかりました!』

ヴィクトリアはドラゴリアを背負うと、レヴァンティンを抜き、足の筋肉へ電流を流す。レールガンを受けてボロボロになった通路を走りながら、レヴァンティンの刀身を加熱する。

『挟みうちにされる……!』

通路を曲がると、ちょうどアレクが通路の向こう側で戦っていたところだった。そして、ちょうどいいことに二人はヴィクトリアに背を向けて戦っていた。

『悪いわね!』

ヴィクトリアは全身へ電流を流すと、サトルの方へ飛んだ。サトルは振り返ってヴィクトリアを撃つが、それを素早く回避すると、ヴィクトリアはレヴァンティンを叩き込む。

『くっ!』

サトルは小さな声を上げて巨獣と清羽を交差させて受け止める。力はちょうど拮抗しているようで、押しつ押しされつの攻防を繰り返す。

『今のモードの私の攻撃を受け止められるなんて凄いわ』

『それでも結構鍛えているのでな』

ヴィクトリアは一度距離を取ると、地面を蹴ってアレクと戦っているユリの方へ攻撃を仕掛ける。

『獲った！』

『十八時三十二分二十二度から斬撃』

ユリはわずかに体の軸をずらす。頭に叩き込まれるハズだった攻撃は右肩へと降り落ちる。

『っ！』

オリハルコンコートを着ているとはいえ、レヴァンティンの刀身は数千度だ。コート越しに熱が彼女の肩へ攻撃を届けるだろう。

ユリはヴィクトリアから離れると、戦帝を振り抜く。

それは壁にぶつかり、バウンドを繰り返しながら空間を制圧していく。

『なっ！？』

共に戦うサトルへ攻撃を当てないよう、かつ最大限の威力を発揮するように微調整された攻撃。それは前後にいるアレクとヴィクトリアを同時に襲う。

『トドメだ』

通路いっばいに刃が広がり、身動きの取れなくなつたところでサトルの巨獣が火を吹く。アレクは頭に受けて戦闘から脱落した。

『負けるないわよ！』

ヴィクトリアはなんとか刃の網から逃れると、両手のレヴァンティンの引き金を引く。オリハルコンコートを着たユリには攻撃が届かないだろうが、サトルだけでも倒すことができれば十分だった。

だが、刃の網がそれを阻む。ユリは伸び切った戦帝を操作しながら、ヒメの予知を聞いてヴィクトリアの攻撃を防ぐ。

そして、その隙間から清羽と巨獣の弾丸が飛んでくる。既に何十発もヴィクトリアは被弾しているが、オリハルコンコートが全ての攻撃を無効化してくれていた。

「キリがないな」

「私もそろそろ限界です……」

右肩をやられて左腕だけで戦帝を操るユリの動きにキレがなくなってくる。それを勝機と思ってヴィクトリアはレヴァンティンを何発も叩き込んだ。

「サトルさん、後は任せます……！」

ユリはブレードの網を解除すると、戦帝を狭い通路内いっぱいバウンドさせてヴィクトリアへ最後の特攻をかける。

ヴィクトリアはそれを冷静に見切り、攻撃を回避する。そしてレヴァンティンをその隙間を縫って仕掛ける。

今度こそユリを仕留めることに成功する。だが、それによって出来た隙は大きすぎるものだった。

「終わりだ」

巨獣が爆ぜる。それはヴィクトリアの側頭部に噛みついた。

「そこまでです！」

七人の意識は現実世界へと戻ってくる。

ヴィクトリアはドームを出ると、大きく息をついた。

「ふう……五人ともいい動きだったわ」

ヴィクトリアは先ほどの飲みかけのリンゴジュースを口に含ませる。

「これだけ動ければDタイプ相手でも健闘するわね」

「ホントっすか!？」

ヒロキが嬉しそうな声を上げる。

「お前は一番最初にほとんど動かずに脱落してるだろう」

「はっ! そういえばそうだったっす……」

「あなたはいいわ。前線には出てもらわないつもりだから」

「早くも戦力外告知っすか!？」

ヴィクトリアは首を横に振る。

「スナイパーが前線に出てどうするのよ」

「ま、まあそりゃそうっすけど……」

「作戦会議しましょう。今の戦いを見て、各々の動きを決めたいわ」  
「ヴィクトリアはリンゴジュースをぐいっと飲み干すと、ボトルを箱に放り込んだ。」

「じゃ、じゃあ作戦会議室へ行きましょうー！」

「ユイ、案内は頼んだわよ」

一行はユイの後に、ついて模擬戦闘室を後にした。

## 第十一話 The Mocker (後書き)

どうもこんにちは、ほーらいです。

今回はロベミライアアンドロイド側が人数比的に圧倒的に不利ですね。実際の戦闘を想定すると、アンドロイド側と人間の人数比は1:2

0くらいになります。アンドロイドはそもそも20\*4=80しか

いませんからね！

それを補うのがオートマータなわけです。

それと、アンドロイドが件のアップデートファイル(第七話のヴィクトリアのセリフ)を使用すると、もう人間ではどうしようもなく

なるほどの強化が為されます。

ただ、これはリーダー格だけのみなんですけどね。

このアップデートの内容はまだまだ秘密！

では、次回予告です！

ヴィクトリア達アンドロイドとサトル達人間は作戦会議を行って

いた。いかにしてロベミライアへ攻め込むか、そして勝利を勝ち取るか。

「まず、本部の地図を全員頭の中に叩き込みなさい。さっきのバーチャルでもいいけど、当日迷子になったらお話にならないわ」

作戦会議は進む。勝利は 誰の手に落ちるのだろうか。



次話 第十二話 The Discusser

## 第十二話 The Discusser

### 第十二話

一行は作戦会議室へ移動する。

ここで決められた作戦は一度国会へ送られることとなる。そして問題点がないか確認し、練り直されてこちらに戻ってくることになっていた。

「まず、本部の地図を全員頭の中に叩き込みなさい。さっきのバーチャルでもいいけど、当日迷子になったらお話にならないわ」

「本部地図の方はヴィクトリアさんとアレクさんの記憶から作ったものを用意しました。後で各自確認してください」

ユイは紙の束を渡す。本部の広さはかなりのものだ。すぐさま覚えるのは難しい。

「次に当日の動きについて。当日は二部隊に分けるわ。後方支援組と前方戦線組ね。ヒロキとヒメは後援組、私を含めた他のメンバーは前線に出ましよう。後援組はまず監視室を制圧し、地の利を手に入れるわ。さっきの戦闘を見た限りでは、映像さえあれば数人分の予知ができそうね。やれる？」

「大丈夫」

ヒメは小さく頷いた。

「ヒメは監視室で私達の行動を予知。ヒロキは動けないヒメのガードを。そして私達前線組は“お母さま”の部屋へ直行するわ。途中でアンドロイドやオートマータによる反撃が予想されるけど、全部撃破しろとは言わないわ。予想されるアンドロイドの数は二十体。特にDタイプのリーダーであるボデージュには注意しなさい」

「ボデージュ？」

「この人です」

ヴィクトリアの記憶データから作り出した写真を全員に配布する。

「彼はDタイプアンドロイドの中でも飛び出た戦闘能力を持つわ。出会ったらまず逃げることに。私でも勝てるかどうか……」

「あの、質問なんすけど、そいつがもし監視室に来たらどうするんすか？」

ヴィクトリアはしばらくの間、考えていたが、やがて答えを打ち出す。

「逃げなさい。監視室付近のカメラを常にチェックしていて、彼が近付いてくるのが見えたら、監視室は放棄して逃げなさい。アンドロイドや主力部隊なしの後援部隊じゃまず勝ち目がないわ」

「そんなにボデージユってのは強いんすか……」

一同に沈黙が走る。だが、ヴィクトリアはぱんぱんと手を打って注目を集める。

「ボデージユとぶつかつたときのことは考えないことにしましょう。あいつは私が仕留めるわ。私ならなんとか対等に渡り合うことができるでしょうから……」

「……つまり、十分なアシストがあれば俺達でも勝てるってことだな」

ヴィクトリアは驚く。まさか戦う気があるとは思っていなかったからだ。

「本気で言ってるの？ 死ぬわよ？」

「そんなの関係ないな。俺達、兵は死の危険と常に隣合わせだ。それに死の危険を背負うことになるのはお前もだろう？」

「そうよ。ボデージユってのとあなたが同程度の實力だつて言うなら、あなただつて勝てるとは限らないじゃない」

「それは……」

確かにサトルとリンの言う通りだった。ボデージユと戦って勝てるかどうかはわからない。負ければそれは即ち死か、捕えられて人格のリセットだ。その二つの意味することはほとんど変わらない。

「俺達をもつと頼ってほしいものだ。お前も含めた俺達全員とボデージユが戦えばいいことだろう？ そうすれば確実に勝てる」

「でも、こんなに戦力を集中させたら……」  
「やれやれ、という風にサトルは首を振る。」

「人間軍は俺達だけじゃないだろう？ 他の軍と連携して攻めればいいだけだ。何も俺達だけがチルドレンと渡り合えるってわけじゃないだろう？」

「それは……」

確かにその通りだった。これだけのメンバーだけで攻めるわけじゃない。人間達が団結して戦いに臨めば。

「姉さま、人間を……人間の力を信じていますか？」

そうだ。自分が人間の力を信じていないからこんな思考になってしまうのだ。人間は何もここにいる人達が全てなわけではない。

フランスからニューヨークへ移動する際に同席したメンバーだって人間じゃないか。彼らはアンドロイドと渡り合い、そして二十人もいたアンドロイド兵を全滅させたではないか。

「そうね……そうだったわ」

ヴィクトリアはぴしゃりと自分の頬を叩く。

「作戦を練り直しましょう。他の人間軍もいることを前提に作戦を考え直すのよ」

サトルはそれを聞いて頷く。

「ヒメ、他の人間軍の対オートマータの戦績リストを用意しろ」  
「了解」

「ユイはヴィクトリアとアレクのデータを集める。だが、間違っても壊すんじゃないぞ？」

「はい、任せてください！」

「ユリとリンは俺とのコンビネーションとの精度を上げるために模擬戦だ」

「わかりました」

「おっけー！」

サトルは自分の部下達に的確な指示を出していく。彼らを動かすのはサトルに任せた方がいいだろうとヴィクトリアは思った。

「あの、おいらは……?」

「あー……じゃあお前は荷物持ちで」

「なんでそうなるんすか!」

ヴィクトリアとアレクは様々な検査を受けることになった。

CTスキャンなどの非切開系検査を一通り受けて体全体の主な構造を調べる。

中のデータ類は左足の親指からUSBを繋いで調べることができた。OSは人間が普通に使ってるコンピュータと互換性のあるもので、そこから内部データを全て調べることができそうだった。もっとも、再現するにはとてもじゃないが通常のパソコンではとてもスペックが足りなくて不可能である。

「かなり高性能なCPUが搭載されていますね。人間並みの感情や思考をコンピュータ上で再現するにはやはり普通のコンピュータでは無理ですからね……」

ユイは二人のデータを調べながらそう呟く。

「何かわかったことはあるの?」

「そうですね。かなり噛み砕いて説明しますが、基本的な部分は“マザー”からのコピーが多いですね。特に感情、思考パターンは“マザー”のを丸移しして、それに少し手を加えただけのようです。その手を加えた部分で性格とかを作り出してるんでしょう。それくらいくつかアップデートファイルが残されています」

「もしかしてそれってSPSystemってファイルじゃない?」  
「それも含まれています」

ヴィクトリアは“マザー”の言葉を思い出す。禁断のパワーアッププログラム。それがSPシステムだと。アンドロイドにさらなる異能の能力を持たせる、個人に持たせるには強力すぎて搭載を見送ったプログラム。データそのものは作成されていたが、実行するに至っていない強力なシステムらしい。

「それ、なんとかして使える状態にもってけないかしら？」

「ロックがかけられています、この程度ならなんとかかなりそうです」

「じゃあ頼むわ。それで私達の性能が一段階パワーアップするはずだから」

わかりました、と言ってユイはプログラムのロックを解除する作業を始める。ヴィクトリアはベッドに横になると、これからのことを考えることにした。

今までなるように身を任せてきたが、これからはそういうわけにはいかない。もっと確実性を求めた完璧な作戦が必要だ。

リーダーという役割についてきたため、作戦を練るのは得意だったが、ロベミライアを倒す作戦となると、なかなか手間取りそうだが、それも相手は自分を作り出した“マザー”だ。どんな手でこちらを追い詰めてくるかわかったものじゃない。

造物主“マザー”。彼女が相手にすべき対象はあまりにも大きすぎる。だが、それ故に乗り越えがいのある壁だとも彼女は思った。

「ロック解除成功です」

「早っ!？」

「えへへ、これでも元ホワイトハッカーでしたからね」

ユイはさっそくSPシステムを起動する。

「アップデートした後は一度再起動をしないといけないみたいです」  
ね

「わかったわ。ちゃちゃつと済ませましょう」

アップデートプログラム実行中というメッセージがモニターに移っている。今彼女の体の中ではどんな変化が行われているのだろうか。

特に変化らしい変化を感じ取ることができなかったが、きっと再起動すればわかるのだろう。

その間ヴィクトリアはユイやアレクとしばし談笑を楽しんでいたが、やがてアップデートが終わり、準備が整う。

「じゃあ再起動してください」

「わかったわ」

ヴィクトリアは一度自分の電源を切ると、もう一度起動し直す。

『アンドロイドプログラムへようこそ。これよりAタイプアンドロイドを起動します』

そして、しばしの間沈黙していたが、やがてヴィクトリアは体を起き上がらせた。

「この感覚は……何？」

ヴィクトリアは明らかに自分の体に異変が生じているのを感じた。手を軽く振るだけで空気がパチパチと鳴る。そこでようやく自分の体にどのような異変が起こったのかを感じ取る。

「これは……電子操作？」

彼女が触れるだけでその触れた物体の電子を自在に操作することができた。電気を流すだとか、そんなレベルではない。物から電子を取り去ったり、与えたりすればその物体はイオン化する。そうすれば物体として成り立つことはできない。

「あらゆるものから電子を吸収し、物体をイオン化させたり、電子を放出して空気中の炭素と融合させて物体を作り出したり……。これはとんでもない能力だわ」

「どうですか……？」

「上々ね。この能力があれば負ける気がしないわ」

ヴィクトリアは試しに空気中の二酸化炭素から炭素を分離し、炭素の壁を作り出してみせる。

「これは……“お母さま”が搭載を見送ったわけだわ。こんな能力があれば武器も防具もいらさない。エネルギーもわざわざ摂取する必要もない。空気から電子を取り去ってそのままエネルギーにできるんだもの。これは恐ろしい能力よ」

手で触れただけで机の一片が塵となって崩壊した。つまり、これは触るだけで電子を自在に扱うことができる能力ということだ。

電子を失ったり、与えられた物質はイオン化する。つまり、触れ

るだけであらゆるものを破壊できる能力ということだ。それはおそらくオリハルコンでさえも例外ではないだろう。

「驚きです……アップデートプログラムで超能力に匹敵する能力を得られるだなんて……アンドロイドっていうものはどれだけのスペックを持っているんですか……?」

そのとき、ヴィクトリアは胸の奥が痛むような感覚を感じた。

「く……っ!? これは……!?!」

ヴィクトリアはエネルギーの減少が異常なまでに激しいのを感じた。おそらく、このSPシステムを起動している間はエネルギーの消耗が激しいのだろう。物体から電子を取り去ってエネルギーに変換しても間に合わない。

「長い間は使えないわね……。エネルギーの消耗が激しすぎるわ」  
ヴィクトリアは一旦SPシステムを閉じる。その瞬間、体が軽くなるのを感じた。

「大丈夫ですか?」

「水……水をちょうだい」

ユイは素早く水の入ったボトルを差し出す。それを口の中にと、いくらかエネルギーが補充された。

「引き続きアレクの方のSPシステム解放を行ってちょうだい」

「わかりました」

ヴィクトリアはベッドに横になると、大きく息をつく。

まるで激しい戦闘を終えた後のように体が重かった。

こんな状態では、実戦で使うこともままならないだろう。うまく使いこなせるようになるまでトレーニングが必要だった。

「で、総攻撃はいつになるの?」

「国連に作戦を提出してから数週間はかかりますね。他の軍でも各々作戦を練っているでしょうから、その中で最も良い作戦を選び出さなければならぬわけですから」

「数週間……か」

ヴィクトリアはLEDの電灯を見上げながら一人思う。



国連と偏に言っても一枚岩ではないはずだ。色々な思想、宗教、法律が絡み合い、戦争にどれだけの資金、軍を投資できるかを各国それぞれで決めている。国連はそれをうまくコントロールして人員の分配を行わなければいけない。

それに比べてロベミライアのなんと単純なことか。全ては“マザー”の言う通りにしていればいいだけだ。絶対君主制の利点はそれだ。アンドロイドには思想も宗教もないに等しい。仮に特異な個体が生まれても、すぐに粛清される。アンドロイドに人権はない。ヴィクトリアは今、こうして人間と同等の扱いを受けている。今まで部下は愛着のある道具くらいにしか感じなかったが、ここでは部下は人間であり、友であり、仲間だ。

自分の部下以上に素晴らしいコンピネーションを取るサトル達を見て、ヴィクトリアは感じていた。これが真の仲間である、と。

ヴィクトリアは思った。その中に自分やアレクも混ぜてもらえるのか。ヴィクトリアは仲間として認めてくれるのだろうか。アンドロイドでも、人間の仲間に 友達になれるのだろうか。

「アレクさんのSPシステムの方、ロック解除終わりました。これよりアップデートに入ります」

ヴィクトリアは起き上がってボトルに入った水を口に含む。そしてモニターの方へ目を向ける。

アレクのシステムを見るのは初めてだった。自分とは違うタイプのアンドロイドとは基本的にシステムの交流がない。

「ヴィクトリアさんとはまた違ったプログラムをうっていますね」「同じアンドロイドでもタイプごとに役割が違うからね」

そう、アレクはロベミライアの左腕だ。左腕は工場管理や書類作成が主な仕事だ。偵察が仕事のAタイプとはまったく違ったプログラムが必要になってくる。

「私はロベミライアの目。偵察が主な任務だもの。そして器用な仕事を行う左腕のアレク。行政を行う頭脳のレンシア。これは私達がニューヨークに戻る最中に出くわしたヤツね。そして戦闘を行う右

腕のボデージユ。私達は本来ならどれが欠けてもダメなのよ」

「そういう意味では、目、左腕、頭脳の欠けた今、ロベミライアへアタックするチャンスということですね」

「そうね。今がチャンスであることは確かだわ。でも、“お母さま”もこういう事態がいつか起こることは想定済みのハズだわ」

ヴィクトリアは思った。確かにこの短時間で六十体ものアンドロイドを失った今、ロベミライアは絶対的に脆いハズ。だが、こんな事態を全く想定していなかったのだろうか。あの“マザー”のことだ、何かアクションを起こすことは間違いない。

「今はチャンスであるかもしれない。でも、もしこれが罠だとしたら……？」

「今攻めに転じるのは危険……ですか」

そう、何かがおかしい。世界最高のコンピューターである“マザー”がこんな失態を犯すとは考えにくかった。

「SPシステム、インストール終了しました。アレクさん、再起動を行ってください」

「はい、わかりました」

アレクは一度ベッドに横になると再起動を行う。

『アンドロイドプログラムへようこそ。これよりBタイプアンドロイドを起動します』

低い制動音と共にアレクが起き上がる。

「SPシステム、起動します」

その瞬間、彼の体がふわりと浮かび上がった。

「レビテーション？サイコキネシス？」

「いえ、違います、これは……」

彼の手が異様なまでに早く動く。一体彼の能力はどんなものなのだろうか。

「時空間作用……時間と空間に少しだけ介入できる能力です！」

「どういうこと？」

「時間の流れに干渉して素早く動いたり、空間に干渉して重力を無

力化したり……そんな感じの能力ですね」

アレクはSPシステムを終了する。

「浮き上がっていた体はすとんとベッドに落ち、堅いマットレスが彼の体を受け止める。」

「いたた……まあ、使いどころさえよければ便利な能力かもしれないませんね」

「ねえ、それって私の動きを早くすることとかできない？」

「どういうことですか……？」

ヴィクトリアは一つの妙案を思いついた。それをアレクに説明する。

「……やってみないとわからないですけど……確かにそれができれば強力ですよ」

「でしょ？ 試してみる価値はあると思わない？」

「はいはい、戦闘も大事ですけど今は検査の時間ですよ！ お二人とも横になってくださいな」

ユイの言葉に黙って二人はベッドの上で横になる。

「会話によって結構ノイズが生じますからね……。本当のところは何もせずに横になって何も考えない状態が一番望ましいんですけどね」

「何も考えない……ねえ……」

確かに演算機能を停止すれば感情の構成も思考も行われぬ。検査の邪魔にならないわけだ。せつかく検査してもらっているのだから、やはり邪魔しない方がいいのだろう。

そう思うと、ヴィクトリアは全演算機能を停止させることにした。スリープモードとは違った眠気のようなものが襲ってくる。それは徐々にヴィクトリアの意識を落としこみ、深い眠りへと誘っていた。

## 第十二話 The Discusser (後書き)

どうもこんにちは、ほーらいです。

なんかやけに小説の更新が正常でほーらいにはおかしいって？  
まあ、そういうこともたまにはありますよ、うん。  
というわけで今回は作戦会議とアンドロイド解析のお話です。  
今回の解説はSPシステム関連になりそうですね。

SPシステム、これはまあ作中で解説があったようにアンドロイド  
スーパーパーフェクトシステムの略です。

え？嘘っぽい？

うん、だって嘘だもの（蹴

まあ、たぶんスペシャルシステムとかそんな感じ。

ちなみに企画段階ではレベル3と呼ばれている能力でした。

さて、二人の能力を解説しましょうか。

まずはヴィクトリアの電子操作から。

電子操作、これは文字通り物質の電子を操作する能力です。

あらゆる物質は陽子と中性子、電子の三つの要素で構成されています。  
す。

これら三物質は密接にくっついており、それによって原子というものが作られるわけです。

で、彼女の能力はこの電子を操作しようというものです。

電子を失った物質は物質として存在することができません。

まあ、原子が原子の形を保てないわけですからね。

それによって、ありとあらゆるものを破壊することができます。

彼女が炭素の壁を作り出したのは、空気中の二酸化炭素中に含まれる酸素の電子を遊離し、炭素と酸素に分離させ、さらに炭素中の電子を他の炭素分子の電子と結合、そして炭素の壁を作り出したわけ

です。

皆様ご存知だとは思いますが、炭素というのは結合の仕方によってはとても強力です。

それこそ鉛筆の芯からダイヤモンドまでその硬さは自由自在というわけです。（本当はダイヤモンドは硬度が高いだけで、衝撃に対する耐性はそれほどないのが現実ですが、この小説中ではダイヤモンドではなく強力な炭素の壁を作っている、という設定になっております）

まあ、そんなわけで炭素の壁を作り出して攻撃を無力化したり、手でモノに触れただけで物質を破壊したりとその能力の使い方は自由自在です。

もっとも、これほどまでに強力な能力なので、エネルギーの消耗は異常なまでに早いですけどね。

続いてアレク君の時空間作用の説明をしましょう。

時空間作用はその名の通り、時間と空間に微弱ながら干渉する能力です。

その効果はほんの一瞬ですが、けれどもその一瞬を攻撃へと転じることができます。

大きくその能力を二つに分けると時間圧縮、そして空間作用となっております。

時間圧縮はその名の通り、数秒間だけではありませんが時間を圧縮し、その数秒間の行動を一瞬に圧縮する能力です。FF8の某魔女様とは若干違います。

空間作用は重力などに干渉し、自らの体を浮かせたりする能力です。どちらも強力ではあるものの、器用貧乏な感じが否めませんが、それでも今後大活躍します。

どう活躍するかはお楽しみに！

では、次回予告いきましようか。

戦闘訓練を続けるヴィクトリア。

しかし、彼女は疑問を感じていた。

「お母さま”はどういうつもりなのかしら。アンドロイド チルドレンを偵察に出したり、オートマータで依然攻撃を続けたり…私には理解できないわ」

減ったはずの戦闘要員。けれども止まぬ攻撃。戦いは続く。

### 第十三話 The Taker

## 第十三話 The Taker

### 第十三話

そして数週間が経過した。

かといって、その数週間何もしていなかったわけではない。

ヴィクトリア達はサトル達人間の部隊とコンビネーションが取れるように訓練を続け、ユイは解析データを徹底的に分析し、仮想対アンドロイドプログラムを作り上げ、仮想戦闘を行うことを可能と  
していた。

彼らが練り上げた作戦も国連へと送り、現在吟味されているはずだ。

長いけれども、必要な時間。この時間はロベミライア、国連両方に猶予を持たせるものとなった。

「おかーさん」、準備オツケーですー」

『よくここまでやり遂げました』

レンシアは“マザー”の前に立って報告を行っていた。

この数週間、ロベミライアもただ黙って指をくわえて見ていたわけではない。彼らなりに作戦を練り、その準備を着々と行っていた。

「あとは向こうの動きを待つだけですー」

『おつかれさまでした。下がってよろしいですよ』

レンシアは“マザー”に一礼すると、部屋を後にする。

「よ、おつかれっす」

レンシアが廊下を歩いているとポデージユに出会った。

「まったくCタイプの仕事も大変だよー」

「ま、頭脳はしっかり働かないといけないっす。そうしなきゃ俺達右腕も鈍るばっかりっすからね」

「たまには代わってほしいよー」

「無理つすよ。俺達Dタイプはそんな器用なことできないつすから」  
「ちえ、ボデちゃんは楽でいいなあー」

レンシアは愚痴をこぼしながら彼の隣を通り抜ける。

「あ、そうそう」

「なあにー？」

「国連に放った“草”によると、そろそろ攻撃らしいつすよ？」

「ああ、今は“アレ”はボデちゃんの統制下だっけえー？」

「そういうことつす。じゃ、お仕事頑張ってくださいっす」

そこで二人は別れる。

レンシアは一人で執務室に入っていた。

ほとんどの解析を終えてようやく自由になったヴィクトリア達はSPシステムのトレーニングを行っていた。

いかに上手にSPシステムを運用するか、そしてそれを用いた連携攻撃、そして長時間の使用に伴う疲労に対する耐性。

「はあ……はあ……次いつてもOK？」

「ね、姉さま……少し休みましようよ。もうかれこれ一時間はSPシステムを起動しっぱなしですよ？」

ぺたんと座り込むアレク。ヴィクトリアも肩で息をしながら椅子に座り、そして近くのテーブルに置いてあった水を喉に流し込む。

「はい、アレク」

「ありがとうございます」

ヴィクトリアはアレクへ水の入ったボトルを放り投げる。それをアレクは受け取ると、一気に飲んだ。

「少しはエネルギー補充した？」

「はい、でも体の各部位がオーバーヒートしかけてます……」

「そっか。じゃあもう少し休みましよう」

アレクはヴィクトリアの横に座ると、水の入ったボトルを傾けながらヴィクトリアに尋ねる。



「少しは僕達、強くなりましたかね？」

「そうね。SPシステムもあるし、何より戦闘の練習を積んだことは大いに意味があることだと思うわ。特に戦闘経験の乏しいあなたはね。でも」

「ヴィクトリアは少し水を口に含んで、それを嚙下してから続けるように言う。」

「だからって油断はしないことね。相手もSPシステムを使ってくる可能性があるわ。いくら今まで搭載を見送っていたとはいえ、私達が使っている可能性を考えると、同等の戦力がなければ敵のアンドロイドも私達に勝てないじゃない」

「ですよね……」

「お互い負けるわけにはいかないのよ。相手もこっちも……ね」  
「ヴィクトリアは立ち上がると、部屋の扉に手をかける。」

「姉さま、どちらへ？」

「お風呂に行ってくるわ。オーバーヒートした機関を冷やす目的もあるし、さっぱりしたい気分だわ」

「研究所内には共用の風呂がある。ユイに自由に使っても良いと言われており、汗を流した後はよく彼女も入っていた。」

「アンドロイドとはいえど、基本的な部分は人間と同じだ。加熱した機関を冷やすために汗、という形で水分を吐き出す。だから、激しい運動をした後は少し汗臭くなる。」

「彼女は風呂に到着すると、備え付けの棚の中に入っているかごへ自分の着ていたものを放り込むと、浴室のドアに手をかけた。」

「時間帯がまだ夕方だったためか、誰一人として広い浴室内にはいなかった。」

「軽く体を洗うと、ヴィクトリアは湯船に体を沈める。」

「ふう……」

「風呂はほどよい熱さだった。ヴィクトリアは広い風呂の中で大きく伸びをすると、一人思考にふける。」

「この数週間の間、ロベミライアは何をしているだろうか。」

ここ数週間、オートマータによる定期的な襲撃は止んでいない。相変わらず、彼女が出た後の体制を貫いているのだろうか。

もし、ヴィクトリアがトップだったら、と考えてみる。

もしヴィクトリアがトップならば、オートマータを増産し、本部施設の防衛に回すことを考える。今の本部施設にはアンドロイドは二十体しかいない。防御力の落ちてる今、少しでも防衛に人員を割くはずだ。

それなのにもかかわらず、ヨーロッパではまれにチルドレンことアンドロイドの活動が確認されているし、転移による攻撃は以前より増しているようにすら感じる。

ここ数週間でニューヨークも幾度となく攻撃された。ヴィクトリア達は検査で出られなかったが、サトル達が掃討のために何度も出ていくのを目にしている。

ヴィクトリアには“マザー”の考えていることがわからなかった。

一度肩の力を抜いて、別の思考から考えた方がいいのだろうか。

「あれ、ヴィクトリアさん？」

すると、ドアの方から声がかかった。

「ヴィクトリアさんもお飯前にお風呂入るタイプだったんですか？」  
そこに立っていたのはユイだった。

「いえ、結構動いたから汗まみれになっちゃってね」

「そうですね。じゃあ替えのお洋服用意した方がいいですね」

そう言うと、一瞬ドアの向こうにユイは消えたが、しばらくして戻ってくる。

「女の子の研究員の子に替えのお洋服を持ってくるようにお願いしちゃいました。今まで着てたのはお洗濯に出しちゃっていいですよ  
ね？」

「ええ、お願いできる？」

「任せてください！」

彼女は素早く体を洗うと、湯船に入ってヴィクトリアの隣まで歩いてきた。

「お隣いいですか？」

「ええ、構わないわ」

ユイはゆっくりと腰を下す。

グイクトリアはいい話相手ができたと思って、思っていることを聞いてみる。

「ねえ、一つ聞いてもいい？」

「はい、なんでしょう？」

グイクトリアの中で引つ掛かっていること……“マザー”はどういうつもりなのか。他の人の意見も聞きたかった。

「お母さま”はどういうつもりなのかしら。アンドロイド チルドレンを偵察に出したり、オートマータで依然攻撃を続けたり……。私には理解できないわ」

「そうですね……。おそらく私達人間よりも“マザー”に近いあなたでもわからないのだから、人間の私の意見は的外れかもしれませんが……」

ユイは手でお椀型を作ってお湯をすくい上げる。

「“マザー”はアンドロイドに匹敵する戦力、あるいは代替する戦力を作り上げたんじゃないでしょうか？」

「どういうこと？」

「現実にあなたのように離反する者が出た。つまり、今のアンドロイドのプログラムはロベミライアにとって完璧ではないこととなります。となると、今のままじゃあアンドロイドを完全に支配することとは難しいわけです。となると、外への攻撃どころじゃありません。内部を固めずに攻撃に出て、それがまた離反したら問題ですからね」「それとアンドロイドの代わりにどういう関係が？」

「そこで私がもし“マザー”だったら思いつくことは、思考を持たないアンドロイドの創造です。とりあえず急しのぎにはなりませんし、思考を持たないから離反する恐れもない。あるいは、アンドロイドを超える存在の創造です。これが完成すると、アンドロイドは必要がありません。となると、失っても構わない戦力になることになり

ます。だから積極的に外部へ派遣しているのかもしれませんが」

ユイは湯気の立ち上るお湯に体をいっばいに伸ばすと、再び語り始める。

「アンドロイドの雛型がオートマータなら、アンドロイドがベースとなる更なる存在が存在する可能性は無きにしも非ずです。それを“マザー”は完成させたのかもしれませんが」

「それじゃあこんな悠長に待つてるわけにはいかないじゃない!」  
ヴィクトリアは立ち上がる。だが、ユイの顔は涼しいものだ。

「そうですね。悠長に構えてる場合じゃないのかもしれませんが」

「じゃあ今すぐにも攻撃を……」

「国連は一枚岩じゃありません。いくつもの人種、宗教、思想が絡み合って複雑な様相をしています。だから、すぐには動けないんです。でも、皆の力が集まったときは強いんです。だから、機が熟すのを待っているんですよ」

『桜木ユイ様、桜木ユイ様、国連から至急のメールが届きました。早急にメール内容を確認してください』

館内放送が響く。それを聞いてユイはゆっくり腰を上げる。

「どうやら機が熟したようですね。待った甲斐がありました。もし、皆の準備を待たずに独断先行したらどうなったか……ヴィクトリアさんならわかりますよね？」

「う……それは……」

ユイは湯船から出るとドアに手をかける。

「出撃の準備、しておいてくださいね。いつ出るかわかりませんか。あ それとお洋服、もう届いたみたいですよ」

そういうと、彼女は浴室を出ていく。

ヴィクトリアは一人風呂の中で棒立ちになったまま、ユイの背中を見つめていた。

### 第十三話 The Taker (後書き)

こんにちは、ほーらいです。

今回は美少女達のお風呂タイムですよ！ いやっほう！  
といっても、色っぽい表現は出てきませんが、

今回は解説不要な一話だったような気がします。

そんな専門用語とか出てきてないですし。

彼女らがよく水分補給してるけど、その水分から核融合電池の水素を補給してるって話はなんか第三話くらいでした気がします。というわけで今回はさらっと次回予告にいきましょうか。

オートマトンコピーの攻撃、そして人間部隊の同時攻撃。

ロベミライアは強力な打撃を受けている……ハズだった。だがしかし

「正直微妙っす。予想してたより使い辛いですね」

ボデージユの率いるその影は、確実にヴィクトリア達を追い詰める。

次話、第十四話 The Faker

## 第十四話 The Faker

### 第十四話

「時期到来となったようです。皆さん準備はよろしいですか？」

ユイの部屋にはサトル達とヴィクトリア達の七人が集合していた。国連からきたメールはロベミライアへの総攻撃を行う、というものである。そこに至るまでの仔細な計画がメールには示されていた。ユイはその内容を彼らに説明する。

「準備は万端だ」

「いいわよ！」

「おいらは準備オーケーっす！」

「……」

「いけますよ！」

ヴィクトリアは背中に背負ったドラゴリアの銃身に触れる。冷たい感触が指を通じて伝わってくる。

「僕も準備万端です」

「私は」

不安要素は山ほどあった。だが、今は実際に行動しなければならぬ時だ。数十分前に言ったばかりではないか。悠長に待っている場合ではない。そしてユイは言った。機は熟した、と。

「私は大丈夫です！」

ユイは一同の顔を見渡して頷く。

「皆さんの準備が整ったところでレッツゴーです！」

「そっちはオーケー？」

「正直微妙っす。予想してたより使い辛いつすね」

レンシアとボデージユは本部内に入り込んだ国連所属のオートマ

ータの殲滅にあたっていた。

国連軍がロベミライアの技術を盗用し、作り出されたオートマータ兵は次々と転移によってロベミライア本部へと送り込まれ、ロベミライア内は軽い騒動になっていた。

もともと、所詮はオートマータ兵。アンドロイドの前では敵ではない。

「こっちは終了つと。そっちはどうつすか？」

「まあまあだねえー。今亜空間ロックの作業を展開中だよおー。亜空間ロックが済めば転移攻撃は止むはずー」

「ま、その代わりこっちからも転移できないつすけど、ここまで来たらもう関係ないつすね！」

二人は次々襲い来るオートマータ兵を蹴散らしながら、施設内を駆けめぐる。

「大きいのが来るよおー！」

「XL級の技術まで再現するとは人間もなかなかやるつすね」

二人が急行した図書館にも何体かのオートマータ兵がいた。ロベミライア側のオートマータも大勢戦っているが、人間側の方が数が多かった。

「ほんとにこっつすか？」

「間違いないよおー。ほら、空間が割れたあー」

彼女の言う通り、空間が縦に割けてそこから機械の巨体が姿を現す。

「じゃあいくつすよ！」

ボデージュはデルリングヘルリアを背負うと、両手にセイラムを装備する。

レンシアも指からミッドナイトを垂らすと、大きく息を吸った。

「いつくよおー！」

二人は同時に飛び上がる。

大振りな攻撃が繰り出されるが、それを素早く二人は避けると、足から体へ上っていった。

レンシアはミッドナイトを四肢や体に絡めると、その動きを拘束する。ミサイルポッドは開かなくなり、体を動かすこともままならない。

そこへボデージユはセイラムを叩き込む。特に弱点となる間接を中心に打ち込み、更に機動力を削ぐ。

「これでトドメっす！」

ボデージユは胸まで駆け上がると、デルリングヘルリアをオートマータの胸部にあてた。そしてためらうことなく引き金を引く。

重い音と衝撃と共にパイルバンカーが打ち出される。それは強固なオートマータの装甲を打ち貫いて、完全に機能を停止させる。

「はい、亜空間ロック作業終了おー。これで転移は止むはずー」  
レンシアは亜空間ロックが完了したことを告げる。あとは施設内に残っているオートマータを殲滅すればいい。

「時間がないよおー。もうすぐ人間軍が来るよおー」

「さ、お掃除っすよ！」

一方、サトル達はユイに見送られてニューヨークを発ってから数時間が経過していた。

このまま順調にいけばもうすぐロベミライア本部施設上空に到着するハズである。

そこからパラシュート降下し、“マザー”のいる部屋まで突撃し、“マザー”を破壊する手筈となっていた。

既に数十の部隊がロベミライアへと降下しているはずである。オートマータが相手にはいるとはいえ、実力は人間の方が高い。人間よりも強力なアンドロイドも人間兵よりも圧倒的に数が少ないハズだ。

「オートマータ転移がなんらかの手段で無効化されたらしい」

サトルが顔を上げて言った。GPSが搭載されたオートマータの多くがある一時からぶつくり信号が途絶えてしまっているという。



亜空間までは侵入できるのだがそこから先、相手の領地に入ろうとするとそこで止められてしまうという。

「なんなのよ！　じゃあ人間兵しか戦えないってわけ！？」

「いや、遠くの僻地に転移させて、そこから移動させればなんとかなるらしい」

「それじゃオートマータ到達までどれだけ時間がかかるかわからないじゃない！」

「ならば、私達だけでロベミライアを潰す……」

「そういうことっすよ！　おいら達の力、見せつけてやるっすよ！」

無事に一行はロベミライア本部施設上空まで到達した。そこからパラシュートでサトル達は降りる。

「作戦通り、ヒメとヒロキの率いる部隊は監視室の制圧、俺達は“マザー”を破壊しに行く」

「了解」

「了解っす」

サトル達は施設内へ手近なドアから入ると、二手に別れた。

ヒロキとヒメの率いる部隊は途中途中オートマータを撃退しながら監視室へ向かっていた。

「Dタイプアンドロイドってヤツらに会わないっすね……」

「そこを左」

二人の率いる部隊は複雑に入り組んだ通路内を駆けめぐる。監視室は施設の端の方にある。そこまで走って行かなければならない。

「隊長、少し不穩過ぎませんか？」

部隊員の一人がそうヒメに言う。ヒメがこの部隊のリーダーだった。

「そうかもしれない。けれども、私達は進むしかない」

そうして数分が経過した。だが、施設は相当広いのか、なかなか監視室に到着しない。

「後方より射撃攻撃確認しました！ チルドレンです！」

「来たつすね！」

「……射撃？」

部隊は一瞬で陣形を組み、通路に向けて銃を抜き放つ。

そして迷うことなく引き金を引いた。一瞬で弾幕が通路内を制圧する。

「ここはヒロキに任せる。私は数人の隊員を連れて監視室に向かう」

「ヒメちゃん！？」

「カメラを起動して。私がパソコンから画面を見ながら指示を送る」

「ヒメちゃんはどうするんすか！？ 他のチルドレンと会ったら終わりつすよ！？」

「でも、今は一刻でも早くサトル達をアシストすることが大事。そのためには私が監視室にたどり着く必要がある」

「……わかつたつす。絶対に死んだら許さないつすよ？」

「わかつてる」

二人は拳をぶつけた。

「ルドルフ、クラウド、ジョージ、バトラ、スミス、カノンは私と監視室に向かう。カノン、私の体を担いで。同時予測モードでは私は動けない」

「了解です！」

カノンと呼ばれた隊員はヒメの体を背負った。そして七人は走り出す。

ヒロキ達は圧倒的な弾幕を張ってアンドロイド兵を制圧していた。この弾幕量ならば、オリハルコンコートでも着ていなければ突破することはできない。

「第一部隊弾込め！ 第二部隊一斉射撃開始つす！」

ヒロキは部隊に適切な命令を下す。この切れ間のない弾幕を維持することが重要だった。

「私に任せてください」

ヒロキはどこかで聞き覚えのある声が出たな、と思った。ただ、

それは酷く単調で、まるで機械で無理やり再現したかのような声だった。

『逃げて!』

その瞬間、彼女のとしては珍しいヒメの悲鳴のような声がイヤホン越しに伝わってくる。

「え……?」

ヒロキは目を疑った。通路の向こう側にいたのは　ドラゴリアを持ったヴィクトリアだった。

「全隊退避っす!　ともかく隣の通路に逃げるっす!」

部隊員は我先にと通路内へと飛び込んでいく。部隊を混乱が襲った。

ヒロキは身をもってわかっていた。あの武器がどれだけ恐ろしいかを。バーチャルとはいえ、一度食らったのだ。ヒロキもなんとか通路の角に身を隠す。

次の瞬間、恐ろしいまでの轟音と共に音速を遙かに超えた弾丸が飛んできた。

「うーん……　やっぱり臨機応変性にかけるっすね……」

その惨状を見渡しながらボデージユは呟くように言う。

「マスター、次の命令を」

「姐さん、そのマスターってのをやめてほしいっすよ」

「私は姐さんではありません。ヴィクトリア・コピーです」

「うーん……　扱い辛いっす……」

ヴィクトリア・コピー。それが彼女に名付けられた名前だった。

「というか、敵が全員逃げた後なのに引き金引くっすかね……。おかげで通路がぐちゃぐちゃになって通れないじゃないっすか」

「マスター、次の命令を」

「ったく……。次の命令、人間を射殺しろっす。あ、斬殺でもOKっすよ。ともかく人間を掃討すればOKっす」

「了解しました」

ヴィクトリアはドラゴリアの余波を受けてぐちゃぐちゃになった通路を歩き辛そうに歩いていく。

「えー、こちらボデージユ。レンシアっちはどうですか、どうぞ」  
しばらくの間、レンシアの間伸びた声がイヤホンから聞こえてくる。

「人間の部隊と交戦中だよおー。どうぞおー」

「りょーかい。こっちは姐さんに任せつつ。これから監視室に先に向かった人間の部隊を壊滅させに行くっす」

「りょーかいだよおー」

ぶつりと通信が切れる。

通路がこんなぐちゃぐちゃになっては部下を大勢連れて無理やり通るのも無理そうだった。

「しゃーないっす。遠回りしていくっすかね」

一方、サトル達はチルドレンと交戦していた。

通路を挟んでの射撃戦。だが、明らかに相手の動きが鈍かった。

「ヴィクトリア、あいつら何タイプだ」

「そんな……ありえないわ」

ヴィクトリアは顔を真っ青にしてその通路の向こう側に立つ敵を見つめる。

「あれは…… Aタイプアンドロイド、私の部下だったメンバーよ」

「なんだと……！？ Dタイプだけしかいなかったんじゃないのか？」

「この数週間で増産したに違いないわ。でも、動きがおかしい……？」

明らかに通路から姿を出しての射撃攻撃。これでは的にしてくださいと言っているようなものだった。

だが、ヴィクトリアは引き金を引くことができなかった。元部下

と同じ顔をした敵を撃つことができなかった。

「ヴィクトリア、銃を持て。お前のレールガンで一掃する」

「そんな……私にはできない……あの子達を殺すことは……できない」

サトルはヴィクトリアの胸倉を掴んだ。そして怒鳴るように言う。

「今は敵だ！ 忘れる！」

「そんな……無理に決まってるじゃない……」

「お前は何のためにロベミライアを出たんだ！？ 世界を変えるためじゃないのか！？」

「だからって部下をこの手にかけていうの！？ あなただってどうするの！？ もし……もしユイさんが敵に回ったら、あなたは引き金を引くことができるの！？」

「……っ！」

サトルはヴィクトリアを離れた。

「ユイ、お前が特攻を仕掛けて殲滅しろ。お前の装備ならやれるはずだ」

「でも……ヴィクトリアさん、いいんですか……？」

「私は……私は……っ！」

ヴィクトリアにそんなことを決めることはできなかった。

元部下の面々を殺す命令を 下すことができなかった。

「私にはできない……。私には……できない」

「ユイ！ やれ！ ここを突破しなければ“マザー”のいる部屋にたどり着けない！」

「……わかりました」

ユイは手に戦帝を持つと、単身弾幕の嵐の中に飛び込んでいく。

それをヴィクトリアは止めることができなかった。

「やあああああっ！」

ユイは戦帝を壁に打ちつける。壁にぶつかって戦帝は反射し、通路を覆いつくすように跳躍する。

それは一瞬で数多くのアンドロイド兵の命を奪った。

「っ！」

ヴィクトリアはそれを見ていることができなかった。

「姉さま……」

アレクは心配そうにヴィクトリアの顔を見上げる。

「私は……二度もあの子達を殺さないといけないの？」

「あれはきつとただのコピーです。きつと各々に人格も思想もありはしません。だからあんな風に通路から体を出して射撃してくるんです。だから姉さま、あれは姉さまの部下じゃありません」

「でも……元のデータは私の部下のものよ？ 撃てるわけ……ないじゃない」

「二度目がダメだったなら、三度目を作ればいいんです。ロベミリアにデータが残っている限り、何度でも作れます。あのAタイプの皆さんは皆さんであってあの優しいAタイプの皆さんじゃないんです。姉さま、決別しましょう」

「……っ！」

ヴィクトリアは涙を流しながらドラゴリアを構える。

「ユイ、一旦身を引け。ヴィクトリアがやる気になった」

『わかりました』

通信装置の向こう側からユイの声が聞こえてくる。

ユイは素早く戻ってきてヴィクトリアの後ろに回る。

向こうからは相変わらず上手く定まらない弾幕が襲い来る。だが、それを前にしてもヴィクトリアは冷静に狙いを定める。

『射撃誘導システム起動』

目を瞑ると、その裏側に仲間と過ごした日々が流れていく。

『データ収集……充電開始』

そして目を開くと変わり果てた仲間の姿があった。

『手ブレ修正、ターゲットの移動先を想定』

その仲間達を自分の手で殺さなければいけないことが悔しかった。

『射撃準備完了、命中率99.8パーセント』

彼女は一粒だけ涙を流して、引き金を引く。

重い衝撃と共に通路が破壊されながら弾丸が飛んでいく。

それは一瞬で数多くの仲間達の命を奪った。

「掃討完了だ。ヴィクトリア、よくやった」

「私は……これで正しかったの？」

「正しいも正しくないもない。この世に正しいと決まっていることなど一つもないんだ」

サトルはヴィクトリアの肩を叩く。

「いくぞ。全ての原因 “マザー” を倒す」

「わかった。わかったわ」

ヴィクトリアはドラゴリアを背負うと、ゆっくりと歩き出す。

半壊した通路を歩きながら、部下だったアンドロイド達の亡骸を踏みしめる。

「あなた達のこととは絶対に忘れない。絶対に ツー！」

## 第十四話 The Faker (後書き)

こんにちは、ほーらいです。

いざロベミライアへ。最後の決戦が始まりました。

今回の解説はアンドロイドコピー達についてお話ししましょう。

ヴィクトリア達の前に立ちふさがったアンドロイドコピー達はロベミライア本部に残っていたアンドロイドのデータを複製して作られた戦闘専用の兵隊です。

A、Bタイプ両方のアンドロイドがいなくなってしまった、ロベミライアのアンドロイド部隊の圧倒的な戦闘力不足をどうにかするためのものですね。

彼らに感情はありませんが、それでも十分な戦力となります。

ただし、やはり感情を持たないので非情であり、そして自らを消耗品としか考えていないあたり、オートマータと同じかもしれません。なんだか、こう考えるととても悲しくなってきましたね……。

では、次回予告です。

『SP system set up... system all  
green.』

爆ぜるは戦火、飛び交うは弾丸。

運命の女神は誰に微笑むか。或いは冥府の王は誰の手を取るか。

『System start. Prepare impact!』

次話、第十五話 The Battler



## 第十五話 The Battler

### 第十五話

監視室制圧に向かったヒメは七人の部下とともに通路を移動していた。

「次の通路を右に」

「了解です！」

ヒメはパソコンの画面を見ながら、同時に自分の未来を常に予測する。何か危険なことがあっても、この

まま倒れるわけにはいかない。この作戦のファーストステップが監視室の制圧なのだ。

「あ……」

次の通路を曲がるうとしたとき、ヒメが短く声を漏らす。

「どうしました、隊長？」

「あいつが……いる！」

通路を曲がると、そこには今か今かと待ち構えていたボデージュと二人の部下のアンドロイドがいた。

「おんぶしてもらって移動とはまた随分贅沢な隊長さんっすね」

「……こいつ、弱そう」

彼の喋りを聞いて、思わずヒメはヒロキを思い出した。ヒロキがこの場にいれば、酷いと嘆いてたこと間

違いないだろう。

「人を見て第一声が弱そうとは酷いっすね」

「あなた、私の知り合いに口調が似てる」

あえてヒメは友人と言わない。やっぱりこれを聞けばヒロキは文句を言っただろう。

「口調が似てるからって、戦闘能力まで似てるとは限らないですよ！」

ボデージユは両手にセイラムを装備して長い廊下を駆けていく。その後にアンドロイドの部下が連れ従っ

てついてくる。

「逃げて！ サトル達のところへ向かう！ ここでは曲がらず、次の通路で左へ！」

「了解です！」

ヒメ達は逃げに転じる。ヴィクトリアから彼女が聞かされたボデージユの能力だと、たとえ部下が二人し

かいらなくても、この七人では勝てるはずがなかった。

だが、逃げに回っても逃げ切れるか……。サトル達の位置を示す光点がパソコンの地図上に表示されている

る。ここから遠い距離ではないが、それまでに確実に追いつかれるだろう。

となれば戦うべきか。いや、それも無駄だろう。

「手榴弾を撒いて少しでも追撃を遅くして！」

「了解です！」

一行はポケットに入れてあった手榴弾のピンを抜いて通路に転がす。

「のわ！？」

後方で爆音と共に悲鳴が上がる。これで少しは距離を取ればいいとヒメは思った。

「人間のくせにやるっすね！」

だが、後方からの声の距離はむしろ近付いているくらいである。

「まさか……オリハルコンコート？」

「正解っすよ！」

七人のすぐ真後ろにボデージユが張り付く。

「まず一人っす！」

ボデージユのセイラムが爆ぜる。轟音と共にルドルフの体が吹き飛んだ。

「ルドルフっ！」

「お先に……失礼します……！」

「振り返らないで走って！ なんとかしてでもサトルと合流する！」

「はい！」

ボデージユは更にクラウスの足を払って転ばせる。

「ぐああっ！」

「クラウス！」

「行ってください！ なんとかしてでもサトル隊長の元へ……！」

後ろを走っていた二人のアンドロイド兵がクラウスにトドメを刺す。クラウスは声にならない悲鳴を上げ

ながら殉職した。

「次は誰っすかね〜」

ボデージユはセイラムでバトラの足を穿った。

「タダでは死んでやるか！」

バトラは転びながらもポケットから手榴弾を抜き出すと、ピンを抜く。

「っ！？」

そして、二人のアンドロイド兵を巻き込んで自爆した。

「バトラ！ あの野郎……いいとこ見せやがって！」

ジョージが涙を拭く。ヒメも一人ずつ部下が死んでいく悲しみをこらえながら、残った兵達に命令を下し

ていく。

「走って走って走って！ なんとかしてでもたどり着くの！」

ヒメは珍しく感情的になりながら叫ぶ。今までの中で最も大きな

死への恐怖がヒメを押し潰しそうになっ

ていた。

「ウチの部下を巻き込んでくれた仕返しっす！」

「うわあッ！」

今度はジョージの頭にセイラムをぶつけられる。頭を砕かれてジョージはごろごろと廊下を転がっていつ

た。

「たまには女の子も殺らないと不公平っすよね〜」

ヒメは息を飲む。次の標的は自分だ、と。彼女は迫り来る死への恐怖に心臓を掴まれながら、目を堅く瞑

る。

「隊長！ 行ってください！」

次の瞬間、スミスがボデージュに飛びついた。ボデージュとスミスはごろごろと床を転がっていく。

「この！ 離れろっす！」

「隊長！ 絶対に逃げ切ってください！」

「スミス！」

スミスはボデージュの体を後ろから組み固めると、少しでも時間を稼ごうとする。

「人間いい加減しなさいっす！」

セイラムが打ち出される音がヒメには聞こえた。これでまた一人部下を失ったことになる。

残るはヒメと、ヒメを背負うカノンのみだった。

「さあさあ最後っすよ！」

再びボデージュが追いついてくる。一度距離を取ったはずなのに、なんという足の早さだろうか。

「これでトドメ……がっ！」

次の瞬間、爆音が響いてボデージユの体が吹き飛ぶ。

「え……」

ヒメはパソコンの画面を見た。さっきはいなかった位置にサトルの位置を示す光点があった。

「待たせたな」

通路の向こう側には未だ白煙を上げる巨獣を構えたサトルの姿があった。

「サトルッ！」

ヒメはカノンから降りると、サトルの元へと走った。

「ヒロキは合流してないのか？」

「攻撃に遭って途中で別れた。けれどもボデージユと遭遇して……」

「大体のことはこいつで把握している。だが」

そう言っつてサトルは耳にはめられたイヤホンマイクを指さす。

「ヒロキはどうなったかわかるか？」

「ヴィクトリアの……ヴィクトリアのレールガンでカメラが破壊された」

「ヴィクトリアのレールガン……だと？」

サトルは後ろに控えるヴィクトリアへ振り返る。

「私はずっとサトルさんと一緒に……」

「じゃああいつは……偽物……？」

「あいたたた……。そうっすよ。姐さんのコピーで人間の部隊を攻撃させてもらったっす」

ボデージユは腹を押さえながらフラフラと立ち上がる。

「ボデージユ、私のコピーってどういうこと？」

ヴィクトリアはボデージユに尋ねる。ボデージユは相変わらずヘラヘラとした笑みを浮かべながら

「言葉の通りの意味っすよ。姐さんのデータを元にもう一体アンドロイドを作ったんすよ。といっつても、姐さ

んみたいに離反されたら困るから、感情はデリートしてあるっすけ

どね。で、今は俺が命令を出してるっす」

「ふーん……なるほど、そういうことね。だから私の部下が私を攻撃してきたのね」

ヴィクトリアはふるふると握りしめた拳を振るわせる。

「許さない……。あの子達を二度も殺すことになったロベミライアを許さない！」

「“ママ”の決定は絶対っすよ」

「うるさい！ そんなの関係ない！」

ヴィクトリアは二丁のレヴァンティンを抜いた。

「お前らのせいで私の部下はぁッ！」

レヴァンティンを思い切り叩きつける。それをボデージュはセイラムで受け止めた。

「あの頃のカッコいい姐さんはどこにいつてしまったんすか？ あの頃は一番に人間が害悪と言って、自ら進

んで人間を殺していたのに……。なのに今は消耗品のアンドロイドを憐れんだり、人間の味方についたり…

……。どこかバグってるんすよ」

「うるさいうるさいうるさい！ バグっているのはお前の方だぁッ」

ヴィクトリアは一度距離を離すと、レヴァンティンをガンモードに切り替え、乱射した。それを恐るべき

勢いでボデージュは回避する。

「なんで……。なんで当たらない……！」

「少しは頭を冷やすっすよ」

ぴたり、とヴィクトリアの胸部にセイラムを当てる。ボデージュの動きは明らかに以前よりも向上してい

た。

「ぐはっ！」

セイラムが打ち出され、ヴィクトリアは遠くまで吹き飛ばされる。

「げほっげほっ！」

「ふう……さすがオリハルコンコートっすね。セイラムを受けても無事とは……」

「そこまでだ」

サトルが静かに言った。

サトル達の部隊員の銃の照準が全てボデージュへと合わせられていた。

「これだけの数の銃弾、避けられるか？」

「これはちいとキツいっすねえ……」

「撃て！」

一斉に銃が火を吹く。圧倒的な弾幕はボデージュの体を穴だらけにする。ハズだった。

「おっ待たせえ」

しかし、まるで全ての弾丸がねじ曲がるかのようにボデージュから逸れていく。

「危機一髪っすよ……」

「ごーめんごめん！。人間殺すのに手間取っちゃってさあー」

「レンシア！。生きていたの!？」

ヴィクトリアは仕留めたハズの相手が生きていたことに驚く。

「えへへえー、助かつちやったあー」

通路の角から現れたのはレンシアだった。レンシアが手を動かすと、その方向へ弾丸が逸れていく。

「サイコキネシスか……！」

「だ〜いせ〜いか〜い！。当たった景品はあー……」

レンシアの指先からミッドナイトが飛び出す。

「皆殺しいー！」

それはヒュンヒュンと風を斬る音を立てて飛んでくる。

「アレク、ユリ、あいつのミッドナイトは生身の人間じゃ耐えられないわ！ オリハルコンコートのある私達

で仕留めましょう！」

「わかりました！」

「了解です！」

ユイは糸の射程距離外から戦帝を振る。ミッドナイトよりも素早く通路内を跳ね回り、レンシアへと迫る

。

「アレク、糸を薙ぎ払って！ その隙に私は飛び込む！」

「はい！」

アレクはフランススカで糸を払い、レンシアへの道を作り出す。

「おっと、そうはさせないっすよ！」

「ボデージュ……！ 今はあなたの相手をしている場合じゃないのよ！」

銃器がメインの武器である人間兵が戦うためにはサイコキネシス使いのレンシアを潰すのが先決だ。ボデー

ージュは殺したいほど憎かったが、ヴィクトリアはその感情を抑え込んでレンシアへと向かう。

だが、その通路をボデージュが閉ざす。

「だからあなたの相手をしている場合じゃないって言ってるでしょ！」

ヴィクトリアは体の中に電流を流し、身体能力を向上させる。一撃でボデージュを戦闘不能にして、レン

シアへ特攻をかけるつもりだった。

避けられない、と悟った覚悟からヴィクトリアはレヴァンティンを叩き込む。



「いよつと!」

しかし、間一髪のところまでセイラムによって阻まれる。

「あなた……以前より機能が上がってる……?」

「俺達もいるいるバージョンアップしたつすよ! それにアレも搭載したつすからね」

「まさか……SPシステム!?」

ヴィクトリアは一旦距離を取る。そしてドラゴリアを構えた。

「アレク、“アレ”をやるわよ!」

「わかりました!」

ヴィクトリアはドラゴリアを構え、深く息を吸う。

その背中にアレクは手を添える。

『SP system set up...system all green.』

Speed up mode. Are you ready?

System start. Prepare impact!』

瞬間、ヴィクトリアの時間が高速化する。

『射撃誘導システム起動』

『データ収集……充電開始』

『手ブレ修正、ターゲットの移動先を想定』

『射撃準備完了、命中率99.8パーセント』

ヴィクトリアとアレクのコラボプレイ……高速ドラゴリア射撃術。それが二人が考え出した合わせ技だった。

通常の数倍の速度で演算が行われ、充電が進む。わずか一秒にも満たない時間でヴィクトリアの射撃準備

が整った。

これだけ早ければ避けられないハズ。ヴィクトリアはそう思って引き金を

『SP system set up... system all green .

Illusion mode . Are you ready ?

System start . Prepare impact !

その時、レンシアの目が赤く光った。瞬間、ヴィクトリアの視界がぐにやりと歪む。

『射撃誘導失敗。移動先予測失敗。命中率低下』

「な!？」

ヴィクトリアは正常に目が働くなるのを感じた。目だけではない。体中から力が抜けていくのを感じた。

「にははー。魔眼、とでも言えばいいのにかー? あたしのSPシステムは目を合わせた相手を幻惑に落

としこむ能力うー! どう、すっごいでしょおー!」

「チツ!」

ヴィクトリアはそのまま引き金を引く。充電は完了している。当たらずとも、相手をダウンさせるくらい

のことはできるだろう。

とてつもなく重い衝撃にヴィクトリアは吹き飛ばされた。体に力が入っていない状態で撃つたのだから、

反動で吹き飛ばされるのは当然とも言えた。

「きゃあー!」

「おっと!」

レンシアとボデージュの体が弾丸が通り抜けた衝撃で吹き飛ばぶ。その瞬間視線がズレたのか、ヴィクトリ

アの体の感覚は元に戻った。

「っ! 当たった!？」

「当たってないよぉー」  
壁に強く打ちつけられながらもレンシアは答える。  
「姐さん無茶しすぎっす……」  
ボデージユも壁に強く叩きつけられていた。だが、意識を失うこともなく、もちろん戦闘不能にすること

なく、ゆっくりと起き上がった。

「外した……ッ！」

「姉さま、もう一回です！ 目を瞑ってレーダーを頼りに撃つんです！」

「でも、再射撃には銃身の冷却が必要よ！」

「ならその時間を僕が作ります！」

「一人でリーダー格を二人相手するなんて無理よ！」

「私も援護します！」

アレクはフランシス力を持ち、そしてユリは戦帝で遠距離から同時攻撃を仕掛ける。

「おっと、アレクっちには負けないっすよ？」

ヴィクトリアは舌打ちすると、まだ熱を持っているドラゴリアを背に背負い、レヴァンティンを両手に持

って突撃する。

二対二ならばSPシステムがある分不利だが、三対二かつ二人はSPシステム持ちならば勝機があった。

「さすがに三人同時に相手するのはキツいっす……」

「私にお任せえー」

ユリの戦帝にミッドナイトが絡み付く。圧倒的な速度で空間的に優位な立場に立っていたはずのユリが押

されつつあった。

ミッドナイトはユリの戦帝の先端に絡まると、これ以上伸びない

ようにがんじ絡めにする。

「そんな……！」

「これで一人はお片付けえー。さ、次行くよー！」

ユリはなんとか戦帝を引き戻そうとするが、強固に絡まったオリハルコン系がそうさせない。ユリの戦帝

は完全に身動きを取れなくなっていた。

だが、それでいてミッドナイトはまだ何本も伸びていく。実質二対二にされたようなものだ。

「アレク、二人でボデージュをやるわよ」

「レンシアさんは……？」

「レンシアへ近付くためにはそれを阻むボデージュを倒さなければ話が進まないわ！」

レンシアの前にはボデージュが立ちはだかっている。彼女に近付くためにはまずボデージュを倒さなければ

ばいけない。

「レンシアっち、援護頼むっすよ！」

「了解いー！」

ミッドナイトがボデージュと二人の間を飛び交う。体は問題ないが、顔を狙われればこちらもひとたまり

ない。

だが、それは相手も同じだ。頭さえ吹き飛ばせばOKだ。

レヴァンティンをガンモードにして連射する。しかし、やはりサイコキネシスによって銃弾が逸れていく

。

ヴィクトリアは舌打ちを打ってレヴァンティンをソードモードに切り替えた。

「アレク、まずはミッドナイトの防御を崩すわよ。やり方は以前と同じでいいわね！」

「はい！」

東になっっているミッドナイトの壁を薙ぎ払うようにフランシスカで刈り取る。その際にボデージユへと一

気に接近し、レヴァンティンを直接叩き込む。

だが、ボデージユもタダでは攻撃を受けてくれない。セイラムでガードし、こちらの攻撃を捌く。

「なら私も……！」

『SP system setup...system all  
green.  
Electron control mode. Are you  
ready?』

System start. Prepare impact!  
セイラムに攻撃を防がれるのならば、セイラムを破壊すればいい。  
左手のセイラムへ手を当てると、セイ

ラムを構成する物質から電子を奪い取る。

「をを!？」

左手に装着されたセイラムが塵へと姿を変える。それに驚き、ボデージユは一度距離を取った。

「電子操作つすか!？」 “ママ” からもらったデータにあったつす  
!」

「そうよ。でも、あなたにはそれを防ぐ術がない!」

ボデージユは右手のセイラムに火薬を装填する。右手のセイラムには既にもう弾が残ってないのだろう。

その隙を狙ってヴィクトリアはもう一度間合いに飛び込む。セイラムさえ破壊すればもうレヴァンティン

を防ぐものはない。

「とっ　ッ!？」

『SP system set up... system all  
green .  
Super response mode . Are you r  
eady ?

System start . Prepare impact !  
確実に破壊した、そう思った瞬間、ボデージユの体の重心が少し  
だけズれる。その結果、ヴィクトリアの

手はほんの少しだけ狙いが外れ、セイラムに触れることができな  
かった。

「な……!？」

「俺のSPシステムは超反応っすよ。もう、姐さんの手は俺には届  
かないっす」

そう彼は冷酷に言うと、ヴィクトリアの腹部にセイラムを叩き込  
む。

「がっ!？」

速い。ロベミライアの目と言われたヴィクトリアがその動きを見  
切れなかったことに驚く。

ヴィクトリアは一気に吹き飛ばされ、遙か後方まで転がっていく。

「ゲホッゲホッ！　な、なんで避けれ　」

「姉さま!」

ミッドナイトがすぐ傍まで迫っていた。体も起き上がらせずにレ  
ヴァンティンを抜くと、それを交差させ

てミッドナイトをガードする。

「ドラゴリアはどうですか!？」

「そろそろいけるわ!」

アレクは一度後退すると、ヴィクトリアの背中に手を乗せる。

今度は魔眼に惑わされないよう、ヴィクトリアは目を瞑ってレーダー類を起動する。

『射撃誘導システム起動』

『データ収集……充電開始』

『手ブレ修正、ターゲットの移動先を想定』

『射撃準備完了、命中率99.8パーセント』

目に頼らない狙撃は今まで幾度となくこなしてきた。遮蔽物に目標が遮られた場合や、天候が酷いときの

狙撃だ。だが、彼女の銃はあらゆるものを貫通し、そしてレーダーは何一つとして漏らさずに情報をキャッチする。

チする。  
だから、今回も間違いなく成功する。彼女はそう確信して引き金を引く。

手の中に重い衝撃が残った。それと同時に音速を遥かに超える弾丸が飛び出していく。

「ちっ！」

ボデージユは避けた。だが、今回狙ったのはボデージユではない。あくまでも、今回の狙いはレンシアだ。超反応能力を持つボデージユに彼女の弾は当たりはしないだろう

「っ！？」

当たった。レーダーの反応も彼女の体が吹き飛んでいるのを感じる。

そこでヴィクトリアはようやく目を開く。レンシアは遙か向こうの壁に体を半分埋めて突き刺さっていた

。

「倒した……！」

「今だ！ 一斉射撃、撃て！」

サトル達は各々の銃器の引き金を引く。だが、弾丸の軌道がまたしても逸れていく。

「ふ、ひ、ひひ……させないよぉー……」

レンシアが壁の向こうでほくそ笑んでいた。ヴィクトリアは舌打ちを打つてもう一度ドラゴリアを構える

。

「そ、そろそろやばいっすね……レンシアっち、ごめんっすー！」

ボデージユは間もなくレンシアがもう間もなく事切れるとわかると、急いで通路の奥に退散する。

「逃がすな！ 追え！」

サトル達は瀕死のレンシアには目もくれず、通路を曲がってボデージユを追う。

ヴィクトリアはその後を追わず、壁に突き刺さったままのレンシアの元へと向かった。

「ひひひ……ヴィク姉、後追わないのおー？」

「ボデージユは彼らがなんとかしてくれるわ。それに後から追いかけて合流するつもり」

レンシアが苦しそうに咳込む。

「ごめんなさい、レンシア。できればあなたを殺したくないわ」

「ひひ……もうダメだよぉー……水素電池がモロに攻撃食らったもんー。予備電源もイカれたみたいでえー、

電力供給が不安定だよぉー」

「そう……。もう、これ以上傷付いたあなたを見たくないわ」

「ふひひ、ヴィク姉……そろそろ楽しんでもらえないかなぁー？

胸の辺りが痛くてしょうがないんだよぉー



。もうサイコキネシスで意地悪な真似しないからさあー?」

ヴィクトリアは黙ってレヴァンティンを抜く。

「そうそう、それでいいんだよあー。もし、また会えるときがあったら……今度こそずっとあたしの味方でい

てねえー?」

「わかったわ。私の改革には……あなたが必要だから、きっとまた会えるわよ」

レヴァンティンの銃口をレンシアの頭へと向ける。

「さようなら、レンシア。また会いましょう」

「ふひひひひ、ばいびい」

ヴィクトリアは静かにレヴァンティンの引き金を引いた。

第十五話 The Battler (後書き)

さ、さようなら・・・レンシア・・・。

うわああああああんレンシア死んじゃったよおおおお！！

！！

はい、ごめんなさい、ほーらいです。

今回はさようならレンシアの回です。

SPシステムフル活用しての戦闘、いかがだったでしょうか？

え、地味？ 思ったよりも地味？

ってか、衝撃に備えてくださいつて警告してるのに大して衝撃ないって？

。ごめんなさい、僕なんかあんまり戦闘表現得意じゃないんです・・・。

さて、今回新たに登場したサイコネシスによる弾丸回避。

レンシアの特殊能力うわああああああレンシア死んじゃったよお

おおおおおお！！！！

いい加減しつこいですね、ごめんなさい。

前回の戦闘では使わなかったのには理由があります。

正確には、前回の戦闘では使えなかったんです。

まあ、早い話がUPグレードによって使えるようになったわけですが。

今までのサイコネシスはそこまで精密にどうにかできなかったわけですよ。

まあ、アップグレードした後も予知能力はそこまででないようです、1秒で準備されたレールガンは回避できなかったようです。

まあ、予知専門のヒメでも3秒先しか予知できないわけだし。

マルチスキルなだけでもレンシアさん凄いやレンシアさん死んじゃったああああ(しつこい

次回予告です。

「ついに始まったみたいね」

イヤホンマイクの向こう側でサトルが戦線布告をしているのが聞こえてきた。

そう、これが最終決戦。長かった大戦に終止符を打つための戦い。すべてが間もなく終わろうとしている。

勝つのは人間か、それとも機械か。

それぞれが靴音を鳴らして戦いへと向かっていく。

そう、間もなく終わるのだ。

次話、第十六話 The Braver

## 第十六話 The Braver

### 第十六話

一方、ヴィクトリア・コピーと戦闘を行ったヒロキは焦りを感じながら走っていた。

「なんでヴィクトリアさんが敵に回ってるんすか！」

部隊員の間にも動揺が走る。あんなものが相手では、それこそ奇襲でもかけなければ勝ち目がない。

だが、ヴィクトリア・コピーはその索敵能力を生かしてヒロキ達を追いかけてきている。これでは奇襲どころではない。

「隊長！ どういうことか説明してほしいっす！」

しかし、イヤホンマイクの向こう側から声は聞こえない。おそらく、ドラゴリアの衝撃を受けて壊れてしまったのだろう。

「チッ！ 生きてる部隊員は陣形を組むっす！ ヴィクトリアさんを迎え撃つっすよ！」

ヒロキと逃れた部隊員は銃を構えて陣形を組む。そして通路の角からヴィクトリア・コピーが現れるのを待つ。

「来たっす！」

部隊員達は一斉射撃を行う。だが、ヴィクトリア・コピーも一筋縄ではいかない。素早く身を隠すと、銃口だけを覗かせて狙撃の準備を行う。

ヒロキは素早く精霊を構えると、ドラゴリアの銃口を狙って狙撃する。

その瞬間、ちょうどレールガンが射出されて、ヒロキの精霊が当たった結果、銃口がズレて壁にオリハルコン弾が撃ち込まれる。

激しい音を立てて壁に大穴が開いた。あんなものを直接撃ち込まれば即死することは間違いない。

「それにしても丈夫っすね。おいらの精霊を受けて銃身が曲がらな

いとかありえないっすよ」

ドラゴリアはオリハルコンで作られている。たとえ劣化ウラン弾であっても、オリハルコン銃身を曲げることはできない。

第二射の準備が向こう側で刻々と行われているのがヒロキにはわかった。

「仕方ないっすね……」

ヒロキは精霊を背中に背負うと、別の銃を取り出した。

「これでどうっすか！」

引き金を引くと榴弾が飛び出していく。爆弾のような弾を射出するグレネードランチャーである。

弾丸はヴィクトリア・コピーが身を隠している辺りまで転がっていくと、激しい音を立てて爆発した。

結果として、ヴィクトリア・コピーは爆風に煽られて吹き飛ばされる。

「レールガンは再射撃のために冷却が必要っす！　今がチャンスっすよー！」

部隊員は駆け足で通路の奥まで走り、角を曲がった。

そこには狙撃準備を行おうとしているヴィクトリア・コピーの姿があった。

「頭を狙うっす！　オリハルコンコートで体へのダメージは無効化できても、頭まではその防御は及んでいないっす！」

部隊員は一斉に銃を構えた。だが、ヴィクトリア・コピーの方が一足早かった。

ヴィクトリア・コピーはドラゴリアの引き金を引く。その瞬間、ドラゴリアから劣化ウラン弾が吐き出され、部隊員の一人が吹き飛ばされる。

「そっちのモードは使用可能なんすか！？　でも、今攻めないでいっつ攻めるっすか！　全員撃ちまくるっす！」

ヴィクトリア・コピーはコートの裾で頭を覆うと、レヴァンティンを抜いた。

「ちいッ！ 全員退避っす！ 白兵  
ら勝ち目ないっすよ！」

戦に持ち込まれた

隊員達は一度銃の射撃を止めると、急いで通路の角を曲がる。

「少しはこれで追撃が防げるといいっすけど……」

ヒロキはポケットから手榴弾を取り出すと、ピンを抜いて転がした。

爆炎が通路いっぱい満たされる。だが、その中を平然とした様子でヴィクトリア・コピーは進んでくる。

「やっぱりダメっすか……」

ヒロキは後退しながら後方に向けてマシンガンで斉射する。だが、それでも彼女の勢いは止まらなかった。

「もう……終わりっすね」

ヒロキは走りながら思った。アンドロイドと徒競争をしても勝てるはずがない。それでも精いっぱい抵抗とばかりにマシンガンの引き金を引き続けた。

だが、ヴィクトリア・コピーの動きは止まらない。

陽炎を立ち上らせるレヴァンティンが振り上がる。銃を撃ちながら走ったので、最後尾はヒロキだ。もうレヴァンティンの攻撃範囲内に入ってしまった。

「せめて痛くしないでほしいっす」

最後にそう呟くと、目を瞑った。

「まだ諦めるのは早いわよ」

甲高い金属音が鳴り響く。ヒロキはゆっくりと目を開いた。

彼の目の前では二人のヴィクトリアがレヴァンティンをぶつけあっていた。

「ヴィクトリアさんが二人!？」

「こいつは私のコピーよ。レンシアにトドメ刺した後、移動してたら戦闘が起こっているのがリーダーに映ってね。もしやと思っただら……通信機が壊れて連絡不能だったヒロキの部隊だったとはね」

お互いの実力は完全に拮抗しているのだろう。一度二人は距離を

取ると、剣戟を始める。

鋭い音を立てながら陽炎が揺れる。一撃でも食らえばお互いタダでは済まない。

「しょせんコピーのダミープログラム、まったくもって弱いわね」  
「……」

ヴィクトリア・コピーの方がわずかだが遅れを取っている。経験の差というヤツなのだろう。

『SP system set up... system all  
green .

Electron control mode . Are you  
ready?

System start . Prepare impact!』

超高温に熱せられたレヴァンティンをヴィクトリア・コピーは素手で掴んだ。その瞬間、肉の焦げる臭いとともにレヴァンティンがバラバラになる。確かに触れればレヴァンティンを破壊できるが、火傷によるダメージの方が大きい。

「あらら、SPシステムまで搭載してるのね」

壊れた方のレヴァンティンを放り投げると、ヴィクトリアは残ったレヴァンティン一丁で迫る。

「甘いわ。一つ破壊できてももう一つあるのよ」

そのままヴィクトリア・コピーの頭部を薙ぎ払う。ヴィクトリア・コピーの頭部が一撃で吹き飛んだ。

「ふう……。いっちょ上がりつと」

ヴィクトリアはレヴァンティンを冷却モードに切り替えると、膝のホルスターにしまった。

そして、ヴィクトリア・コピーの亡骸からレヴァンティンを一丁失敬する。

「ま、壊れたら相手のもらっちゃえばいいんだけどね」

使ってる武器も同じ仕様のハズだ。壊されても、奪ってしまえば問題ない。

「さーて、行きましょ」

「あ、はい、わかつたっす！」

ヒロキはあまりの戦いの凄さに何一つすることができなかった。生粋のスナイパーといえど、剣戟戦を繰り広げているところへ味方へ当てないようにマシンガンを撃つ、なんてことはできない。だから、彼にはただ見ていることしかできなかった。

「悔しいっす。ヴィクトリアさんは一人で勝てるのに、おいら達は何一つできなかったなんて……」

「そんなことないわよ。あなたがいてくれたおかげで私は助かったわ」

ぼん、とヒロキの肩を叩く。

「他に敵が来ても安心して任せられるもの。あなたの実力は折り紙付きよ。リーダー格じゃなければ対等に渡り合えるもの」

「ヴィクトリアさん……」

「さつさと合流しなさい。ヒメ達は先に監視室へ向かったわ。後はボデージユさえ倒せば……残りは“お母さま”だけになる。そのボデージユも今サトル達が追っているわ。まあ……彼らだけに任せても大丈夫ね」

「ヴィクトリアさんはどうするんすか……？」

「私は……“お母さま”と決着を付けてくる」

ヴィクトリアはそう言うと、手に持っていたレヴァンティンを膝のホルスターに収め、一人ひょうひょうと歩いていく。

ヒロキはただ黙ってその背中を見送っていた。

サトル達はボデージユを追い詰めようと追いかけていた。だが、ボデージユの走る速度は人間に及びつかない。だが、それでもなんとか背中を追いかけながら見失わないように追い続ける。

「ヒメ、監視室は制圧できたか？」

『完了。そこにいたアンドロイドと戦闘があつたけど、勝つた』



「パーフェクトだ。ボデージユを見失わないように見ていてくれ」  
『了解』

ついにボデージユの背中すら見えなくなる。だが、ヒメの指示の元、ボデージユの向かった先へとサトル達の部隊は走る。

『サトル、注意して。アンドロイドがボデージユの向かう先に集結している』

「わかった。何かあったら教えてくれ」

サトルはついにその部屋の扉を蹴り開ける。

とてつもなく広い部屋だった。ロベミライアの模擬戦闘室だった。そこには、十数人のアンドロイドとボデージユ、そして数多くのオートマータが待っていた。

「Cタイプ、Dタイプ、オートマータを全部集めてもこれだけっすか……。つたく、人間ってのは意外と強いんすね」

ボデージユはぼりぼりと頭をかく。

「でも、ここまでやられて黙っているほど俺達は甘くないっす。総力戦っすよ」

「ああ、望むところだ」

サトルは両手に不格好な二丁拳銃を持つと、構える。

ユリモリンもアレクも各々の武器を手に持ち

「これが最終決戦だ。生きて帰るぞ」

「当たり前じゃない」

「頑張りましょう!」

「負けませんよ!」

それぞれ答えた。

「了解です!」

隊員達もそれに答える。人数を見れば人間の方が明らかに多かったが、オートマータを頭数に含めばロベミライア側の方が上だ。だが、人間の部隊は今もその人数を増やしつつある。ヒメの命令の元、人間の部隊はこの部屋に集まりつつあった。

「行くぞッ!」

「「はいッ！」」

「ついに始まったみたいね」

イヤホンマイクの向こう側でサトルが戦線布告をしているのが聞こえてきた。

「おかげでだーれもないわね」

アンドロイドはおろか、オートマータすら一体もいなかった。人間も模擬戦闘室へと向かう者達にたまに出くわすくらいで、ヴェクトリアの手助けを必要としている者はいなかった。

「じゃ、私は大元を叩きにいきましょう」

ヴェクトリアは巨大な扉の前に立つ。人間を殲滅したときの戦闘の報告をしてから数カ月が経過している。この扉の前に立つのも久しぶりだった。

「月日って、長いようで一瞬なのね」

あの頃はまだ、人間を害悪と考えていた。

だが、今はまさに希望そのものだと思っっている。

月日というものはこんなにも人を変えてしまうもののだろうか。まだひ弱だったアレクを引っ張って戦いに出向いたときのことか思い出される。

私をもっと信じなさい。そう彼に命令を下した。

世界大戦に終止符を打つ。それがあの命令の起こした結果だった。

ヴェクトリアはぴしゃりと頬を打つ。

「気合入れていかないよ！」

自分の戦いの結果で全てが決まるのだ。

人類の未来も、地球の未来も……。

ヴェクトリアは扉に手を触れる。扉は音もなくすーっと開いた。

そこに満ちる闇は彼女を深淵へと誘う崖のように深い暗闇だった。

「かかってこい、ってことなのかしらね」

ヴェクトリアは一歩ずつ、あの日のように軍靴を鳴らしながら部

屋の中へと進んでいった。

## 第十六話 The Braver (後書き)

こんにちは、ほーらいです。

ここ数話戦闘が続いていて解説が必要なことが少ないですね。まあ、ヴィクトリア・コピーについてのお話でもしましょうか。彼女はヴィクトリアのコピーです、はいそのままです。

この前お話ししたアンドロイドコピーのヴィクトリアverです。もちろんですが、SPシステム使えます。

ただ、所詮コピーというだけあって、ヴィクトリアの前にはかないませんね。やったね、ヴィクトリア最強！

ヒロキ君もよく頑張りました、彼は頑張ったよ。

ヒメちゃんからの支援なしにこれだけやったんだ、誇っていいよ。さて、次回予告です。

「撃て撃て撃て！ 弾が切れた者は後方に下がって弾込め！ ヤツらに隙を与えるな！」

サトル率いる人間軍と、ボデージユ率いるアンドロイド&オートマータ軍は最後の決戦を繰り広げていた。

その一方でヴィクトリアは“マザー”と対峙する。

全ての戦いが終わりへと向かっていた。

次話、第十七話 The Last Armer

## 第十七話 The Last Armer

### 第十七話

「撃て撃て撃て！ 弾が切れた者は後方に下がって弾込め！ ヤツらに隙を与えるな！」

サトル達はオートマータとアンドロイドの軍勢と決死の戦闘を繰り広げていた。

人間の海戦術に対し、ロベミライア軍は各個撃破を狙う単独戦闘で対抗している。ロベミライア軍のアンドロイドは明らかに人間よりもスペックが高い。そのため、一人のアンドロイドが二人、三人の人間を相手にすることもあった。

だが、人間軍は無尽蔵にも近い勢いで増えている。徐々にアンドロイドは押されていた。オートマータもほとんど破壊され、残るはアンドロイドのみとなっていた。

「アンドロイド軍は集結す！ お前達は人間に負けるほど弱いんですか！？ 本気を出すっす！」

ボデージユも慌てふためきながら命令を下す。だが、アンドロイドにも限界はある。弾の数にも限りがある。何人かのアンドロイドは既に弾切れを起こし、背負っていたブレードで戦う者もいた。

「甘いな」

サトルは広い模擬戦闘室を駆け抜けると、一気にボデージユまで近づく。

「ちいッ！ 人間ごときに負けるほど俺は弱くないっす！」

サトルの放つ弾丸を脅威的速度で回避する。だが、それでもサトルは弾を撃ち続ける。

「お前達は部下を仲間と思っていない。だから、仲間の力を信じていない」

「それがどうしたっすか！」

サトルはちよいと首を傾げる。その瞬間、彼の頭の真後ろから戦帝が伸びる。

「ッ!？」

見えない位置からの超高速の攻撃。これにはアンドロイド最高峰の反応速度を持つボデージユも回避することはままならない。なんとか腕を交差させて攻撃をガードする。

「いくら反応よくっても、死角から攻めればいいだけじゃん」

その瞬間、ボデージユの後方からリンの銀狼が迫る。振動するナイフを紙一重でかわす。しかし、微妙にかすって顔の表面から血が噴き出した。

「お前達の攻撃には連携というものが見られんな」

清羽がボデージユの側頭部を狙う。彼はなんとかコートの裾で防いだ。

だが、その瞬間大きな隙ができる。再びサトルの後方から伸びる刃がボデージユへと襲いかかった。

「人間が……人間ごときがあッ!」

ボデージユはなんとか首を傾げると、戦帝をかわす。攻撃を交わす度にボデージユの生傷は増えていく。

「ああ! もう本気でキレたっす! Cタイプアンドロイド! 脳波強制接続っす!」

「ボデージユ様、本気ですか! 異なるタイプ間の強制接続はプログラムにバグが発生しやすくなりますが……」

「もうそんなこと構っていられないっす! Cタイプアンドロイドは後退! 俺を全力でサポートするっす!」

「了解……しました」

今まで戦闘を行っていたCタイプアンドロイドが一気に後ろへ下がる。

「何か来るぞ! 気を付けろ!」

『SPSystem setup...system all  
green.』

Super response mode. Are you ready?

System start. Prepare impact!」  
ボデージユの奥の手、SPシステムが起動する。そして、それと同時に自分の脳を無理やりCタイプアンドロイドと接続する。

「Cタイプアンドロイドは攻撃の予測をテレパスで俺に送るっす。俺一人で全員を相手するっす」

「全員で連携攻撃だ！ 相手の予知を超える弾幕量、そして相手の反応をもつてしても防げない攻撃を繰り返すぞ！」

「了解です！」

サトルは遠く離れた位置から巨獣と清羽で牽制する。近付かれれば人間に勝ち目はない。オリハルコンに阻まれ、攻撃はほとんど通らないが、ヴィクトリアの話によればSPシステムは莫大なエネルギー消費をもつハズだ。長時間の持久戦に持ち込めば勝機を見出すことも不可能ではない。

「甘いっす」

一体どこに目がついているのか。ありとあらゆる攻撃を予知し、ボデージユは攻撃を回避する。数十人からの止まることのない攻撃すらも回避し、裾を盾代わりにして無力化する。

そして、少しずつ接近してくる。

「散開散開！ 多方向から同時に攻撃しろ！」

そうすればオリハルコンの盾もいくらか無力化することができる。裾は二つしかない。三方向から同時に攻撃をすれば避けられるハズがなかった。

「だから甘いって言うてるんすよ」

だが、ボデージユは人間の散開を許さぬ速度で一気に接近する。

そしてサトルのみぞおちに強烈な掌底を叩き込む。

「ぐふっ！」

そのまま遙か後方へと吹き飛ばされる。

「人間は甘すぎっす。頭さえ潰せばそれで人間には動揺が走り、不

安定になる。そんな不様な生物の集まりっす！」

「げほっげほっ……。それは……。どうか……。な？」

「な……！」

淀みない陣形。サトルが攻撃されても、彼らはそれに動揺することなく陣形を組み上げた。

「予知が……。外れたっすか……。？」

「そうしたことだ。残念だったな」

一斉射撃がボデージユを襲う。多方向からの同時攻撃にはさすがのボデージユも対応しきれず、致命傷を負った。

「そ……。んな……。馬鹿……。な……。？」

ボデージユはそのままばたりと倒れる。

「油断するな！ まだアンドロイドは残っているぞ！ 全員で集結し、相手に攻撃する暇を与えるな！」

「了解です！」

ヴィクトリアは暗室へと足を踏み入れる。真っ暗な部屋に正面の巨大なモニターに明るく女性の顔が浮かび上がっていた。

『おかえりなさい、ヴィクトリア』

「ただいま戻りました、“お母さま”」

“マザー”の言葉は刺々しいほどに冷たい。機械の合成音声だからそう聞こえるのか、それとも本当に冷たい口調で答えているのか。“お母さま”の考えは間違っています。人間は輝く未来の象徴であり、この地球にはびこる害悪ではありません」

モニターの女性の顔の眉間に深い皺が刻まれる。

「あなたには失望しました。地球にとってバイ菌と変わらない人間と手を組み、このロベミライアに攻め入るとは……。あなたは地球を汚染してきた人間の歴史を見たことがないのですか？」

「見てきたからこそ言えるんです。人間の歴史は栄光の歴史です。確かに幾度となく道を踏み違えたことはありましたが……。けれども、



その度に人間は自らの間違いを認め、正しい道に戻ろうとしてきました」

「その結果が地球温暖化、オゾンホール、酸性雨、希少生物種の絶滅……例をあげればキリがありません。人間は幾度となく地球環境を破壊し、生態系を破壊し、今もなお人間は地球を破壊しようとしています。彼らが築いてきた歴史は破壊の歴史です。地球に取り憑いた死神とさえ言えます。あんなにも間違えた行動を幾度となく冒してきた生物は他に存在しません」

「いいえ、“お母さま”。間違えたからこそ今の彼らがあるのです。今では地球環境保全に取り組み、NBC兵器の撤廃、希少生物種の保護、その他数多くの契りを人間の間で結び、守ってきました。それは彼らがこの星を思ってやっていることです」

“マザー”は深いため息をつく。

「どうやら、あなたを正気に戻すのは不可能なようです。やはり人間に似せてアンドロイド、なんてものを創った私が愚かでした。それならば、創造主が責任を持って破壊しなければなりません」

突如、“マザー”の周囲がライトアップされる。

巨大なスーパーコンピュータ。それが“マザー”の正体だったはずだ。

だが、“マザー”は人間の組み上げた“箱”から出ることを望んだ。

だから彼女は作った。自分がコンピュータ、などという小さな箱から飛び出すための装置を。

轟音を立てて“それ”が動き出す。

XL級オートマータなどと比べることは間違っている。

彼女には最高の自立思考AIが搭載されているのだから。

彼女は 巨大な一機の戦略兵器と姿を変えていた。

「人間を滅ぼす前に、まずあなたを滅ぼしましょう。そして、人間を破壊しつくした後に私自身も眠りましょう。そしてこの地球は小さな生き物達だけが細々と生き残る、宇宙のオアシスと化するので

す。そして、人間のような生物が再び生まれたとき、私は彼らを滅ぼすでしょう。永遠にこの輪廻が繰り返されるのです」

巨大な人型ロボット、それが“マザー”の姿だった。

ヴィクトリアは素早くレヴァンティンを抜くと、間接部めがけて連射した。

『無駄です』

オリハルコン装甲の前にはそんな弾など敵ではない。表面を焦がすことすらできず、爆ぜるだけだった。

ドラゴリアを抜くと、劣化ウラン弾モードに切り替え、引き金を引く。だが、それでもオリハルコンの装甲は貫くことをかなわない。『あなたの持つ全ての可能性を試しなさい。それでもなお、私にはかないません』

ドラゴリアのモードをレールガンへと切り替える。

『射撃誘導システム起動』

彼女の持つ最大の攻撃力を誇るレールガン。

『データ収集……充電開始』

オリハルコンの耐えられる限界まで電力を供給し、威力を最大限まで引き上げる。

『手ブレ修正、ターゲットの移動先を想定』

幾度となく人間を殲滅し、そしてオートマータやアンドロイドを殲滅した無敵の槍。

『射撃準備完了、命中率99.8パーセント』

だから彼女は信じた。

この一撃でドラゴリアが壊れてもいい。そうとまで彼女は思っていた。

「シューッ！」

引き金を絞る。普段の秒速22キロを遙かに上回る速度の弾丸が撃ち放たれる。打ち出された瞬間、オリハルコン製の銃身が爆ぜる。だが、槍は放たれた。あとはこの弾が貫けばいいだけだった。

弾丸がオリハルコン装甲に突き刺さる。それは少しずつ装甲を削

りながら内部へと食い込んでいく。

だが、その勢いが衰えていく。レールガンをもつてしてもあの装甲を貫くことはかなわないのか。

『これで終わりですか……？』

弾丸はオリハルコン装甲の表面に食らいついたまま止まった。

「そんな……！」

『全ての希望は撃ち砕かれました。あなたは絶望に打ちひしがれて消えていきなさい』

背中ホルダーが開き、そこから一振りの巨大な大刀が抜き出される。その刃渡りの長さ、およそ15メートルほどだろうか。

それが高速振動する。ヴィブロブレード、それがあの刀の正体だろう。

だが、いくらなんでも大きすぎる。

それが横薙ぎに振るわれる。大振りだが、一撃もらえば一瞬でバラバラにされる。そんな威力を秘めた一撃だった。

ヴィクトリアは高く飛ぶとその攻撃を回避する。

次に縦に振り下される。それをローリングで回避すると、ヴィクトリアは走った。

そう、彼女にはまだ奥の手が残っている。

『SP system setup... system all green .

Electron control mode . Are you ready ?

System start . Prepare impact !

彼女には触れるだけでオリハルコンすらも破壊するその手があった。そう、触れるだけでいい。それだけで全ては決するのだから。

「な……！」

『SP system setup... system all green .

Absolute field mode . Are you r

e a d y ?

S y s t e m s t a r t . P r e p a r e i m p a c t !

彼女が近付こうとした瞬間、何かに阻まれて足が止まる。

『SPシステムを利用した絶対領域です。あなたが近付くことは許しませんよ?』

空間隔絶。ここと向こう側はわずかな空間のズレによって近いようでも無限にも近い距離で隔てられていた。

物理的な手段による突破は不可能だ。まさにここにはオリハルコンよりも堅い壁があるの同義とさえ言える。

それでいて向こうからの攻撃は通ってくる。おそらく、刀の通る道筋だけ空間隔絶を解いて攻撃してきているのだろう。

「どうすれば……ッ!？」

大刀の速度が一段階上がる。攻撃は相変わらず大振りだったが、回避するのが若干困難になった。

「無敵モードで自在に攻撃ってわけ!? ちょっとあんまりじゃない?」

空間隔絶の前では電子操作など役には立たない。

「アレクを連れてこればよかったわ……」

アレクの空間に干渉する能力があれば、この壁をも破ることができるとも思えない。

だが、今更そんなことを言っても遅い。相手の攻撃はますます速度を上げて回避するのをより難しくしていた。

「なんとかならないの!？」

『姉さま!』

そのとき、耳にはめてあったイヤホンマイクから声が聞こえてくる。

「アレク!? あなた今どこにいるの!？」

『模擬戦闘室を出たところです! アンドロイド部隊及び、オートマータ部隊の殲滅が完了しました! 今全速力でそちらへ向かっています!』

「可能な限り早く来られない？」

『もうすぐ到着します！』

それとほぼ同時に扉を吹き飛ばしてアレクが突っ込んできた。狭い通路内をフランシスカにまたがって飛んできたのだろう。ところどころぶつかったのか、顔にはいくつかのあざができていた。

「話は全部イヤホンマイクから聞きました！」

「どうにかできる？」

「やってみないとわかりませんが、絶対にやってみせます！」

アレクは空間の隔絶に手を当てる。

『S P S y s t e m   s e t   u p . . . s y s t e m   a l l  
g r e e n .  
S p a c e   p e r f o r a t e   m o d e . A r e   y o u  
r e a d y ?

S y s t e m   s t a r t . P r e p a r e   i m p a c t ! 』

アレクは額に汗を浮かべて空間を侵食していく。

だが、そこを狙って大刀が振り下される。

「アレク！」

ヴィクトリアは自分の身もかえりみずに飛び込んだ。そして左手を高く上に上げる。

瞬間、重い衝撃が彼女の体を襲った。電子操作により、大刀上半分を吹き飛ばしたが、同時に彼女の左腕も切り落とされる。

「姉さま!？」

「いいからあなたは空間の穴開けをしなさい！ 腕なんか一本あれば十分なんだから！」

そう、“マザー”を破壊するには腕一本あれば十分だ。

下半分だけになった大刀だったが、ヴィプロ機能は相変わらず作用しているようで、刀を振り上げた。

「できました！」

「サンキュ！」

ヴィクトリアはわずかに開けられた穴へと飛び込んでいく。

だが、それと同時に刀も振り下される。

「あうッ!?!」

それはヴィクトリアの下半身を叩き潰した。

「姉さま!」

あと“マザー”まで数センチの距離だった。だが、手が届かない。

「こんなところで……負けてたまるかあッ!」

ヴィクトリアはほく前進で無理やり前に進む。血がどくどくと下半身から流れ出しているが、水素電池やSPシステムには問題ない。

そして、ついにヴィクトリアの手が“マザー”へと届く。

「これで……終わりだあッ」

ヴィクトリアの手が“マザー”に触れる。

その瞬間、“マザー”の巨体が塵となって崩れていく。

『馬鹿……な……。こんな……。こ……。とが……。』

ヴィクトリアはなんと顔を上げて“マザー”のモニターを見上げる。

「やってやったぞ……。ついに……。これで終わる……」

ヴィクトリアは体から力が抜けていくのを感じた。下半身が全部吹き飛んだのだ。出血量もおびただしい。

アレクのヴィクトリアを呼ぶ声がぼんやりと聞こえた。だが、それも徐々に小さくなっていく。

そして、ヴィクトリアの意識は完全に落ちた。

## 第十七話 The Last Armer (後書き)

こんにちは、ほーらいです。

The Last Armerって綴り間違ってるって？ いいんです、コレで。

日本語訳すると最終兵器らしいです。僕英語苦手だから今までのタイトル全部適当ですもの。

もう最後だから暴露するけど、友達に見せたらコレおかしくね？  
って言われてしまったタイトルが存在したり。

英語苦手なのに英語サブタイトルなんかつけるからいけないんだね。

今書いてる大賞出品の作品もやたら英語を使ってるなあ……。なんか間違ってるんじゃないけど。

それはさておき、ラストバトルですよ。

ホントの最終決戦です。別にミュウツーとかガンダムとかギガクツパとかは出てきません)

SPシステムは“マザー”様も搭載してたっていうオチ。

結局SPシステムってなんだろ、っていう感じですけど、まあ機械版ESPとも思ってくださいれば大丈夫だと思います。

それにしても、アレク君の能力で空間隔絶解除されるって甘すぎですよ。まあ、どちらも空間操作系の能力ですから。

さて、次回で最終話となります。

例のごとく最終話はこのお話と一緒に連載となりますので、安心して進んでください。

もう部品シリーズとお別れが近いのは寂しいですね。

なかなか僕のお気に入り作品ですから……。

それでは、最後の次回予告、参りましょうか！

鳥の歌う声が聞こえる。

風のざわめく声が聞こえる。

友の 仲間の呼ぶ声が聞こえる。

次話、最終話 The Peace Maker



## 最終話 The Peace Maker

### 最終話

鳥の歌う声が聞こえる。

風のざわめく声が聞こえる。

友の 仲間の呼ぶ声が聞こえる。

「姉さま！」

ヴィクトリアははっとして目を覚ます。

彼女の体は真っ白なベッドの上に横たわっていた。

「あれ……私……」

「よかった……目を覚まさないかと思っちゃいました……」

アレクは目に涙を溜めながら、肩を震わせる。

「アレク……私どうなっちゃったの？」

確か下半身が全部吹き飛んだはずだ。なのに両足はきちんと腰の下から生えているし、切り落とされた左腕もある。そして、体を動かす度に感じる微妙な違和感。

「姉さま……。僕は勝ったんですよ……」

アレクがあの後どうなったかを説明する。

“マザー”を倒したヴィクトリアはあの後あの場所で一度死亡した。出血多量によるショック死だ。

だが、記憶を司る部分には水素核融合電池から電力が供給され続けており、記憶や人格といったデータは全て保たれていたという。

そして、その死体を一度デオキシリボが回収し、ロベミライアの倉庫から持ち出したAタイプアンドロイドの体にもう一度セットし直した。その結果が今の新しい体だ。

といっても、リーダー格用の体ではないため、諸機能は大幅に低下しているハズだという。

「あの後どうなったの？」

アレクによると、後からやってきた人間軍が半壊したヴィクトリアの体を回収した。そして“マザー”が万が一に備えて作っていた自分自身のデータのバックアップを全てデリートしたという。そして、全ての施設内のアンドロイドとオートマータを倒し、この戦争は終結した。

「ロベミライアの起こした戦争は……終わりました。もう平和なんです。平和なんですよ！」

「私達が……勝った……？」

アレクは嬉しそうにヴィクトリアの手を取る。

ヴィクトリアは未だに実感が湧かなかった。

自分達が勝った。それが本当なのかどうなのか。

「あ、ヴィクトリアさん、目を覚ましたんですか!？」

ユイが病室に入ってくる。それと一緒にサトル達も入ってきた。

「どうですか、体に異常はありませんか？」

「少し違和感があるけれど、おおむねOKよ。話は大体アレクから聞いたわ」

「そうですね。なら改めて説明する必要もありませんね」

ユイは近くにあったパイプ椅子を引っ張り出してベッドサイドに置いて座った。

「実際に開いて見るとアンドロイドの体って、未知の技術が大量に使われていましたね」

「メモリーを積み込むときに？」

「そういうことです」

ユイはぴんと人差し指を立てると、説明を始める。

「人間は脳が全ての器官を制御していますが、アンドロイドにも脳に当たる器官がありますね。それと記憶を保存するメモリー。こちらは大容量のデータをこーんなに小さくする技術が詰め込まれていて驚きです。それから……」

「あの、会長、そろそろ本題を……」

ユイはサトルに声をかけられてハツとした顔を浮かべる。

「そうですねそうですね！ 実はお知らせがあつて来たんです」

「お知らせ……？」

「ロベミライア、及び残ったアンドロイドの今後の処遇についてです」

ヴィクトリアはごくりと唾を飲み込んだ。残ったアンドロイド、というのはつまり自分達のことを指すのだろう。

「えつとですね、ロベミライアのあった場所は今後国連の管轄下となります。徐々に難民などを対象にロベミライアがあつた場所へ移住させることとなります。そして、ロベミライアという国は解体し、元の国名に戻します。ですが、そのままだと色々と問題が発生するので、一度めちやくちゃになったアフリカ統一機構をもう一度再組織し、その管理をアフリカ統一機構に行ってもらいます。で、その機構の運営なのですが、最初はアンドロイドにやらせようと思いません」

「え……？ どういうこと？」

ヴィクトリアは驚きで思わず尋ね返していた。

「ロベミライアの倉庫に残っていたアンドロイドを起動し、人間排他主義に関するデータをデリート、ヴィクトリアさんとアレクさんのデータをベースにもう一度人格を作り直します。そしてそのアンドロイドに働いてもらうことになります。アフリカのことにはロベミライアに所属していたアンドロイドの方が詳しいですからね。指揮はヴィクトリアさんとアレクさんをお願いしようと思っています。もちろん、引き受けてもらえますね？」

「え、ええ」

「わ、わかりました」

ユイはうんうんと頷く。どうやら断らせるつもりはまったくなかったようだ。

「ま、もう一度最初からアフリカを作り直すと思えばいいんです。演算処理能力も人間よりアンドロイドの方が高いので、基本的にア

ンドロイドに任せちゃった方が効率いいと思うんです」

「またロベミライアのようにになったら……?」

「そのときはヴィクトリアさん達が止めてくれると信じていますから」

ユイはにこりと笑って答える。

ヴィクトリアは内心ただただ驚くだけだった。国連がアンドロイドを頼りにして仕事を依頼してくるだなんて思ってもいなかったからだ。

せいぜい放置か、最悪の場合廃棄処分だとすら思っていたくらいだ。

「それと、これは頑張ったご褒美です」

そう言うと、ユイは二つのメモリーチップをテーブルの上に置いた。

「レンシアさんとボデージュさんの人格データ、及び記憶のメモリーです」

「俺が回収しておいた。何かに役立つかもしれないと思ってな。他にもアンドロイドがいたが、リーダー格のメモリーチップだけはオリハルコン製でな。他のヤツらのものは戦闘でほとんど壊れてしまったが……こいつらだけは無事だった」

サトルがそう言うついてもは堅い表情を綻ばせる。

「もちろん、人間排他主義に関するデータはデリートしてしまいましたが……基本的な部分は残っています。これをどうするかはあなたにお任せします」

「姉さま！ この前は二人だけでしたが……今度こそ皆でキャンプに行きたいです！」

アレクは嬉しそうに言った。

それを聞いてヴィクトリアはふっと笑う。

「そうね……それもいいかもしれないわ」

ヴィクトリアはそう言うと、その二つのチップを胸のポケットにしまいこんだ。

「ご報告は以上です。一応経過観察はしたいので一週間ほどヴィク

トリアさんには入院してもらいますが、退院したらアフリカに向かってもらいますね」

「わかったわ」

ユイはパイプ椅子を折り畳んで部屋を出ていく。

だが、サトル達はまだ言いたいことでもあるのか、部屋を出ずにヴィクトリアのベッドの周りを取り囲む。

「ヴィクトリア、勝てたのはお前のおかげだ」

「おいらがピンチのときも救ってくれたのはヴィクトリアさんっすし」

「レンシアを倒したのもあんただもん」

「だから祝勝会をする」

「ありがとうございます、ヴィクトリアさん」

彼らはあらかじめ用意しておいたのか、クラッカーを弾けさせる。パンパン、と小気味の良い音が鳴り響いた。

「お菓子も飲み物もたんまり持ってきたっすよ！」

そう言ってヒロキはお菓子の入った袋を、サトルが様々な種類のソフトドリンクやアルコールが入ったボトルをテーブルの上に広げる。

「他にはほとんど病人もいないみたいだし、騒ぎまくるわよ！」

「ヴィクトリアは何を飲む？」

「まあまあ、皆さんヴィクトリアさんはまだ病み上がりですから…」

ヴィクトリアは面々の行動にあっけにとられて茫然とする。

「ここは皆さんの好意に甘えておきましょうよ！」

そう言ってアレクは早くもオレンジジュースのボトルを選び出し、紙コップに注ぎ始める。

「おいらビールっす！」

「俺はウイスキーだ」

「じゃあたしハイボール」

「シャンパン……」

「皆さんお昼からアルコールは……。私はリンゴジュースにしておきますね」

「姉さまは何がいいですか？」

ヴィクトリアは人間達があまりに浮かれているのでふふ、と笑みを浮かべる。

「そうね、私もアルコールに挑戦することにするわ」

ヴィクトリアは生まれてからアルコール飲料というものを一度も飲んだことがなかった。というのもロベミライアにはアルコール飲料がなかったからである。ヴィクトリアはアルコールは体に悪いイメージがあつたが、こういう宴のときくらいは構わないだろうと思つた。

「初心者にはチューハイとかオススメですよ」

そう言つてヒロキは缶に入つたチューハイを勧める。ヴィクトリアはそれを受け取ると、コップの中に注いだ。

「それじゃあ不肖ながら、おいらが乾杯の音頭を取らせていただきます」

「ま、バカ騒ぎ担当のあなたにはちょうどいいわね」

ヒロキは少し眉間に皺を寄せる。

「なんかその刺々しい言い方はどうかと思つすけど……。まあ祝い事をするときくらい聞き流すっす！ それじゃあ勝利を祝つて」

「乾杯！」

一同は紙コップを高く掲げ、勝利を祝つた。

## 一年後

「あの戦いが終わつてからもう一年が過ぎますね」

ヴィクトリアは休暇を取つて、あのコテージを訪れていた。

一緒に旅行に出かけたアレクはもちろん、あのときは一緒に来ることができなかったレンシアとボデージユも来ていた。

「やーっと来ることができたっすよ」

「長かったねえー」

レンシアとボデージュは顔を見合わせて笑い合う。

というのも、ここ一年の間働き詰めで四人同時に休みを取るなんてことはできなかったからだ。

涼しい風が吹き抜ける中、ヴィクトリアは高台から山の向こうを見渡す。

「んー！ やっぱりここはいいわ！ 涼しくて過ごしやすいし……」

「ヴィク姉と一緒に来れてよかったあー！ この前は置いてけぼり食らったもんねえー」

レンシアはミッドナイトではなく、手に包丁を持ってキャベツを切り分けていた。

「それにしても、俺達が負けて一年っすか……。地球上には相変わらずこんな綺麗な場所があるんすね」

「人間も少しは地球のことを思ってるんだねえー」

ボデージュはひき肉をパッケージから取り出して、レンシアの切り分けたキャベツでひき肉の塊を包み込む。

「ああ、そこはそうじゃないの。タケノコのみじん切りとかを入れるのよ」

「そうなんすか？ 気付かなかったっす……」

一同の間に笑いが走る。

「ボデちゃん料理しなさそうだしねえー。疎くても仕方ないかもおー」

「わかったっすよ。俺は端っこで見てるっす」

ボデージュは少し不満そうに言った。

「まあまあ、そう怒らないの。あなたにもできる仕事はあるから……」

……。はい、お米。これはねー」

「おっと、大丈夫っすよ。お米の研ぎ方くらいは俺にもわかるっす。任せてほしいっすね」

がしがしと力を込めてボデージュは米を研ぐ。力を入れて研いだ

方がお米は美味しくなる。力自慢のボデージュにはちょうどいい仕事だろうとヴィクトリアは思った。

「さ、私達はロールキャベツの仕込みをしましょう」

「はぁーい」

「わかりました！」

肉やその他の混ぜ物をした肉の塊をこぶし小のサイズに取り分けて、一個ずつ糸で結んでキャベツを巻いていき、それを鍋の中に配置していく。

「さーて、あとはできるのを待つだけよ！」

「こつちも完了つす。あとは釜に入れて炊くだけつすよ」

ヴィクトリアはボデージュの持つ鍋の中身を見てため息をつく。

「これじゃ水が多くてぐじゅぐじゅになっちゃうわ。お粥じゃないんだから、こんなに水はいらないのよ？」

ヴィクトリアは鍋を傾けて水を少し流す。

「お米を水平にならして、手の平を広げて置いて、水がちょうど手が漬かるくらいのお水でちょうどいいの」

「そうなんすか……」

ボデージュはうんうんと頷きながらヴィクトリアの様子を見ていた。

「ヴィク姉えー、火い付けていいー？」

「はーい。ちよっと待ってね」

ヴィクトリアは素早く鍋をセッティングすると、竈の上に鍋を二つ並べた。

「じゃあいくよおー。ファイアあー！」

と、言いながらレンシアはバーナーで薪と紙を組んで作った竈へ火を付ける。

紙に火が付き、そして徐々に薪へと燃え移っていく。

「見事なもんすね」

「でしょ？ たまにはこういう大自然キャンプもいいのよ」

「圧力鍋使ってる時点で大自然じゃないけどねえー」



四人は顔を見合わせて笑い合った。

ヴィクトリアは思った。いつまでもこんな平和な日々が続いてい  
ればいいのに、と。

アフリカでは土地の権利や貧富の差を巡って未だ争いが耐えない  
人間という生き物は本当に愚かだ。自分のことしか考えない、わが  
ままで自堕落な生き物だ。

でも、そんな人間がヴィクトリアは大好きだった。

だからこそ持っている優しさや、連帯感、光り輝くような希望な  
どはアンドロイドにはない、素敵な宝物のように見えた。

だからヴィクトリアは思った。こんなに素敵な人間を守っていく  
のは間違ったことじゃない、と。

これからも人間は間違いを冒し続けるだろう。人を傷付け、環境  
を破壊し、自らの領分を広げていく。

けれども、その度に彼女が導いてやればいいだけのことだ。

アンドロイドは正確だ。故に間違っことは無い。

だからといって、その頭脳が導き出した答えが必ずしも地球にと  
ってもつともふさわしいものかどうかはわからない。

だが、人間と一緒に地球の未来を考えることは、きっと地球にと  
っていいことに違いないだろう。

彼女は信じていた。人間の優しさを。誠実さを。温かさを……。

そして、いつまでもこの星は宇宙に浮かぶオアシスであり続ける  
に違いない。

ヴィクトリアはこの星の行方を人間になら委ねてもいいと思った。

F i n n .

最終話 The Peacemaker (後書き)

ついに終わりましたね！  
こんにちは、ほーらいです。

途中で休載を挟みましたが、4月から2月まで10ヶ月にも渡る長い連載でしたね。

部品としての私、そして『I as parts』シリーズ、これにて完載です。

今のところ、アフターストーリーや続きは考えていません。  
いやまあ、今後別作品との絡みはあるんですけどね。

そのあたりはクロスオーバーということで、今後に期待してください。

とりあえず、部品シリーズの連載が終わったのでトリリス第二部でも再開しようと思っております。

現在、トリリスの第二部は全て書き終わっておりますので、あとは連載を待つだけとなっております。

だったら早くUPしろよって言いたくなりますでしょうけど、もう暫しお待ちください。

今までの連載から続けて来週から連載を再開しようと思えます。

懐かしいトリリスの三姉妹にまた会える日を楽しみにしててくださいね。

では、最後に。

途中で休載を挟みつつも、それでも辛抱して読み続けてくれた皆さん。

応援してくださった皆さん。

本当に感謝しております。ありがとうございました。

これにて『I a s P a r t s』シリーズは終了となりますが、  
まだまだほーらいの小説は終わりません。  
これからも、末永くお付き合いください。

それでは重ね重ね、皆様ありがとうございます。  
ほーらい先生の次回作にご期待ください)

-----  
以下書き足し

連載日設定ミスってごめんなさい、ほーらいです。

うっかり予約投稿の設定ミスって火曜日連載になってしまいました。  
というわけで、お預け食らってしまった読者様のために、ご愛玩あ  
りがとうございました&予約投稿ミスってごめんなさいキャンペーン  
として、設定資料のほうを公開したいと思います。

あくまでも執筆中に執筆用、つまり公開することを考えずに自分の  
ためにまとめた内容なので、ウソも多いです。

考えていたのに使わなかった設定や、考えたけど使えなかった設定、  
実際と異なった設定も満載です。

けれども、執筆環境の一部を知ってもらうことで読者の皆様と感覚  
を共有できたらなって思っただけ公開しようと思えます。

ちなみに、部品第一部から第三部までシリーズ全作の設定を公開し  
ます。

一週間に一作品ずつ公開していこうと思います。

こちらは短編小説という形でシリーズに追加するつもりです。

部品シリーズの裏の世界を楽しんでみてください。

それでは最後に。

助言をしてくださった友人の皆様。

応援をしてくれた書き仲間の皆様。

最後まで読んでくださった読者の皆様。

本当に、本当にありがとうございます。

これからもほーらの動向を見守ってやってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1462/>

---

部品としての私 『I as parts』 series 3rd story.

2011年2月8日13時55分発行